

---

# 三英雄と百年戦争

lukewarm

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三英雄と百年戦争

### 【Nコード】

N6727M

### 【作者名】

lukewarm

### 【あらすじ】

百年に一度、異界からの住人が降り立つ。

彼らは神に認められる思想を持つためこの世界に呼ばれ、加護を受ける。それ故神の使者とされる。

使者の違いは神の違い。使者は自ら「神の意思を体現せんと互いに反目し、世界に波乱を齎す。

異世界ウィール。そこで語られる伝説。それは様々な問題を伴いながらも、事実存在する。

現に今年、大陸暦千年にも異界の者は降り立った。

護神の使者たるヴァイン<sup>かがみひみな</sup>Ⅱハイゼルト。

女神の使者たる鏡氷水。

死神の使者たる名もなき魔神。

彼らもまた、この世界の連鎖に加わりそして……。

神の使者たちは力故か、欲故か、自らの思いを為すべく世界を争乱へと巻き込む。

人々はその争いを、百年戦争と呼んだ。

今代の彼らもまた、戦争を起こし人の世をかき乱すのか。

それは、神のみぞ知る。

ちなみに酷評お待ちしております

## 序章 望

それは、渴望だった。

「力、だ」

紅蓮の髪の方はそう呟いた。

足りない、足りない、足りない。

彼は怒りを昂らせ、右の拳を強く握る。

すると　ぼうつと、彼の右腕から炎が吹き荒れた。

炎は彼の肌を嘗めるように這い上がるが、その熱気は彼の肌を焦がさない。

そうして立ち昇る紅蓮の炎は、あたかも龍のように空へと飛翔する。

だが、

じゅわ

炎は幻だったかのように消え去り、僅かな熱気ばかりが後に残った。

足りない。力を試す場が、足りない！

世界は平和だった。

魔物という存在は遙か昔に殲滅され、戦争というものもありはない。この世界には、戦争をするほど人が残っていないのだ。今では村が世界各地に点在するだけ。住人たちもその殆んどが仲良く平和に暮らしている。

青年には、力があつた。

炎を繰る力が。

しかし、その力を使う場所はない。

この世界の全ての者がそうだった。

地、水、火、風、もろもろ、数多の力あり、数多の者が操れど、その力は使われることなく消え去っていくのみであつた。

青年が望むのは、力を使う場所。  
自身の存在証明。その為の舞台。  
しかし 男は、神の声を聞いた。もりがみ護神の声を。  
『秩序を。護れ、彼の者らより ！』  
彼は白き光に包まれる。  
なんなんだろうねえと、どこか平然と周囲の景色を眺めながら。  
そして

それは、絶望だった。

長い黒髪の女性がいた。  
彼女は地べたに座り、放心している。  
ぴちちと、液体の滴る音。  
ぴちち、ぴちち、ぴちち。  
ぴちちぴちちと液体はなおも滴り落ちる。  
紅い紅い血。

日常。見るはずもない、大量の血液。  
出所は、彼女の隣で電柱につりさげられるように浮く女性。  
いつも隣にいた、大親友。  
それが今、死を前にして助けてと、何かに切に願い、また、何も  
ないことに対して怨嗟の声をぶつけていた。  
それは、滅多にないが、稀にはあること。  
天候は晴れ。視界は良好。人通りは少ないが、視界は普通に開け  
ている道の一角。

そこで後ろから高速で突進してきた車に気付かず気付かず、道路  
側に面していた少女が撥ね飛ばされた。  
言ってしまうばただの交通事故。  
嘆き悲しむべきではあるが、ただの。  
それがどうしてだろう。

何が良かったのか　あるいは悪かったのか。

車は斜め後ろから突っ込んできて少女を撥ね飛ばす。少女はすぐ先の電柱に衝突。

その後車にサンドイッチされる。

電柱への衝突時に頭がそれ、即死、あるいは気絶できなかったのは不幸かもしれない。

電柱と車に下半身を潰され、血を流しつつも生き残ると言う惨事。しかし長くはもたない。

潰れた少女の体は、あまりの出来事に痛みを返さない。下半身が丸ごと潰れているのだ。それも仕方ない。

残された少女も救急車は呼んだが、間に合わないことは百も承知。気休めだった。

そう、問題だったのは、死を前にして意識があるというその一点。達観した者、生きる意味の見出せない者、その死が意味あるものだった者。

そんな人間ならば、ことごとくいう状況でも安らかに　看取る者へ感謝の言葉をかけるか、黙って眠るだろう。

それをまだ、十八の少女に期待すると言うのは酷なものだ。

死に逝く少女は嘆く。この不運を。

死に逝く少女は求める。自らを救いうる何かを。

しかし何も起こらない。

奇跡は降りず、不運は覆らない。

そして死ぬ。

残された少女は、絶望に浸る。

私のせいだ。私が何もできなかったから。私が何かできればユキは……！

耳に残るは怨嗟えんさの声。

『なんで私がこんな目に！　なんで私が死ぬの！　なんで！？　なんで！？　なんで！？』

人一倍責任感の強い少女は、死んだ少女の言葉を、額面以上に受

け取ってしまう。

何もできなかった私を責めてるんだ。何もしなかった私のせいで死んだから。今までずっと一緒にいたのに。こんなときだけ私だけ助かって。一人だけ生きる私を恨んで。私が、何もできなかったか。何もしてくれなかった私を、恨んでるんだ……

その悲痛な叫びを、不幸を呪う嘆きを、自らへ向けたものだと思ってしまう。

事実はどうあれ、思ってしまえばそれは彼女の中で事実となり絶望する。

忌むべき対象の違う呪いを、か弱き心が受け取ってしまう。

彼女を無自覚に襲うは死の恐怖、理不尽な暴力、ハードラック。それらが彼女の根幹を揺らし。

ガタガタに崩れた精神は、呪いを正面から受け止める。

そこへ囁く女神の声。

『平和を。訴えて、彼の者らへと　！』

彼女は薄紅き、桜色の光に包まれた。

彼女は何も聞いてはいなかった。血溜まりの中で、彼女への懺悔<sup>ざんげ</sup>を口にしていたから……

そして。

それは、欲望だった。

喰らう、喰らう、まだ喰らう。

その獣暴れるところ、命の気配、断つ。

その獣鎮まるところ、命の気配、無く。

その獣動かぬ世界、生命、存在せず。

獣神。

魔獣の王。

死の門番。

気高き黒い、魔の主。

魔神。

そこは無人。

あるのはただ、散らばる肉と、壁を彩る赤の血と。

アカい川、アカい大地、アカい壁。

赤。

紅、  
朱、  
緋！

あかア力赤紅朱緋あかア力赤紅朱緋あかア力赤  
紅朱緋あかア力赤紅朱緋あかア力赤紅朱緋あかア  
力赤紅朱緋あかア力赤紅朱緋あかア力赤紅朱緋あ  
かア力赤紅朱緋あかア力赤紅朱緋あかア力赤紅朱  
緋あかア力赤紅朱緋あかア力赤紅朱緋あかア力赤  
紅朱緋あかア力赤紅朱緋あかア力赤紅朱緋あかア  
力赤紅朱緋あかア力赤紅朱緋あかア力赤紅朱緋。

獸神はその十メートルを超える体軀を萎ませて、一人の人間を形作る。

男のよう  
女のように。

若いように  
老いたように。

強そうで 弱そうで。

そんな、細いよう　太いよう　低いよう　高いよう  
中肉中背、中性的な顔立ち、肉付きのヒトとなる。全てを混ぜ合わせたかのように、平均的に　普遍的に。

そんな獣が従うのは、自らの欲望だけだった。

それを止めることは、ナニモノにも敵わない。

そんな欲望の塊へ。死神は語りかける。

「混沌を。殺せ、彼の者らを！」

それは黒き闇に覆われた。

ヒトの姿をしたそれは、どこか楽しげに、どこか愉快げに、肯定せず否定せず、笑みを静かに浮かべていた。

そして……



『『そして世界は救われる』』  
彼らはそれぞれの世界から、姿を消した……

## 序章 望（後書き）

……まさかの序章入れ忘れ。

## 一章 そして戦乱の幕開ける

失われし伝承 創世神話

混沌より生まれし生き物。それ即ち神なり。

一に生まれしは地母神。混沌とは、そこに在るだけの原初。博愛の精神を持つ地母神は、無軌道不規則な混沌に法則を作ること、新たな生命の誕生を促し、その礎とした。

二に生まれしは創造神。自由を核とする創造神は、混沌を用いて有象無象のモノを創り上げた。創造神に創りしモノには、生命までも含まれる。

三に生まれしは天空神。支配を根幹にする天空神は、無秩序たる混沌を嫌い、分離し管理することで秩序を齎<sup>もたら</sup>した。しかし混沌の分離により、神が新たに生まれることはなくなった。

三神、それぞれ他の神に対することはなかったが、一つの出来事を境に争いを始める。

その出来事とは、ヒトの誕生。

創造神の創り上げたヒトというカタチ。

それは、天空神、地母神の姿そのものだった。

ヒトの雄のカタチが天空神、雌のカタチが地母神。

そして創造神はどちらでもないカタチであり、それを再現するモノを創造神は創らなかった。

二柱の神はそれに怒りを表し、反駁するように創造神も怒りをぶつけた。

地母神は創造神の創造する生命を不和の象徴とし、反目す。

創造神は天空神の支配する属性を不完全な根源とし、反目す。

天空神は地母神の管理する法則を不要な秩序とし、反目す。

こうして神は、世界を舞台に戦いを繰り広げた。

その結末がどうなったのか、誰も知らない。

伝承 百年戦争

百年に一度、この世界に三人の英雄が降り立つ。

一人は護神もりがみの使いたる天使。

一人は女神に選ばれたる神子。

一人は死神の生み出したる悪魔。

護神は理想の国家を、女神は平等たる世界を、死神は全ての破滅を、願ひ、英雄を放つ。

英雄は異界の住人。

それぞれ神の目に適うだけの思想を持ち、強い望みを、感情を、放っていた者たち。

彼らはこの世界にない知識と力を有し、神々の祝福を受けて世界に降臨する。

また英雄には、それぞれ二人の僕しもへが傍につき従う。

護神は属性を司り、女神は法則を操り、死神は生物を扱う。

英雄はそれぞれ対応する神の力を持ち、僕らは英雄にない力を宿す。

しかし僕も、英雄あつてこそ。僕は英雄の持つ、神の剣を介してしか力を振るえない。

護神の剣、コールブランド。

女神の剣、クラウ・ソラス。

死神の剣、ダインスレイヴ。

英雄は神の想いを叶える為に僕を求め、神剣を求め、他の英雄と戦うこととなる。

## 一章 1

それは、真つ白な光だった。

白き清浄に身を包み、生まれ落ちたのは赤髪の男。

服は祭祀服に似たもの。しかし細かなデザインは違い、通気性と動きやすさを上げるためか、各関節部は太い糸が交差するような形で先の袖をつけてある。色は紅蓮。布で覆わぬ顔、手の甲や関節部は、健康的な褐色肌を見せていた。左の頬には炎を模したるタトゥーが入れてあり、彼の印象は非常に赤々しい。

彼が降り立ったのは、ある街の中心だった。

突如現れた男に、人々は驚き、遠巻きに眺めるばかり。降り立った男も同じく、その場を動こうとしない。ただ冷静に周りを眺めるだけ。

しばらくして、沢山の兵士たちがやってきた。

彼はそれを見ると、静かに横へと手を伸ばす。

頬が僅かに釣り上がり、炎のタトゥーが歪む。それはあたかも炎が揺らいでいるかのように。

彼の腕の先、悪趣味ともいえる金の像があつた。その像、体はどこかふくよかだが、頭は痩せの美形。像の元となった者を見ずとも、無理に変更したことがありありと分かる。

彼はそれを掴んで力を込める。

刹那　彼の腕から溢れ出た火炎が、黄金の像をゆっくりと炙る。像は溶けはしないが、炎が全体に纏わりつくよう蠢いた。

燃え盛る像の横、彼はその火力を弱めぬまま高々と声を張り上げた。

「ハハハハハ！　来いよてめえら！　俺を楽しませて見せろ！！」

像を炙る炎が、彼の右腕に収束する。形作るは龍が如き雄々しさ。紅蓮の炎が、彼の腕へとぐるを巻く。

型式壱、灼龍の孤影。

それは、彼の一族が築き上げた技だった。  
紅蓮の一族。

炎の力を持つ者同士をまぐわせ、純潔なる純血を作り出す血統操作。それを自ら行い続けた、炎の申し子たち。

その一族、最後の一人が彼、ヴァインⅡハイゼルト。  
戦いを求める、焰の戦士。

そうして彼は

丁重に迎え入れられた。

「アア？　それで俺を『お持て成し』したってかア？　ざけんな。  
それなら強い奴を呼んで来い」

苛立ち紛れ、憤怒の形相で対面に座る、中年の士官を睨む。

彼が広場で暴れてから、二時間が経過しようとしていた。

兵たちは彼の生み出す炎で熱波を送ると、それだけでたじろぎ戦おうとしない。これじゃあ仕方ないからと、一度炎を止めて殴りかかっていけば、剣や槍の穂先は向けどもかかってくる様子はない。

我々は対話しに來たのですと言う、彼らの言葉に耳を傾けるまで一時間。その言葉を信じ、従うまでが一時間。それまで彼は、近く  
の物を手当たり次第燃やしていた。

そんな天使に必死で弁明する士官は、蛇に睨まれた蛙のように縮こまり、平謝りせんとする勢いだ。

彼はそんな士官を見ることなく、豪勢なソファに背をもたれさせて天井を仰ぐ。

ガラスのシャンデリアに、金の紋様の施された天井。壁にも金糸で編まれたレースが掛けられており、部屋全体の印象を明るく豪勢に仕立て上げる。

壁に飾られた額縁の中には、耽美な風景画に交え、あの黄金像の男がいた。何故か絵の中にあっても偽りの凛々しさしか感じない、下卑た男の肖像画。描き手は非常に上手いのだろう。その男の頬の

釣り上がり方は情欲を満たそうとするかのように卑しく、目の輝きは深い所になるほど濁っている。表面的には凛々しさが見られるというのだから大したものだ。

彼の座っているソファは赤い革張りで、人が五人座ってもスペースのある大きなものだ。座り心地も快適の一言。しかし対面に座る男は、そのソファの座り心地を堪能するでもなく、小さく縮こまっている。二人の間にあるテーブルは天板も脚も全てガラスでできている。それなりに豪華な物のはずだが、彼は知らず拳をそれに叩きつけた。

「もういい！ とつと国王サマとやらに会わせる。俺は戦いがしたいんだ」

血気逸る青年はすぐさま席を立ち、扉へと向かう。慌てたのは、対面に縮こまっていた士官だ。

「な、なりません！ 国王様の命令は絶対であります！ いかに天使様と言えど、無事でお済みにはなりません！」

士官の脳裏を掠めるのは保身だ。国王の命で彼を部屋にとどめるよう言いつけられた士官は、命令の失敗による罰を極端に恐れている。それは目の前で乱暴な物言いで行動する、力の化身であるはずの？天使？より優先順位の高い 否、天使より恐ろしい者への忌避からくる行動であった。

彼はそんなことを察しているのかしないのか。平然と士官の腕を払いのけ、扉のノブを回す。外には二人の兵士が立っており、出ようとすると彼を留めようとする。苛立った彼は、力を使って威嚇した。手から伸びた炎が扉を燃やす。

豪勢な作りに合った派手な扉は、彼の魔手によって容易に炭化し、崩れ落ちる。

「お前らもこうなりたいかよ？」

驚き二の足を踏む兵を横目に、彼は廊下を駆けだした。

彼の応対をしていた士官は、扉の消失にヴァインを止めることさえ忘れ青褪めていた。

そして数分。走り回り、兵士を撒いた後。

「本当に……を生かし………か!？」

扉越しに、声が聞こえた。彼は足音を立てぬよう、そっと近づき、耳を当てる。

「ああ。これは決定だ。今の戦力でこの『百年戦争』を乗り切ることは至難。これは貴君の見解でもあったはずだ」

「ですが、降り立つと同時に暴れまわった荒くれ者ですよ！ 王の像は燃やすわ、呼び出した兵を問答無用で殴りつけるわ無茶苦茶です！ しかも前線を希望しているそうじゃないですか。軍列を乱され、行軍が遅れるのが目に見えています！ 他国に利用される前に殺すのが一番」

「これは決まったことだ。それに百年戦争を英雄なくして勝てるはずもない。いかに我々の足をひっぱろうと、護神に選ばれし英雄なのだ。他の英雄とも戦ってもらわねばならん。話は以上だ。私は軍の編成に取り掛かる。イラレージュ副団長。王にこちらの見解を」

「……分かりました」

洪々と言うように動く足音。

彼は命令がかかったときにはすでに、軽やかな動きで足音させずに廊下を走り、身を潜めていた。そして出てきた副団長とやらの後ろをつける

いずれ追手が増え見つかることは確実と、彼は？おもしろそうなの方向へと動いたのだ。

そして何の偶然か、後を追っていけば誰とも会わずに王がいるであろう玉座へとたどり着いた。今は直前の曲がり角で様子を窺っている。

……わざとやってんのか？

道中そんな考えが頭をよぎったが、彼に確かめる術はない。何が来ようとやってやる、そんな意気込みで辿り着き、もう乗り込むことを決めた。

「いようようよう、国王サマ。ご機嫌麗しゅう」



扉の横に詰めていた衛兵の警告を無視し、実力行使も華麗にかわして扉を蹴り開く。そして開口一番それ。

報告が終わると同時、だったのだろう。王の下、絨毯へと頭を下げていた兵が立ちあがるところだった。

そこへ嬉々とした面持ちで悠然と入る。後ろから追うように入ってきた衛兵二人が剣を突きだすが止まらない。捕まえようとしても振り払われてしまう。

玉座に座っていたのは、これまで幾度か見た下卑た男。やはり像や絵画は補正がかけられており、男はふくよかという言葉では収まりきらないほど贅肉だらけ。顎は二重三重と肉が重なり、首が肉に覆われる。それだけでも見目悪いが、顔の美醜も針は断然後ろに振れる。パーツを見ても綺麗には思えず、だからといって配置が美しいかと言えば中央に寄りすぎて滑稽だ。頬は僅かに釣り上がっており、素でそれなのか。印象としては卑しい笑みに尽きる。また、玉座という場所に似合わぬ色気を持つ美女たちを、周りに何人も侍らしていた。女性たちの顔は綺麗だが、その顔に満足げな表情はない。なんだ、と王のそばに控えていた、貴族だろう取り巻きが吠えた。皆王に負けず劣らず卑しく醜い。

「なんだ貴様、無礼な！」

「控えろ！ お前はまだお呼びじゃない！」

「天使風情が！ ここは王の御前であるぞ！」

彼はそんな陳腐な暴言も突きつけられた剣も意に介さず、一笑に付すと前へ進む。

扉の内に控えていた兵士も、彼を押さえようと進み出る。構えた剣を彼の喉元へ、威嚇する意味も兼ね交差するように突きつけたのだが、彼はなおも不敵に笑うだけだった。

「ふん、刃を向けるのか」

そして彼は、一步、踏み出した。

ジリ、と、反射的に兵たちが下がる。

彼らの心中にあったのは先ほどの報告と、その劣勢を覆しうる戦

力を、自らの手で無為にしているのかという不安。そして神遣わす者、天使という存在への畏敬。

この国は今、危うい。

降ってきた、まだ信用できぬ天使に頼るほどには。

ヴァインとてそこまで読んでいたわけではない。

ただ、なんとなく。

扉の外に詰めていた者と、内に詰めていた者の目線や態度など、ちよつとした違いから。

勘、だ。

彼の動向を見守っていた王は、ようやくはつきりとした意志で下卑た笑いを浮かべた。それを隠そうとする気もないようで、含み笑いと共に言葉を発した。

「イラレージュ。その兵四人の首を刎ねよ」

その男、腐つても王か。

下卑た顔、他を顧みぬ凶行、慕われぬ性格。

それであつてなお衰えぬ、命の威圧。

支配者だけが持つ言葉の魔力。

場の空気は静まり返る。指し示された四人の兵だけならず、他の兵や王の傍に侍る美女たちも顔を恐怖に染める。顔を変えないのは、その命が下されないと信じ切っている貴族と、そして執行者である緑髪の男、イラレージュ。

彼は進み出ると、怯え後ずさる兵へと肉薄。

彼は腰に下げている長剣を抜き放つと、目にも止まらぬ速度で一

閃。ふわりと立ち位置を変え、ヴァインの後ろに周ると更にもう一閃。

斬

瞬く間に四つの首が、宙を舞った。

普通「剣」と称される武器は、その「斬る」というイメージからはかけ離れ、「叩く」という行為を主眼に作られる物が多い。戦場において鎧を着ずに戦うものいなければ、鎧ごと切断できる刃もあ

りはしない。それならいつそ、と、刃こぼれしやすい斬撃の刃より、刃こぼれなども関係ない、打撃の刃を作り上げるが当然。斬ることが全くてできないというわけではないが、切れ味は想像するよりはるかに鈍い。

イラレージュと呼ばれた青年が使った長剣も、その例に漏れてはいなかった。王に目されるほどの兵。副団長の位。さすがに剣は一般のそれとは作りも輝きも違ったが、やはりそれも斬撃よりは打撃としての意味合いの強い、砥がれていない刃のはずだった。

しかし、彼はやってのけた。

いかにして為したのか？

青年はヴァインの後ろで血を浴びた刃を下に一振り。付着した血液を床へと飛ばす。その時べちゃと、血だまりに落ちる物があつた。肉塊。

肉塊である。

彼は打撃を主眼として作られたはずのその長剣で、圧倒的<sup>りやうてき</sup>臂力を以<sup>も</sup>つて斬撃を為した。それはあくまで打撃の一撃。軽やか細身な外見とは裏腹、豪力が為す、引き千切り。

ヴァインはそれに薄ら寒いものを感じながらも、静かに笑っていた。

「オーケーオーケー。いいねえ、お前」

彼はバカにしたような拍手をしながら、足元に転がる死体から剣を拾い上げて振り返る。

「それじゃ、始めようか」

彼は剣を左手に掴むと、あたかも格闘技のように空いた右拳を握り、半身に構えた。足は左が前。薙ぐより突くに特化した、フェンシングの構えに酷似している。

まあ炎を纏ってねえが……型式参、龍剣の舞い。

「王よ。この不敬者への処罰をお許してください」

しかし間は僅かに数歩。腕を伸ばせば十分に届く距離。ヴァインは前に出した足を滑らせ、王へと指示を仰ぐ男へ斬りかかる。

「では……」

緑髪の男は剣も構えず屈んで避けると、数歩の距離を取った。

「そのプライドを折ってやれ。お主に負けるようなら、教育の必要がある」

王の言葉に、その青年は酷く落胆したような顔をヴァインへと晒すが、すぐに元の無表情へと戻り、腕の力を抜いて剣を下げた。

ヴァインはこの状況を動かすまいと、また一步前足を進めて突きにいく。

対する青年は、不動。

彼の突きが届く直前まで、目を彼から逸らさなかった。

瞬転し、動く青年。

首を横へと振り、紙一重の動きで刃を躲す。鋭い突きに、僅かばかりの皮と髪を持つて行かれたが。

それで終わり。

青年は下げた状態から振り上げた剣で、伸びきった腕の先、剣の腹へと思い切り打ちこむ。

ヴァインにもその動きは見えていた。しかしそれでも、伸びきった腕は上手く動いてくれない。青年の速度は、そんなのろまな彼をあざ笑うかのように、一撃で、その量産品を折った。

自身の鼻先さえ掠める至近の斬撃。それを量産品とはいえ一介の武器を破壊する力、速度を込めて振り切ったのだ。まず軌道からしてそんな力を込められるはずもなく、仮にできたとしても、自身の鼻先を掠めるのだ。並みの者ならやろうとは思わない。

しかし、青年は違った。

抜きこんでた力、剛胆な性根。

二つを持ち合わせ、それを繰る。

打ち破られた彼はそれを見て驚愕の表情を露にしたが、すぐに頬を釣り上げると、呵々大笑と口を大きく開き、天に向かって吠えた。

「アハハハハハハハ！ おもしろい、おもしろいよお前！」

ハハハハハハハ……

そして、一月が経った。

## 一章 2

それは、桜色の光だった。

ピンクの穏やかなる光。それに包まれて現れたのは、茫然自失とした女性。膝から下は血にまみれ、長い黒髪も先が紅く染まっている。顔面蒼白。体は寒さに凍えるように震え、目は虚ろでありながらも、口は小さく何かを呟いていた。彼女はそんな、今にも倒れそうな状態で舞い降りた。

降り立った場所は、大陸中央に存在する国ミールハイト。その首都郊外。

風吹く草原の下、彼女は誰に見られる訳でもなく、降り立ちそのまま崩れ落ちる。

彼女の意識は、とうに失せていた。

それでも口は、呪詛のように何かを呟き続ける。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。

「おはよう」

神子、鏡氷水の朝は早い。  
かがみひみな

朝日がようやく差し込む頃に起き出すと、剣を持って訓練場へと足を運び、教えられた型を幾度も反復して体に刻みこむ。

彼女が基本を終える頃合い、時間にして一時間ほど。ようやく二人目の利用者の姿が現れる。

現れたのもまた、女性だった。

彼女の名はアリルクウェート。神子氷水の師にして友だ。

氷のような美しい外見に、感情を大きく見せないポーカーフェイス。薄青い髪を肩で切り揃えているが、地毛である。地球に存在しない自然色であっても、この世界では普通とまではいかないが、そ

これまで珍しいものではないらしい。目も同じような薄青で、白い肌に薄い青色の髪と目。その彩度の低さが、彼女の印象をどこか希薄に、どこか儚げに見せていた。

そんな神秘的な彼女は、同時にミールハイトの百の兵を従える兵長でもある。

彼女が従える兵は、他の兵团とはまた異なる特殊な者たち。魔道騎士と呼ばれる、魔術と武術の両方に長けた騎士。戦場に於ける盾の役割を果たす騎士と、矛の役割を果たす魔術師。その両方の特性を備えた、選りすぐりの兵

というのは、いわゆる方便だ。実態は魔と武、単品ではただの一人兵にしかなりえない者たちが、苦肉の策として選んだ最後の出世道。本当の意味で選りすぐりの、魔と武を活用している者は、団長ア Ril と、一部の側近たち。他の者たちは、両方ともそれなりには使え  
るが、それなり以上には使えない、半端者たちだ。

ただ、そんな彼らでもそれなり 皮肉なようだが、それなりの兵たちによる、それなりの成果は上げられている。

彼らは遊撃隊だ。戦場を駆け、敵の軍列を乱し、不意を突いて戦果を上げる特別部隊。魔と武による臨機応変さは、ただの騎兵や戦士たちの軍よりはるかに融通が利く。

あくまで一遊撃隊程度の戦果しか上げてはいないものの、その機転やコストパフォーマンスの面から、半ばなんでも屋のように利用され、注目されていた。

そんな百人長 もとい、魔道騎士団長の下には、一人の見習い魔道騎士が預けられている。

それが、神子氷水。

彼女がア Ril の許に預けられた理由<sup>わけ</sup>は、二人の出会いに遡る

眼を覚ました氷水が最初に見たのは、木でできた天井だった。

「ッ！」

跳び起きるように上半身を起こす。

思い出すのは気を失う前の自分。

血を浴び、放心する自分だ。

凍りついた空気。自らが発した悲鳴。生き残った自分。

そして恐怖。

な詰られ責められ蔑まれ。さげす生き残った自分へ、親友から投げかけられる言葉。

潰れ血を流した人間。

『ナンデ私ガ』

呪い。

親友の言葉が彼女を責め立てる。

あの時、自分は死ぬべきだったんじゃないのか。

そんな考えが頭を過ぎった。

体感的には数秒前の数時間前だ。

引き延ばされた刹那は、彼女を自責の念や罪悪感によって圧迫する。

空回る思考。頭は同じところを延々と繰り返す。

ナンデ私ガ私は死ぬべきナンデ私ガ死ナクチャなんで私は生き残ったのナンデ私ダケなんで私がナンデなんでナンデなんで？

「あ、ア、あッ、あ……っ」

頭を抱え、虚ろに血走った眼で呟く氷水。正常に呼吸もできず、最後には口だけではふはふ言っている状態だった。

そこへ割って入る声。

「静かにしてよね」

凜とした、幼い声が空気を打った。

「おちおち本も読んでられないじゃない。わめくなら外でしてきてよね」

半狂乱だった氷水は、その声に徐々に冷静さを取り戻していく。眼は生氣を取り戻し、手は呼吸を整えるように胸元へ。すぐに落ち着き、汗でびっしょりの顔を上げた。



正面には何もない。左は壁だったため右手を向くと、少し離れたところに金の髪に青い目をした少女がベッドの上にいた。上半身を起こし、座って本を読んでいたようだ。手に持つ本は端々が破れ黒ずみ、有り体に言えばボロボロで、何度も繰り返し読んでいることを窺わせる。

氷水は一瞬面食らうが、倒れる前の状況を思い出し、病院かと思いを巡らす、が、さすがにそれはないと頭が否定する。

部屋は清潔の白から程遠い、薄茶けた木でできている。部屋も小さく、仕切りカーテンなどはまるでない。臭いは病院特有の鼻に付くものでなく、木の湿った香りだ。ベッドも硬く小さく、シーツが張っている訳でもない。薄い布が敷かれているだけ。どう考えても病室ではないだろう。結論付けてから少女に問う。

「あの、ここは……？」

躊躇いがちに訊く氷水の問いに、少女は詰まる様子もなく、すらすら答える。

「ウィール大陸。その中心に存在する国、ミールハイトの首都ミ―ティアよ。あなたは異世界からの人間で、この世界に召喚された。ここまでは大丈夫？」

氷水が返事を返さないのを見て、本を閉じて向き直る少女。その時「はあ……」と軽いため息を零したが、変わらず続ける。

「この世界には伝説があるわ。『百年に一度、異世界から「英雄」を呼び寄せる』って言うね。簡単に言ったらあなたはそれ。英雄よ」突然？英雄？などと言われても、分かるはずもない。氷水が呆けた顔を晒していると、少女もそれを察したのか、言葉を止めて考える。

が、思い浮かばなかったか、しばらく無言が続き……

「あ、お姉さま」

扉を開けて入ってきた人影に、少女はそう呼びかけた。

入ってきたのは薄青い髪と目をした女性。アシルである。

彼女は少女に「ただいま」と一声かけると、起きていた氷水を認

めて隣にあつた椅子に掛けた。

「その様子だと体は大丈夫のようだな」

心配されたことに、反射的に「あ、ありがとうございます」と詰まりながら返すが、「大したことじゃない」と笑って返された。

「ミリル。どこまで話した？」

ア ril は少女を呼ぶと、少女はむくれたように答える。

「全然ですわ。理解できないという顔をされましてよ」

しょうがないさと苦笑すると、彼女は氷水を見て挨拶をした。

「この国、ミールハイトの魔道騎士団長を務める、ア ril 〃クウエートだ。あの子は妹のミリル。私が倒れていたあなたを見つけ、ここまで運ばせてもらった。まずはあなたの名前を窺いたい」

居住まいを正し問うア ril に、氷水は礼を失することなきよう答える。

「えと、鏡氷水、です。あ、外国の方ですね。鏡が性で　つてえーとあれ？　言葉とかが分かります？」

驚き今更のように問い返す氷水に、再び苦笑するア ril と、嘆息するミリル。

「大丈夫だカガミ殿。まずは……そうだな、落ち着いて考えてほしい。自分が今まで何をしていたか。そして今ここにいることに心当たりは？」

思い出すのは自責の念。

親友の放った呪いの言葉。

思考が、ぶれる。

「っ……………」

気がつけば。

これは、罰だ。

直感的に、彼女はそう判断した。

罰。親友を助けられなかった罰。自分だけが生き残った罰。親友を見捨てたも同然の行為をした罰。親友を犠牲にしたも同然の行為をして生きた罰。親友を見捨てた罰。親友を犠牲にして生きた罰。

親友を殺した罰。親友を犠牲にしても生き残ろうとした罰。いつの間にか内容はすり替えられ。

真実はまたも遠ざかる。

彼女の中で根付いてしまった事實は、答えのないこの世界では真実となり。

彼女は逆に冷静に。

「心当たりは、あります。これは……罰。私への罰です。私は元の世界で罪を犯しました。それへの罰。私にできることは言うてください。私は罪を償います」

それは彼女の強い責任感が生み出した防衛機制か。罪とし罰とし、その呪いを償うとする。根底にあるのは、親友に恨まれたというその一点。それが怖くて、何よりも恐ろしくて、でも、逃げることは許されなくて。自分が殺してしまったと、そう錯覚することで恨むという行為を正当化させ、そして償うという手順でそれを消化する。防衛機制。つまりところそれは、「逃げ」。

強い責任感は、弱い彼女を立ち向かわせることを良しとしなかったのだ。

この世界で身寄りのない氷水はア ril から話を受け、柔軟に、砂漠が水を吸うがごとく知識を得て順応していった。結果彼女は罪を償うため、また恩を返すため、神子と言う役割を果たさんと彼女の許へ、身を寄せることになったのだ。

氷水の挨拶に、ア ril も「おはよう」と言葉を返す。

朝早くから訓練していたようだが、これでもまだ七時くらい。訓練時間は短い。

この世界は、地球のそれとはまた違う法則で動いている。一年四百日、一日二十二時間で動いているカレンダー。地球よりも軽い重力。地球では存在しない あるいは使えない 魔法。

違った法則で動く世界に、氷水の法則はことごとく覆<sup>じょうじき</sup>される。

別の法則で動く彼女には、他の人たちが使う魔法の類は一切使えない。しかしこれは、もともと素質のある者ない者分かれるため、できなくともとりわけおかしいこと、あるいは弱いということではない。それどころか彼女は女神の加護により、一つの法則を操る力を得ていた。言語も同じく、全く違うものでありながら、加護によって相互に通ずることができていた。

二人が無言で稽古をするが、氷水がしばらくして剣をしまった。「はー、疲れた」

彼女はそう言いながら、脇にある椅子に座って汗を拭く。艶やかで長い黒髪が揺れ、彼女の美しい姿を映えさせる。元はそれなりに洒落た服を着ていたものだが、今となっては目の前で訓練するアリルと同じような、飾り気のない薄いグレーの服とズボンという簡素さでいた。この世界を自身の罪の証と考える氷水には、それは当たり前のものだった。

氷水が座ったのを見て、アリルも同じように剣を収めて隣へと座る。

「始めた頃とは見違えたな」

涼しい顔をして言ってきたアリルだが、彼女も後数時間すれば疲労が見えてくるのを氷水は知っている。アリルは氷水の常識からすれば、人間の範疇に　強くはあるが　十分収まるレベル。今のところ、人外と喻えるに相応しいヒトに出会ってはいない。

「ありがと。でも私としては、もうちょーっと強くなりたいかな」

「どうして？」

「単純なこと。実戦、したことないからなあ……」

氷水は遠くを見つめるように、少し顔を上げる。

「私はまだ、人を殺めたことあやがない」

「私も子供じゃない。この戦争を終わらせるには必要だと思う」

「だけど、理解できても納得できるかは別」

「いざという時、体が疎んで動けないかもしれない」

「恐怖に駆られて動けないかもしれない」

「人を殺すのが怖くて、ア ril たちを見殺しにしてしまつかもしれない」

「そうならないよう、できるだけ体で覚えて、いざという時にも動けるようにしておきたい」

「でも、人を殺すのが当然にならないよう、気をつけなきゃならない」

「神子の役割が平和、平等の為なら、絶対に忘れちゃいけない」

「だから、今は少しでも強くなって、皆を守りたい」

彼女の拙い独白に、ア ril はそつと目を閉じた。

「……眩しいな」

「え？」

「お前だよ。戦争なんてものから遠いところからやってきたのに、戦うことに悲観もせず、積極的に前へ進む。人々を救おうと、最善の道を選ぼうと努力する。私はお前が眩しいよ、ヒミナ」

彼女の微笑みと褒め言葉に、背中がかゆくなって、口早に取り繕う。

「そ、そんな大層なものじゃないよ！ 私だって死ぬのが怖いから！ 罪を償うためにやってるんだから！」

その慌てた姿に、ア ril は「ふふ」と笑った。

「隊長、神子さま、おはようございまーす」

そこにちょうどよく顔を出したのは、十人近い男たち。それぞれの手には得物が握られ、背中には青いコート。服はコート以外統一性がない。髪型も皆違<sup>みな</sup>う。

その青いコートは、ミールハイトの魔道騎士団の基本兵装だ。

彼らはその特異な戦闘形式から、一定の型を持たない。それは戦闘だけに言えることではなく、髪や服、果ては態度にまで及ぶ。戦場で邪魔にならなければそれでいいを信条に、髪型などの規律は緩く、普段の素行も性質が悪いわけではないとも言い難い。公的な配布物は青いコートのみで、それも外部任務の折には外されることも多い。あくまで格調や形式、見栄えを優先する町での装備、

目印で、戦争のような乱戦でもない限り不要。所属を示すということとは力を示すということであり、彼らの扱う任務はそういう脅しが必要ないが武力が必要という特殊なものだけ。いつもは町の警備をする穀潰し<sup>こく</sup>でしかない。

「ああおはよう。トレインはどうした？ いつも一緒にいるだろう」  
アリルがそう訊くと、集まったメンバーは口々に言う。

「あのバカ腹壊しやがって」

「朝からトイレにこもりっぱなし」

「なんか悪いもん食ったっけ？」

「あれじゃね？ 厨房に捨てられてた骨付き肉」

「あー、あつたな。止めるって言ったのに」

軍の上司との対応であるのに、そこには敬意や遠慮といったものは存在しない。

それを受けるアリルもまた、気にする素振りなく話を続ける。

「そうか。訓練には間に合うか？」

「間に合うんじゃないですか？」

「まだ一時間近くあるしな」

「あれ、つか俺たち訓練熱心？」

「いや、戦争が近いからだろ」

軽口の応酬をしながら、彼らは自らの得物を振り回し始める。魔術は体内魔力の消費という側面もあり、実感的に疲れやすいため自主訓練で使われることは多くない。彼らは剣や槍を振り回して使い心地を確かめている。

休憩していた氷水も、それでは訓練再開と立ち上がる。すると手近にいた一人が声をかけてきた。

「みーっこさまー。俺と試合しましょー。俺模擬剣でやるんで、かかってきてください。このハンデを乗り越え俺が勝ったら、今晚どこかお食事に……」

「待て待て待てーい！ それなら俺と」  
「いや俺と」

「なら俺」

「俺は隊長派ですぜ！」

俺もー、とまた声上がる。隊長も神子（氷水）も苦笑するしかない。

こうしていつも、ばかな掛け合いが始まる。今来ていない他の団員にしたってそうだ。彼らにとつてここはどこまでも居心地のいい職場。他の団とは違い、他を抜きでる才持つ者はいない。ア ril が若くも該当するレベルだが、それでも達人と呼べるレベルではない。前例がないというのも理由の一つだろう。それこそ過去の天使や神子、悪魔たちがその種の達人とも言えるため、どこまでいっても未熟者扱いなのだ。

それ故戦場においては、敵を翻弄するための連携が必要とされた。遊撃隊だからこそ、派手さに欠ける動きでは仕事が無せないのだ。そういう側面もあり、意図的にも彼らの気質的にもこのようなアツトホームな雰囲気でした。彼らにはその実力で他を率いる者はいないが、その雰囲気ですり足りない実力を補っている。その雰囲気からなる連携が持ち味なのだと、氷水は最近になって気付いた。

そんな愚にも付かないことを和気藹藹とやっていたのだが、その穏やかな雰囲気は走りこんできた人の言葉にかき消された。

「大変です！ ヴアル＝ルージエの進軍開始されました！」

その声に、きつ、と目を鋭くさせるア ril と団員たち。

氷水はその国のことを、なんだっけ、と思います。

ヴァル＝ルージエ。

前百年戦争の勝利国。

百年前『天使』を引き連れ、武力による侵略で他国を圧倒した軍事国家。

世界統一を果たすが、王とその側近たち、そして天使が行うあまりの独裁政治に国民の大陸全土の人々の不満が溜まる。結果、天使の病死後属国が次々と離反。

現在はミールハイトの北東に、小ぢんまりとした形で残ってい

る国だ。

その偏執な絶対王政は今も健在で、その主義が理想の国家 国  
そのものを第一義とする国 を唱える『護神』の意向と合致した  
のか、再び『天使』が舞い降りた。

要注意国、だったはず……。

「上は？」

ア ril が問うと、やってきた士官は敬礼の姿勢を取って答える。

「九時より緊急の軍議を行うとのことです。各国との連携と、部隊  
の編成を検討すると思われます！ ア ril 様、ヒミナ様、直ちに会  
議室向かってください」

武器をしまい、準備を終えるア ril と氷水。

「ああ、分かった。報告御苦労。行くぞ、ヒミナ」

「はい！」

二人は出陣のため、会議室へと向かう。



## 一章 3

ヴァルルージエ所属。天使ヴァインは、戦場にはいなかった。

「オイ、侵攻作戦はもう始まったそうじゃねえか。何故俺がまだここなんだ？」

「痴れたこと。貴様がまだ戦力として認められていないからだ」

彼はあの時自身を倒した男　イラレージュと共にいた。

騎士団副官に、実にあつさりと負けたのだ。王は莫大な力を有するはずの天使がそんなことではならないと、打ち破ったイラレージュ本人へと賤けと稽古役を命じた。彼も当初は渋ったが、王の眼光に渋々と従うこととなる。

一月経った今でも、その関係は続いている。

ヴァインは未だ、降り立った頃に着ていた赤い祭祀服を着用していた。

対照にイラレージュは戦場でもないというのに、軽鎧を着込み、いつでも戦う準備は万端という風だった。

ヴァインが訝っていると、王の方からお呼びがかかったのだと言った。

しばらくして、あの日戦った玉座へとたどり着く。

無論一月経っている。死体や血だまりなどは綺麗にされ、あの重苦しくも卑しい雰囲気蔓延していた。

「騎士団副団長、イラレージュ。ご用件を承りに来ました」

片膝をつき、顔を伏せて問う。ヴァインもやらなければ戦いに出さないと脅され、仕方なく従っている。

王はそれを睥睨すると、陋劣な笑みで二人に言った。

「天使ヴァイン。騎士団副団長イラレージュ。お主たちも明日から、コールブランドと共に戦線に加われ」

その声に二人は、ぱつと顔を上げる。

「しかし……！」

「黙れ」

王の言葉に、イラレージュは押し黙る。

「力とは戦場で身につけるものだ！ それをのこの訓練訓練、安全なところではかまけおって！ 我らが祖先は幾多の戦場を潜り抜け、国を建てた武人ぞ。お主らもそれに習い、進むが良い！

天使よ！ 鍵を渡す。ちこう寄れ」

ヴァインはニヤニヤしながら頭を下げてお膝元へと近づくと、そつと手を差し伸べる。王は袖の下から金色の鍵を出し、そこへ落とすと小さくヴァインにしか聞こえぬよう、小さく何かを呟いた。そして彼は、すつと玉座を出る。追うイラレージュ。

「ようやくだな」

ヴァインの嬉々とした笑みに、イラレージュは押し殺した怒声を放つ。

「ふざけるな！ 俺にやられるようじゃ、行つて無様に死ぬだけだぞ！」

そんな言葉もどこ吹く風。ヴァインは地下の宝物庫へと足を進めながらも答える。

「てめえの目は節穴かよ？ 俺あまだ、本気を出していないぜ？」

イラレージュの言葉を流しながら、ヴァインはそう囁く。

宝物庫へとたどり着くと、扉を守る兵に鍵を見せつけどかせる。

そして彼らの前で鍵を穴へと差し込んだ。それだけでは回らず、扉も開かない。彼が王から聞いた呪文をそつと呟くと、鍵が独りでに回る。

ギイ、と開く扉。奥にはさらなる地下への階段。

彼が降りて行ったので、イラレージュはクソツと毒づきながらついていった。

この国の宝物庫は、王しか持たぬ鍵と呪文で守られていながら、結局のところ、入っている物は三つだけだった。

護神の剣、コールブランド。

女神の剣、クラウド・ソラス。  
死神の剣、ダインスレイヴ。  
ただの三本。

全て朽ちたようにひび割れ、原型を保っているのが不思議なくらい風化していた。

その剣は、始原に作られし神々の剣。

先代覇者たるこの国が管理し続けた、他国との優位点。

対応する英雄が扱わねば力を発揮せぬが、逆にいえば対応する英雄に渡さなければ、英雄は神に与えられた力を発揮しないのだ。

しかし、この国には天使が舞い降りた。天使はその剣によって最大の力を発揮でき、神子と悪魔は神の恩恵を受けての力を発揮できない。

これは大きなアドバンテージ。

残りの剣がここで朽ちていくならヴァルルージェエの勝ち。万一ここまで攻め込まれたなら、それはそのまま負けだ。

圧倒的優位。

だから、こそ。

「オイ、この国を裏切らないか？」

天使の言葉の意味を理解するのに数秒かった。

「それは……どういう……？」

彼が言えたのはそれだけ。天使は供えられた三本の剣を袂にしまい、彼へと振り返った。

「フン。こんな腐った国で何かを為せると思っているのか？ 国民から金を絞りとり、外部へ抜け出せぬよう、内を見張る関所を作る。そして絞り取った金は軍備と高官の懐だ。甘い汁を吸うのは上流階級と国王のみ。こんな国で、本当に何かを為せると思っているのか？」

彼は答えあぐねた。

肯定するのは簡単だ。しかし、天使が本心でそれを言っているとはいえない。今まで天使が見せてきた態度は、一に戦い、二に闘い。

三が知識で四が戦闘。

なるほど、それが言えるだけの情報を集めていただろうことはシャルフも知っている。その結論に至る理由も納得できる。しかし、戦闘にこだわっていたこの男が何故今更、闘いの場に出られると分かった今になって、そんなことを言い出すのか。誰にも見られないこの場所です。

理解できない。

考えられるのは、王への忠義を試すよう、演じている可能性もある。領けば王の前にひつ立てられ、首を斬られるかもしれない。

だが、そうでなければ。天使が本心からそう言っているのであれば。

それは乗るだけの価値があるのではないか？

彼はそつと目を伏せ、何が起きてもいいよう、腰に提げた剣の柄に手を這わす。

「それで？ 何になると言うんだ。まずここを出た後の勝算はあるのか？ まず扉の前の兵二人。その後窓を蹴破って逃走しても、しばらくは庭だ。障害物がないため魔法なり矢なりで狙い撃ちを受ける。上手く逃げたとしても城門があり、さらに逃げ切っても、外と内を切り離し囲う巨大な壁。そしてそこを逃げ切れたとしても、誰が追われる立場のお前を助ける？ いくつの障害を抜けなきゃならない？ それならまだ、その二本は置いて戦場で裏切るほうが効果的だろう？ 騎士団副団長という立場の俺が、何故そんなことをしなくてはならない？ 道理で物を言え」

それは、彼が常々考えていたことだ。

どうやって三本の剣を奪い去る？ 持ち去る？ 逃げ切る？

彼が何年も積み上げ、考えてきた問いの答え。まだ出ぬ答えを追い求めながらも、自然と彼は斬って捨てていた。

無理だと。

内心では、そう思っているから。

するとヴァインは、彼と戦った時のような不敵な笑みを浮かべた。

「それはなあ……」

彼は袂の剣の一本を取り出し、その右手で力を込めた。

「こうすんだよ！」

コールブランド　護神の剣が、天使の力を受けて赤く光る。

そして、姿を変えた。

錆びついたような直線の剣身は、鈍く赤を輝かせる反りのある刀身へ。刃の縁には円形の穴がいくつも穿たれ、またその円の縁も薄く研がれていた。ひびの入った十字の鍰は一つだけになり、持つ手を守るように柄頭へと伸びてそのまま鋭い刃を後ろに向ける。

通常の刃とは遥かに構造の違う、紅蓮の柳葉刀が姿を現した。

「クカカカカ！　いい刀だ、なァ！」

彼は刀を左に持ち変えると、それを出口へ向けて一閃する。刃の軌跡は炎を纏い、衝撃波のように空を裂く。

「ぐおおああああああああ」

手に短剣を構えた男が、火だるまになって悶えていた。

「こんな雑魚で止められると思ってんだ。それじゃァ、燃やしつくすしかないじゃないか？」

彼は右手から炎弾を繰りだし、黒装束の火勢をさらに上げる。

「大方毒でも塗ってあるんだろ？　そのまま焼け死ねや」

彼は肉の爛れる臭いも気にせず、男を視界に入れつつもイラレージユと向き直った。

「俺は行くぜ。武力突破だ。来るなら来いよ。止めに来たらぶち殺すがな」

ヴァインはそう行つて、ここ一か月の間渡されていた量産型よりいくらかマシ程度の剣を焦げた男へ投げつける。直線の軌跡を描いて見事に刺さり、相手が動かないのを見てから踏みつぶして走り出す。

すぐに上から、兵士たちの悲鳴が聞こえた。

どうする……！？

そう問いかけはしたが、イラレージユは自身に残された選択肢が

ないことに気付く。

このままじつとしていれば、天使が逃げ切ろうと逃げ切るまいと、みすみす逃した彼は処刑されることになる。

追いかけて、止めに行くのとはどうか。それにはまず、負傷している必要がある。無傷で出れば、最後にはやはり何故逃したのかと問い詰めが来る。かといってここで、追うのに少し時間がかかるという言い訳が通るような大きな怪我をしていけば、天使を前に運に頼った戦いをすることになる。

彼は、天使の力を見誤ってなどいなかった。

彼が見た天使の力は、自身より僅かに上。あの剣を得たことによって、楽々と勝っていた力関係が一気に崩壊した。

その主な理由は、彼が十数日彼の稽古役をやっていたことにある。彼はその肩書きを使い、ヴァインの隙を全く正さなかった。建前上幾つか取るに足らない、隙ともいえない隙を教えるが、彼は致命的なはずの隙を一切教えなかった。だから、ヴァインが接近戦を挑んでくれば、その隙を突いて殺すことなど造作もないことだった。

しかし、護神の剣は、彼のそんな計画を全て打ち砕いた。剣を得たことによってヴァインの剣は折ることの可能な凡百の剣ではなく、加護受けざる者では破壊不可能な神の剣となった。柳葉刀に施されていた円形の穴は、ソードブレイカーだ。細身の剣をそこにかませ、折るための仕組み。自身の持つ長剣では、確実に折られる予感が彼にはあった。

となると、その隙を持つ攻撃以外の攻撃を、負傷した状態で受け流せはしない。穴にかまされれば終わり。そんな中ただの斬撃が紅蓮の残滓を帯びて襲ってくるのだ。その斬撃すらも彼の剣を打ち砕こうとするだろう。ロクな回避行動が取れるとも思えない。初手での隙のある攻撃がこななければ、後は一方的に攻め続けられる。

そもそも先ほどのような、中、遠距離から攻撃を受ければ、彼に対処する術はないに等しい。

この案も、無理。

同じ理由で、天使から剣を奪って逃走するのも不可能。  
ならばもう、残された道はいつの策に乗るしかない。

行く、か……！

イラレージュの心を決めたのは、打算や状況でもなければ　あの男。ヴァインⅡハイゼルト。彼の自信満ち溢れる姿に他ならない。賭けるに値すべき何かがある。勘にも近いそれは、しかし彼の観察眼が下した結論だった。

奴が王の手引きで踊っている線は、ない。

必死に宝物庫の階段を昇り、外の現状へと目を向ける。

「！？」

転がっていたのは屍の山　いや、全てが全てというほどでもない。一刀の下斬り伏せられているが、むしろ死者の方が少ない。しかし重傷には変わらない。傷は焼け焦げ、異臭が城の中を蔓延る。<sup>はびこ</sup>彼は急いだ。行き先は倒れる人々が教えてくれる。

しかしどうにもおかしい。走れば走るほど倒れる兵の数は増えていく。普通逃げようとしたなら真っ先に外に出て、敵と交戦しないようにするのが常道のはず。

全力で走り続けて、ヴァインの背中がようやく見えた。と思ったら、ヴァインは扉をくぐる。彼はそれを追って、愕然とした。

そこは、玉座の間だった。

再び無法者として乗り込んだヴァインは、紅蓮の刃を王と取り巻きたちに向けていた。

「一つ、死ね。二つ、死ね。三つ、死ね。ヴァルⅡルージェ所属、天使ヴァインⅡハイゼルト様からの命だ。王を殺し、その玉座は俺がもらう。覚悟しろ、害悪ども」

平然とした顔で、無茶苦茶なことを言う。

王は微動だにしないが、取り巻きたちは足を震えさせ狼狽する。また王の侍らす艶然な美女らは、鬱屈とした眼で虚ろに眺めるものが多くを占めていた。

彼が睨みつけども、王は無限で見下ろすのみ。

「アア？ いまさら怖気づいたか？」

あの下卑たる王とは思えぬほど、冷静に  
罨にかかる獣を楽しみに待っているような  
いや、まるで今から

「避ける！」

ヴァインが踏み出した瞬間、彼を中心として魔法陣が絨毯の下から浮かび上がる。彼も気付き横へ跳ぶが、壁にぶつかったかのように陣から抜けることができない。

王が笑った。

「ふはははははは！ この玉座には建国期に作られた、王を護る罨がいくつもある！ 貴様がかかったのもその一つ！ 魔人の檻だ！ 檻は国の四風から流れ込む？ 気？ でできている。衝撃は全て吸収し、いかな魔をもつものである」と、結界を破ることはできぬ！  
大地の力だからな！ そして  
「

ゴオ、と地響きが部屋を、城を揺らす。

「陣の中心部でしか発動しない、特大の遠隔魔法だ！ 古代魔術師の作り上げた、地脈を伝う秘儀、受け止められるなら受け止めてみる！」

魔術の根源、純粹なる魔力の波動が、輝かしいオーラを纏って頭上より急襲する。天井を裂き、魔法陣という結界の内いっばいにそのオーラを広げる。

回避は不可能。ヴァインは反射的に、手に持つ刃で迎撃していた。  
「ウ オオオオオオオオオ！」

雄叫びを上げて、刃に紅蓮の炎を纏わせる。炎は広がり、自身を覆う炎の壁となった。しかし降り注ぐ波動の勢いはそれより遥かに強い。

高笑いする王。

取り巻きもそれを見て余裕も取り戻し、嘲るようにヴァインを見る。

だが

来いよ。



彼は、笑っていた。

この国を、

イラレージュへと、なんでもないうな顔で。

俺とお前で、変えてやろうぜえ！

そうするのが、当たり前とでも言うように。

その時にはもう、イラレージュの思いは決まっていた。

数瞬後、光が途絶える。

周囲の光を根こそぎ奪うかのような、猛烈な光が激突点から溢れだした。

光は空を焼き、人々の目を焦がす。

轟音によって音さえ断絶し、皆は前後不覚に陥り頭を揺らす。

果たして

魔法陣の中央。そこにはヴァインが立っていた。隣にはイラレージュ。ヴァインの炎は天を焦がし、イラレージュの刃が、ヴァインの刀を下から支えていた。

「なっ！？ なっ……！」

「ククククク！ おもしろかったぜ、クソジジイ！」

ヴァインは高密度の魔力によって削られた額から血を流しつつも、王へ向かって嘲笑を放つ。

「？ 気？、それは魔力と変わらないものだろう？ 物質的な変換を経ない高密度の魔力は、ただの圧力の塊にすぎん。そして檻は、内からは出られないが、外から入るには容易い。二つのコンボ、確かに強大は強大だが、残念ながらこっちには、化け物じみた腕力を持つ剣士と、神に選ばれた天使サマがいるんだよ。魔力同士をぶつけあつてほとんどを相殺。足りない分は炎という魔力を壁にして、その圧力に耐えるだけで事足りる」

そして、と足を地面で叩き、イラレージュに目配せする。

「陣が書かれているのは床。絨毯の下だ。形を崩せば、陣は崩壊する」

なるほどと察したイラレージュは、その長剣で床を叩く。

鈍い音と共にイラレージュの長剣が 先の魔力照射を耐えて支えた傑作が 折れ、豪華な絨毯が抉れ、無機質な床が砕け、描かれし魔法陣が崩壊する。

そして二人はその場から、いとも簡単に動いた。

「それじゃ、天使サマを侮った代償、戴こう！」

再び刃に炎が灯る。炎は刃を煌々と照らし、刃は炎の明かりを受けて揺らめく。

その輝かしき刃に映し出された王の顔は、？王？の顔などではなく、ただ生にしがみつく下卑た男の顔でしかなかった。

「ふ、ふざけるなあ！？ だ、誰か早くこいつを止める！ イラレージュ、何をしている！？」

狂乱する王の前に、イラレージュは冷酷な顔を取り戻す。そつとヴァインに目くばせすると、彼は頷き、前へ出る。

「報いる、貴様の殺した全てのものに」

呟きはどちらのものだっただろう。

彼は紅蓮の柳葉刀を振りぬき、王の首を狩った。

震えあがる腰巾着の貴族たちをも、無慈悲に刃で刈り取る。

イラレージュも止めはしない。それは必要なことだ。この国をやり直すためには、必ず……

でもその様は、命を刈り取る死神のようで。

こいつ、本当に？天使？か？

そんな冗談じみた疑問が口に出ることは、なく。

残ったのは、ヴァイン、イラレージュ。そして王に侍る、艶やかな美女たちと僅かな侍従。

「さあて、これで終わりだ。後片付けはもう託してある。？王殺し？たる俺らはさっさと逃げようか」

## 一章 4

英雄たちが降り立って十日足らず。世界情勢は大きく揺れ動いた。戦争が起ることが予想され、各地の物価は上昇。多くの国で出入りの警戒が為され、小国同士は同盟を結び、大国の下についた。

その中でも力に物を言わせて動いたのはヴァル・ルージエだ。準備が整ったのだろう。手始めに北の小国へと遠回しに吸収合併することを伝え、脅しとばかり北へと軍を動かした。断れば蹂躪され、領けども兵は奪われる。そもそも軍事国家であるヴァル・ルージエと戦えるだけの力が小国にあるはずがない。襲われると分かり切った国を助ける国もありはしない。選択肢は元より存在せず、小国はヴァル・ルージエに吸収された。

勢いに乗ったヴァル・ルージエは、軍を南西　ミールハイト方向へと進める。

これを受け、数日後魔道騎士団には、国境付近に存在する森を抜け、敵の部隊へ横からの奇襲を加えるよう命を受けた。この任務には、百余名の魔道騎士団員全てが投入されている。

無論、見習いである神子も。

「ヒミナ、大丈夫？」

「ん。なんとかね。足場が悪くても、まだ一時間だしね。鎧も一応着慣れた感じかな」

そこにいたのは、魔道騎士団長ア ril と、神子氷水だけだった。

森の行軍を統制保ったまま行うのは、通常思われるより遥かに厄介だ。森と言うのは木々が集まってできた地形。まっすぐ進むうにも、木が邪魔をするため回り込むしかない。また、大木の根は地面を隆起させ、段差を生じさせる。口々に隊列を守って進むこともできないため、列をなすと先頭と後方に大きな開きが生まれ、いつの間にか迷うこととなる上、奇襲を受ければひとたまりもない。

ア ril はそういった事態を避けるため、土地勘のあるもの中心に

部隊を再編成した。目的地まではなるだけ少数で、かつ戦力バランスも取れ、土地勘のある隊員が一人は所属するように。魔道騎士団は、こういう面に特化している。元々が寄せ集めの集団だけあり、下手に統制保つよりもこちらの方が性に合い、動きやすいのだ。

それに 森のすぐ隣には、大山脈と呼ばれる魔物の巣窟とでもいうような場所が存在する。迂闊に近寄れば命はない。大人数で森を行軍し土地勘のない者がはぐれた場合、最悪大山脈に迷い込み、魔物に食われる危険がある。それを避ける意味でも、少数行動と言うのは監視の目も届きやすく、安心感がある。それ自体には問題なかった。

だが、いつの間にかア ril と氷水の二人だけが残っていた。ア ril の指示で人員を割り振っていたはずなのだが、いつの間にか副団長たちが他の団員たちを組み替えていたのだ。二人なら大丈夫、と。幸いにもア ril は森の歩き方というものを熟知しており、この周辺も何度か来たことがあるという。その上実力は折り紙つき。氷水の実力はあくまで見習いレベルなのだが、神子という肩書きが彼女の存在感を大きく見せる。

結果、女性二人で鬱蒼とした森の中を歩くことになり、氷水としては思うことがないでもなかった。

しかし今言っても始まらないこと。

彼女はぼんやりと呟いた。

「頼りになる男、いないのかなあ……」

「ん？」

バサツと、頭上から逆さまに人が降りてきた。

「キヤアアアアアアアアア！」

びつくりして尻もちをつく氷水。剣を持って一か月の彼女に、反射的に迎撃するという発想は生まれない。腰を抜かして後ずさりするだけだ。

それを見た人影は、枝にぶらさがったの逆さぶり状態から、くると回転して地に降り立った。

「おもしろそうなのがいるじゃねえか」

降り立った人影は、森の中を行動するにはあまりにも適していない男だった。というのも、足から頭頂部まで赤一色。肌は褐色で、服はゆったり、だがどこか動きやすそうな祭祀服。腰には何のためにあるのか分からない、錆びた長剣を三本も差していた。

「何者だ」

ア ril が詰問するように言うが、彼は飄々とふざけた態度でそれに答える。

「通りすがりの？天使様？さ。お前らの方こそ何者だ？」

男はア ril の殺気を感じ取り、腰に挿した剣の内一本を掴んだ。

「名乗り出る義務はない。今なら見逃してやる。去れ」

そういつつ彼女は踏み込んだ。彼が抜こうとしていた剣の鍔を、鞘から少し抜いた自らの剣の腹で押さえこむ。

「何の真似だ？」

「いいや、なんでも」

彼はそうして、炎を体に纏わせた。

ゴォォ！

纏わりつく熱気。ア ril はたまらず顔を逸らし、距離をとった。

「なっ……！？ 詠唱も魔法陣もなく……っ！」

彼女が距離をとって男を睨むと、男は先ほどと変わらぬ飄々とした体で彼らに言った。

「通りすがりの？天使様？だっつったろ？」

彼は刃を抜くと、それに力を込めた。刃が無音で滑るように変形し、柳葉刀を基本とした、彼専用の異常な剣を作り出す。

「コール……ブランド……！」

ア ril が驚くように呟いた。

「な、なんなのそれっ！？」

溜まらず問うた氷水へと、余裕綽々と男が説明した。

「コールブランド。護神に認められた、天使のみが扱える剣らしいぜ。天使や僕の力を加えると、剣が力の持ち主に最適な形に変形す

るんだとよ。同様の剣がこの二振りらしいが、名前までは覚えてねえ。女神の剣と死神の剣だとさ」

彼の言葉に、ア ril と氷水が驚愕する。しかし二人の驚きは、別のところから来ていた。

氷水の驚愕は単純なもの。そんな剣があつたのか、私にしか使えない特別なもののなのか。そんな驚嘆、自分の知らないところからくるものを知った不可思議と好奇から来ていた。

しかしア ril の驚愕は、今の情勢を知っているからこそその驚愕だ。神々の剣は現在、ヴァル・ルー・ジエにおいて厳重に保管されている。天使と言えど、適正のない他の剣を持ち出すことができれば、天使がここに居るのは、自分たちの動きを止めに来ているのではないか。そんな疑念が次々と浮かんでくる。

「ンア……？ 急に目つきが変わったな。なんだ、そんなにこの剣が欲しいのか？」

彼は見せるように腰の剣を撫でると、二人へと言った。

「くれてやる」

二本の剣を二人の前へと投げ捨てる。朽ちたる剣は、刃を地に埋めることなく転がった。

二人は動きそうになった体を律して止める。

そんなことをする理由が分からない。考えられるとするなら、不用意に手を出すこちらを狩るための罠。氷水にだって、それくらいは分かる。

二人は近くに転がっている剣から目を離し、男の方へと視線を戻す。

「なんだア？ 取らねえのかよ。要らねえのかよ。それじゃあこの話はお終いだ。どっちか、相手してくんね？」

左手に持った刃の先を、二人の間へと向ける。二人は声を発することも動くこともせず、ただ男の様子を観察した。業を煮やした男は、ゆっくりと二人へと近づく。

一步二歩三歩。

もうそれで二つの剣は、彼の足もとだ。

そして四歩。

既に男は、二人の攻撃圏内へと　そのまま彼の攻撃圏内に踏み入っていた。

しかし動かない。

ア ril にあるのは、天使と呼ばれる英雄に自身が抗することができるのかという不安。

氷水にあるのは、未熟者の自分が未知の敵と、それも師であるア ril が動かない相手と相対し、生き残れるのかという疑念。

五歩目は半歩だった。

彼は剣を、ア ril の方へと向けた。

「お前の方が強そうだ。相手しな」

言うが早い、刃を手首の動作だけで小さく横薙ぎにア ril へと向かわせる。

彼女は冷静に、鞘から抜き放った刃で上へと弾く。男は弾かれた刃を気にせず、逆の手を前へ差し伸べてきた。

返す剣で腕を狙うこともできたが、何が来るかわからない。彼女は攻めより守りを優先し、剣を手元に引き寄せた。

男の腕が、紅蓮を纏う。ア ril はそれを見てとると、地を蹴り後方へと逃れる。燃え盛る炎に炙られ頬を焼く。男は下がったア ril を追って、地を蹴った。

暴れ狂う炎が、彼の衣服を轟々と炙る。しかしその布は火に曝されているというのに、燃える様子がない。どころか、表面の僅かな土汚れなどが落ちていく。男の服は、火浣布かかんぷでできていた。アスベストを用いた燃えない布だ。炎を操る彼の一族にとって、燃えない服というのは必需品であった。

しかし、ア ril はそういう物の存在を知らない。ただでさえこの世界の理に適わない力を扱う天使。傍から見れば、その炎が布を避けているようにも見える。それでなければ特定の物以外燃やさないの

か。そんな懷疑の念が鎌首をもたげ、彼女は慎重にいこうと、まず攻勢を落とす。

彼女は完全に吞まれていた。眼前の赤髪の男にではなく、天使と言つ自らの作り上げた偶像に。

それでもア ril は、練つた魔力を魔術として放つ。

「氷刃よ、その身を彼の者<sup>か</sup>に埋<sup>つ</sup>めたまえ！ 『アイスブレード』！」生まれ出づるは氷の刃。空を舞う氷片が刃を向けて襲いかかる。

しかし

「ハッ！」

彼の纏う炎は、彼女の生み出したる氷をいとも簡単に蒸発させる。ア ril は炎使いである男と、非常に相性が悪かった。彼女の操るは氷。集中して魔力を集め、陣の展開、あるいは詠唱をし、そして打ち出す魔術。しかしそれだけの準備を経て生み出されるは氷。彼女の数分の努力は、彼の一瞬の力にかき消される。

操るものの相性。そしてそれを生み出す時間。

勝るは剣技。しかしそれにも気付かない。

彼女が逃げる算段を始めた時、初めての实战に震えていた氷水は、そつと動き出していた。

防戦一方のア ril 。それを自身が、今のままで助けられるとは思つていない。

だから、そこにあつた力に頼つた。

「お願い、私に力を！」

二本あつた剣のうちの一本、薄紅き女神の剣を握りしめる。

刃が、彼女の力に呼応する。

吞まれゆく感覚。

女神の力が、人を神子に進化させる。

知識を経験を。

その身に宿し、力の智を得る。

戦いを知らない神子に与えられるアドバンテージ。

女神の剣は小さな刃へと変化する。それはダガー。刃渡り二十セ



ンチ程度の、小さな小さな刃。それが、二つに分かたれる。

彼女の剣は、双短剣。

与えられた力を十全に発揮するための、二つのダガー。

氷水はそれぞれのダガーを逆手に持ち、男の元へと走りぬける。

ア ril に刃を向けるその男の首へと、彼女は右の短剣で切りつける。

カァンと、甲高い音をして止められる。男は振り向かず、後ろに回した刃の先でその短剣を受け止めていた。

「へえ……。それじゃ、お前が神子ってやつか」

彼女は取り合わず、逆の短剣をガラ空きの脇へと向かわせた。同時に、ア ril も剣を振るう。左右から向かう二つの刃。

「まだまだだな」

男は足払いを氷水にかけると、ア ril の剣を屈んで避ける。追撃の剣が男へ向かうが、転ぶ氷水を盾にア ril の剣を止めさせた。

神子が得たのは武器における経験、女神の加護受けし力における知識。

対術や剣術など、絶対的な経験の差はまだ埋められない。

「仲間思いの女でよかったじゃねえか、神子サマ」

掴んでいた襟元を放し、ア ril の方へと蹴りつける。ア ril は転ぶように倒れてくる氷水を抱きとめ、男の方を向いた。

「……何のつもり？」

訝るようにア ril が問うが、男は嬉々とした表情を抑えることなく言う。

「俺は相手をしてくれ、つつただけだぜ？ 色々と厄介になる可能性のあるお前たちと、取り返しのつかない揉め事を起こすつもりはねえよ」

言いつつも、彼は刃をくるくると回して右腕で構えた。

「右手で相手してやんよ。だから神子様、どうか俺にお前の力を見せてくれ、よっ」

男の言葉に、氷水はア ril の腕から離れ、敵意を抑えることなく

両の短剣で斬り込む。

舐め、ない、で！

少女の右の短剣が、男の首筋を狙うように斜めに振りぬかれる。男はそれを止める為、柳葉刀で受け止めた。

氷水にとつて、そこまでは予定通り。続いて左の短剣を、先と同じように脇腹へと向かわせる。当然、男にはその程度の動き、捉えられないはずがない　が、

「ッ　　アア？」

男のその刀が、彼女の右の短剣から吸い付くようにして離れない。手前に引き寄せ、逆の短剣を迎撃しようとしたのだが、何故か彼女とその短剣が、彼の腕に　刀に引付いたままやってくるのだ。迎撃のためのその行動が、結果的に彼女の勢いを加速させることになり刃が近づいた。

もらった！

内心勝機に喜ぶ氷水だが、ガクンと動きが止められた。

「完全に足、浮いてたぜ」

何ということはない。元々飛び込むようにして斬りかかるうとしていたのだ。その上で男の腕に引き寄せられるように前進。結果、男の動きと相俟<sup>あいま</sup>って空へ浮いた体。支えるものは何もない。そこへ男は引いていた腕を押し返して、彼女の突撃を止めたのだ。

「ふん、何の力だろうね。見たところ剣と剣が吸いつくような、そんな力を有しているのは明白。残念ながら俺は寡聞にして知らないが、世界が人を地に吸いつけるような、そんな力と同種のものじゃあないかね？」

氷水はその短剣に纏わせていた力を解除し、後ろへ飛んで距離をとる。

「何で今、追撃しなかったの？」

彼女の脳裏をかすめたのは、男の拳動の不審さだ。

突然現れて剣を渡してきたかと思えば、次の瞬間喧嘩を売ってくる。二人で挟み込むように攻撃を加えれば、片方を崩して場所を入

れ替え、一対一でしか戦えないような配置に作り替える。その上でこちらの攻撃を意にも介さず、攻撃のチャンスもみすみす逃す。はつきり言って、意味がわからない。

だが男は、その問いにも悠然と、ただ僅かに苛立ちながら答える。「だからさつきも言っただろ？ 『相手をしてくれ』ってよ。その上で俺は、右手で相手してやるつつつたんだよ」

だから他では触れはしない　と、そう言っただ。

なんだそれとは、彼女は思う。これは戦いなのだ。そんな甘いことを言っでどうするのだ。何がやりたいのだ、と。

「攻めてこないんなら、こっちからいくぜ」

彼は氷水の肩越し、ア ril へと手出しすんじゃねえと、一睨み聞かせてから突進する。

縦から振り下ろされる柳葉刀に、氷水は内側から短剣をぶつけて軌道を変えた。

その時「ん？」と、男が違和感に唸る。氷水の短剣がブレて、刀に吸いついたのだ。

氷水はガラ空きの懷へと、今度こそ刀を突き立てる。

しかしそこは男もさすが。流れるような動作で腕を捻り、握りへと伸びる鍔を使って短剣にぶつける。狙いを上に逸らすと屈んで躲すと、示し合わせたかのように彼女の横をすり抜ける。

「……ふむ。次。両手だ」

男は宣言すると、木を蹴って三角跳びで上に伸びる枝を掴む。勢いを殺さぬまま放して、地面に着地。横へ跳んで再び木を蹴ると、氷水の方へまっすぐと飛んだ。

トリッキーな動きは、氷水をア ril と男との間に入れる為だろう。ア ril の行動を制限しながら、氷水との真っ向勝負を挑む。

男は再び、縦の斬撃を加える。氷水のような短剣ならまだしも、大きく横振りをすれば、彼の刀では周囲の木々に邪魔をされる。

氷水もそれを分かっているのだろう。同じ弧を描く刀に、同じように短剣を押し当てて軌道を変える。

しかし男は左手を添え、その軌道を再び捻じ曲げた。斜めから決るように向かう刃を前に、彼女は冷静にもう一つの短剣の柄尻を、刃に押し当てた短剣の柄尻へとぶつけ合わせた。

何を　と男が訝る隙もなく、弾かれる両の短剣。不思議な吸引力で以って敵の刃に張り付いていた短剣は、弾かれる勢いそのままに、刀の軌道をあらぬ方向へと向かわせる。

驚く男とアリル。

今度こそ真正銘ガラ空きの男へと、氷水の蹴りが炸裂するが、男は体に炎を纏い、せめてものカウンターとした。

男は初めて、攻撃を受けた。蹴られた勢いそのままに、横にあった木へと追突する。

僅かに鈍い音がするが、男はそれでも笑っていた。  
「伝承通り、か。やっぱお前、おもしろいな」

神子とは、法則の違う世界から連れてこられた一般人である。

基板となる法則<sup>ルール</sup>が絶対的に違うために、神子への魔法　つまりこの世界独自のルールは大きな力を発揮しない。それはあたかもスプーンの掬う部分を持って、取っ手で食べようとしているかのような見当違いの行動。かろうじて意味の体裁は為すが、それ以上に、本来からかけ離れている。

そして神子の扱う『力』とは、女神が与えた法則<sup>ルール</sup>。人を神子の神の意思を託宣する女性　たらしめる、人の作り替え。

法則という名の力を扱い、魔法と言う名の非常識を無効化する。

そんな人間。それが神子。

炎へと蹴りを放った氷水だが、実際服と靴が僅かに燃えた程度で、肌には火傷一つ残っていない。

僅かな熱気は感じようと、瞬間的に出した小威力の魔法程度では傷と成るには至らないのだ。

もう少し楽しみたかったんだがな、と、男は呟くと、刃に炎を纏わせ彼女を見た。

ぞわ、と、氷水の体を粘りつくような殺気が包む。

圧倒的密度で放たれる敵意の塊。根源的欲求から放たれる負の感情の集大成。

目に見えない圧力は、氷水にどこか懐かしい狂うような絶望を与えて突き抜ける。

あう、あ、ああつ……！

同時に、今までこの男が、本当に殺意ではなく敵意でもなく、ただ遊んでいただけなのだと知った。

見たのはたった一瞬だ。恐怖が時間を引き延ばす。

恐怖で死に、恐怖で生きた神子、氷水。

心的外傷後ストレス障害、恐怖が過去の恐怖を呼び起こし、氷水という人間を完全に縫い止めた。

氷水の体感、何分何十秒とも言える長き時の果て、男はついに突進。すぐさま突きを放つ。

恐怖で時が引き延ばされながらも、あまりの速度に体が追い付かない。氷水は茫然とそれを眺め

しかし彼女は、傷を負うことなく助かった。

木の上から降ってきた緑髪の男に助けられる。

その男は頭を下にして落ちてきたかと思うと、長剣を一閃、彼の突きを横から弾いて、天使の刀を横へと逃がした。軌道を変えられた刀は勢いそのままに前へと進み、彼女の顔の横を通過して止まる。刃から生み出される熱気が彼女の頬を僅かに炙るが、炎が触れるような距離でもない。

「いよう、随分と速かったなイラレージュ」

天使は現れた人影に対し軽い言葉を投げかける。

死の恐怖から解放された氷水は、ぺたんと座りこみ、目の前の男を見上げる。するとイラレージュと呼ばれた緑髪の男が、剣を構えて天使を威嚇していた。

「事を荒立てるなど言っただけだ。何故ミールハイトの者たちと交戦している」

降ってきた男は、天使を睨みつけながら問う。

「ククツ！ おもしろそうな奴らを見つけたからさ。なかなかの貫禄だす女と、なーんかやばいモン抱えてそうな女。おもしろそうだと思わないか？」

天使はそう言って刀を引く。すると刀は、元の錆びついたような剣へと姿を変えた。

緑髪の男は未だ天使を睨みつけていたが、天使が「やってられん」と背を向けて下がったのを見て、ようやく剣を鞘に収めた。

「大丈夫か？」

男が手を伸ばし、氷水を見下ろしていた。男の声は決して優しい声音ではなかったが、労わるような響きが交じっていた。

「あ、ありがと……」

氷水は礼を言って手を掴む。引つ張り上げられ、勢い余って胸板に体を押し付けるが、「す、すいません！」とすぐに離れ、ア ril へと向き直る。

見ず知らずの相手に背を向けるという、警戒も何もあつたものじゃない行動をとりながら、彼女はア ril を見て訝しんだ。

「？ どうしたの……？」

ア ril は氷水の声も聞こえていないように、涙を流して緑髪の男を見ていた。

「シャルフ……！」

それを見た緑髪の男は、得心したと、穏やかな顔で彼女へ言ったのだ。

「ただいま、ア ril」と。

## 二章 ステップアップ

神の剣

それは英雄にしか扱えない聖なる      あるいは邪なる剣。

護神の剣、コールブランド。

女神の剣、クラウ・ソラス。

死神の剣、ダーインスレイヴ。

そのままではただの朽ちたる剣だが、適格者が力を注ぐことで武器となる。

武器の種類は千差万別。力の性質だけでなく、力の保持者の性格をも反映し形作る。

それ故同じものは二つとない。

僕

僕とは英雄に付き従う者。

それは僕であつたり、仲間であつたり、同胞であつたり、各人において呼び方は様々だ。

僕は神の加護を受けている。

生れし時より加護を受け、その血に流れる力がその者を作り上げる。

しかし僕は、その力を振るうことはできない。

力は英雄の為にあり、英雄は神の理念に尽くす。

英雄の認めない僕は僕ではなく、それは神の加護を受けし者ではない。

僕とは即ち、神の理念      英雄の意志に賛同し、付き従う者。

英雄が加護を受けし者を認めた時、その者は刻印を受けるであろう。

## 二章 1

「それじゃあ改めて自己紹介といこうか。

当代『天使』、ヴァインⅡハイゼルト。能力は『炎』だ」

「ミールルハイト、魔道騎士団長ア ril Ⅱクウェート。

よろしく頼む、ヴァイン」

「『神子』、鏡氷水。能力は……いい、まだ言わない。

……よろしく」

「……シャルフだ」

四人の遭遇から半日。天使、神子の師、神子、元天使の躰け係の四人は、ミールルハイト首都、ミールティアに存在する城の一角にて集っていた。

「……説明してもらうぞ、シャルフ。お前は今まで、どこで何をしていた」

問うのは魔道騎士団長ア ril。言葉を紡ぐと感極まったのだろう。青い髪が覆う目をそっと伏せ、苦しそうにイラレージュ　シャルフへと言った。

「お前は八年前、死んだ。そう、聞いている。私も妹も、お前がいなくなつて……悲しんだ。今なら、理由……言つて、くれるよな？」

今にも泣き出しそうなア ril を前に、氷水はおろおろとシャルフへと向く。そのシャルフもすまなさそうに顔を伏せており、部屋の空気は重い。唯一その空気を介していないヴァインだけが、おもしろそうに二人を眺めていた。

「……俺は八年前、お前も知つての通り、騎士団入りを果たした。そこで最初に与えられた任務は、俺に騎士団を抜けてくれと言うものだった」

訥々と語り出すシャルフ。ア ril は頷くこともなくただ下を向いていた。

「いきなりなんだ、とは思つたさ。しかしその意味は、無視するに



はあまりにも重かった。任務内容は、ヴァル・ルージュへの潜入。百年戦争が始まる前に、あの国から神剣を奪えというものだ」

ア ril は反応せず、言葉の意味を噛みしめる。

三本の神剣。それが一国で保管されているのだ。その国に英雄が降りて剣の力を振るえば、他国の勝利は遠ざかる。国柄からして、ヴァル・ルージュに神子が降り立つことなどありえない。天使ならまだしも、悪魔が降り立ち剣を奪い去っていけば、全滅以外にありえない。全てがそこにあるというのが危険なのだ。仮に降り立たなかったとしても、そこに剣があるのは知られている。英雄を得た国々は、総じてヴァル・ルージュを狙うだろう。

そうなる前に一計を案じるのは不変の理。おかしくはない。だが、なぜお前が？」

問題はそこ。八年前　当時十歳そこそこの子供に、潜入任務など務まるはずがない。ましてやそれが初任務とあればなおさら。

「子供だから、だ。顔も力も知られておらず、なおかつかなりの地位に昇れるだけの腕があったから。そして潜入して戸籍を得ることが容易だったから。だから俺が選ばれた」

ア ril はその言葉に、頷かずにはられない。

そもそも　子供ながらに騎士団入りを認められた時点で十分おかしかったのだ。子供ながらにその腕ならば、数年後、十数年後、相應の腕を備え、高い地位を得ることも可能かもしれない。でも、何かひっかかる。

「ま、待つて。選ばれたのは分かった。でもなんでシャルフさんは、その任務を受けたの？　確かに国としては一大事でもなんとも達成したいものだけど、でも、十歳の子供がそんな大事なことを平気な顔をしてできるとは思えないんだけど」

氷水の言葉に、なるほどア ril は気付く。今の自分ならともかく、八年前、まだ騎士としての自覚もなかった少年が国の一大事を聞いたとしても、その重さ、その意味を理解していたとは到底思えない。

しかしシャルフは、その問いを予想していたのか。何食わぬ顔で答える。

「前金だけで、かなりの額が出たんだ」  
金。

「あの時、俺が世話になっていた孤児院は、潰れるまで日を数えるほどだった。だから俺はあの時、必死になって騎士になったし、すぐさま大金が出るといふのなら、どんな危険な任務にも行くつもりだった。だから、渡りに船だった」

その言葉に、女性二人はなるほど頷いた。氷水は情勢こそ知らないが、それならお世話になった孤児院のため頑張る気持も分かるかと納得したし、ア ril も当時孤児院が潰れそうだったという話は聞いたことがある。何故立て直したのか疑問に思っ てはいたが、シャルフの言葉を聞いて合点がいった。

シャルフは二人の顔を見て、納得してくれたか、と安堵の表情を作る。

だから、一人ニヤニヤと笑っていたヴァインを見過ごした。

それだけ話が分かれば、ア ril にはもう訊くことはない。

二人に出会った後、簡単な事情は聞いていた。

ヴァルルージュから逃げたこと。開かれようとした戦端を止めたこと。国を崩壊させたこと。天使と神剣を手に入れたこと。

シャルフがヴァインと別行動をとっていたのは、まだ王殺しとして名が知られぬうちに前線部隊と接触するためだ。国王が暗殺されたと伝えて、兵を戻すために動いていた。

ア ril は魔道騎士団長としての指示があるため二人を送ることはできなかったが、情報に感謝し、氷水を伴に向かわせようとした。しかしヴァインが、

「敵かもしれない奴んところに、大事な神子様一人ついて行かせて大丈夫かよ？」

なんてことを言ったため、ア ril は一人、確かにと苦笑して前言

を撤回した。

自身は今、百人の兵を連れた魔道騎士団長だ。

旧知とはいえ、騎士団や国との関係が明らかでない者の言葉を、鵜呑みにするわけにはいかない。兵の命を預かる者として、警戒は怠ってはならない。当たり前のことだ。

彼女はそれを教えてくれたヴァインに、心中ありがとうと言葉をかける。見ているのが氷水一人と言えど、簡単に自身の非を認め、そのことに礼を言つては下の者に示しがつかない。

彼女は先の自身の行動の未熟さを戒め、アリル「クウェートではなく、魔道騎士団長として動いた。

後曰。

敵兵たちが急ぐように国へと戻っていくのを確認すると、戦うことなく騎士団を引き上げ首都へと報告に戻る。

そして歓待される二人と再び会ったのだ。

「他に話すことは？」

シャルフが残りのメンバーを窺うと、氷水がそつと手を挙げる。

「なんだ？」

「あの……」

そこでチラとヴァインを見た。

「なんだ？　言ってみろよ」

彼の挑発的な言葉に、氷水はムツとして言う。

「？天使？と？神子？が、同じ国に属していいんですか？」

確かにそれは、考えなかったことじゃない。天使は国を尊び、神子は平等を至上とする。一見相反する二つだが、そこには妥協点が存在する。

「問題ない。この国は条件を満たしている」

ヴァインが手を伸ばし、指を立てる。

「一つ。お前はこの大陸がどんな形をしているか、知っているか？」

「それくらい知ってるわよ。台形二つ重ねたような感じでしょ」

と空中に台形を二つ重ねて書く。それはむしろ蝶ネクタイを縦にした形と言った方が分かりやすいかもしれない。

「ああその通り。そしてその台形の上と下、つまり大陸の北と南を分かつ所、そこには大山脈と呼ばれる魔物の巣窟がある。東西は大陸を横断し、縦も大陸の全長一割近い。魔物も出ることからそこを超えるのは無理。

この国は大陸を北と南に分かつその大山脈が、唯一途切れている場所に存在する。大陸のちょうど真ん中。山脈が縦に分かたれているのがここ。それ故大陸中の交易品が多く流れ、商業で成り立った。その特性故、他国との関係も非常に良い。それこそ、悪かったのはヴァル・ルージュくらい。しかしそつちは友好国と言える国は一つもなく、完全に孤立していたため無理もない。兎角、この国は顔が広くて敵が少ない。平和を謳えば、それこそほとんどの国がついてくるだろう。どうにかして共通の敵を作り上げれば、後は交通の便からも国々の中心となることは間違いない。これが神子を抱えうる理由。どこるか女神に選ばれた最大の理由だろう」

二本目の指を立てる。

「二つ。先も言ったように、この国は品を輸送する上に於いて非常に立地が良い。襲つてでも奪いたくなるくらいは。そのため、ある程度の武力が要求された。左右を魔物住まう大山脈に挟まれているのも大きな理由だろう。結果的に北の大国スイ・ラ・グネに戦争を吹っかけられても、護りきることができるだけの力を得た。それは見方を変えれば、小国を占領、あるいは属国にできるだけの力を持ちながら、機を待っていると見えなくもない。

それにこの国、平等を謳う商業国家でありながら王制が敷かれているじゃねえか。民もそれに異議なし。国を尊ぶつーか王を尊ぶ国家の出来上がり？ 平等とは程遠い。それに、平等を掲げながら、自国の利益を尊重するよう動くのもまた、国を尊ぶって範疇だろう？ 故、天使も属するに問題ない」

そして、と三本目。

「俺はまだこの国に属していない」

「ええ!？」

「おもしろい反応ありがとう。反応してくれないお前ら二人にや苛立とう」

妙な韻を踏みながら、ヴァインは氷水を見てククツと笑う。

「まあ、まだ俺は一般市民としてこの国に入国しただけだ。イラシャルフの客人としてな。そのシャルフも扱いとしては死んでたんだろ？ その辺りの收拾に時間がかかる。だから俺はまだ、この国に属している訳じゃない」

歓迎はされてるがな、と四本目の指を立てる。

「そして最後。俺はこの国には属すが、お前と同じ勢力には属さない」

「ど、どういうこと？」

「お前はそこの魔道騎士団長様の下につくんだろ？ だから俺は別んどこ……たぶん、シャルフ君と同じところにつくだろうねえ」

シャルフ君、とニヤニヤしながら強調する。

「先も言った通り、この国はどちらにでも転身できるし、最悪二つが妥協したところを進めることもできる。俺はどちらの可能性も残すため、厳密にはお前とは違う勢力に属す。まあ他国と戦争でも起これば共闘することになるだろうが、連合軍ができているからその線は薄いね」

以上終わり、とヴァインは締める。しかし氷水は納得しない。

「そ、それじゃああんたが私と同じ勢力に入れば、百年戦争なんて起こさずにいられるんじゃないの？　なんでわざわざその可能性を残すのよ」

ツンツンした風に言う氷水に、ヴァインはそれを逆撫でするように大仰に答える。

「おいおい神子サマ、何も考えずに喋るなよ。お肌にやいいが、頭にや悪いぜ？」

氷水はピクリと頬を動かした。

「へえ。そ・れ・で、天使様は何がしたいんでしょうか？ 無能の私目に教えてくださいませんか？」

「ククツ。それじゃ順を追って話そうか……」

一つ間をおくと、ヴァインはとても真剣な顔で、声音で、皆に言った。

「おまえら、この百年戦争というシステムをどう考える？」

三人を見回すヴァイン。

「神々の作り上げた、戦争を起こさせるシステム。これは確認されるだけでも九代は前に既にあつた。最低でも九百年は前から続く神のシステム。人々が盲目的に従う、作られた戦争。お前らはこれを、どう思う？」

「ど、どうって……」

返答に窮する三人。

「研究や哲学は、疑うことから始まる。慣れてないお前らにやきついかもしれんがな。」

それじゃあ質問を変えよう。お前らは、いきなり主君殺しを敢行する俺をどう思う？」

これには氷水とシャルフからすぐに返答が返ってきた。

「馬鹿」

「向こう見ず」

「素晴らしい返答ありがとう。後で覚えとけよ」

じゃれあう三人をよそに、ア ril はヴァインの意図に気付いて息を呑む。

「お、分かったか？」

「自信はないけど……あなたが言いたいのは、降り立って一月でそんなことをする？ 天使？ はどう思う、ってことでしょ？」

大正解、と彼は笑う。

「お前らの常識から考えていけば、天使ってのは国を至上とする考えを持つ者が選ばれるんだろう？ 降り立った国に尽くすんだらう？ 俺のどこが国至上主義だよ？ 俺は俺の為に生き、俺の為に死

ぬ、俺中心の俺様至上主義！ 俺が国家元首にでもなれば国を尊ぶ天使様の完成だが、どうにもそうは考えにくい。となると、俺は？ 天使？としては異端なのではないか。そういう疑いが出てくるんだ」  
ヴァインを除く三人は、その言葉の意味を理解するため押し黙る。「これは現状、調べようにもない。現在まで残る英雄の記録を確認し、そいつらの本当の顔を知らなきゃ、俺が異端なのか、全員が何か共通するものを持っているのか把握しようがない。だが、もし俺が異端なら、それはこのシステムに矛盾が起こったということだ。もし俺が異端ではなかったら、お前らの言う天使の大前提が間違っていたということだ。どちらにせよ、世界の根幹を揺るがす大事件だよ。」

ここでもう一つ、疑問を投じてみよう。

お前らは何故、このシステムの頂点を神 『護神』、『女神』、『死神』の名で呼び、その下につく者を『英雄』と呼び、『天使』、『神子』、『悪魔』と言い換えた？ 何故それぞれの神はそれぞれの力を有するのだろうか？ 何故そう決めた？」

二人が答えないのを見て、シャルフが仕方なく答える。

「歴々降り立った者たちが、その名に相応しい行動をとったからだ」  
「例えば？」

ヴァインの白々しい問いかけに、シャルフはこらえて続ける。

「英雄が『英雄』と呼ばれる所以は、その行動を信奉する者にとつて最高の存在だからだ。」

天使は自らが認めた仲間を助け、護る為に戦った。それが結果的に国を尊ぶという解釈に代わったが、大筋は変わらない。そこからできた名が『守護者』で、他との比較から神に仕える『守護天使』に転じた。

神子は常人でありながら聡く、神に選ばれた者。それゆゑ

「待った。そこは『何かに選ばれた者』とばかりそうか」

細かいな、とシャルフが眉を顰める。

「何かに選ばれた者。それゆゑ『神子』の名を冠する。」

悪魔は人を殺す為に動き、そのためなら欺くことも残虐なことも為す。畏怖の意味を込めそれを『悪魔』と呼んだ。

それら呼び寄せた存在として、上位の存在は『神』とされた。守護者を呼ぶがゆえ『護神』。

平等を第一とする神子を選ぶがゆえ、その平和への追求、慈悲深さから『女神』。

殺しをなんとも思わない非道を使役するがゆえの『死神』。

そしてそれぞれが有する力は――

そこでシャルフは言葉を切った。

「選ばれた英雄たちが、常にその力を行使したからだ。天使なら『属性』。神子なら『法則』。悪魔なら『生物』。そこから神はその力を――

「嘘だ（ダウト）。それだけじゃないだろう？ お前はまだ知っている」

ぐつ……と言葉に詰まり、渋々切りだす。

「……この世界の創生神話を知っているか？」

「いや。ヴァル＝ルージエ（あの国）じゃそんなのは見なかった。仕方ないからミールルハイト（こつち）で調べるつもりだったんだ。まだ許可が降りなくて困る」

やれやれとは首を振るヴァイン。しかし残りの二人も同じように首を振った。

「……こつちでもないのか」

考えるように手を口許に当てるが、続けてくれと目線を上げてシャルフを見た。

「世界は三人の神が作り上げた。一人の神が万物の基礎を作り上げた。アイデンティティ 属性を。一人の神が世界を縛った。万物を動かす法則を。一人の神が万物を作った。生けとし生けるもの含めた万物を。」

それぞれ『護神』、『女神』、『死神』に対応していると考えれば、何もおかしくはない。創世神話が語られなくなると、そちら



の伝承の中身が分からなくなろうと、伝わるものは伝わるだろう」

「ああ。おかしくはない。おかしくはないが　お前、情報源は？」

「残念だが覚えていな　」

「分かった。黙秘か。問題ない。おもしろい話ありがとう。

仮定が結果に変わる日は近そうだ……」

ヴァインは後半、一人納得するように呟いた。

二人が息をつき、置き去りにされていた氷水が声を上げる。

「結局なんであんたは私と同じ勢力に入らないのよ!？」

「あーそれか。おもしろくなって忘れてたぜ」

ケケケと嗤い、椅子にもたれかかる。

「つまり俺が異端なのか否かが問題となる。

俺が異端ならば、本来ありえなかったであろう　天使と神子の共闘を作り上げることになる。そうなったとき、システムの綻びが大きくなつてはどうなるか分からん。今聞いたように創生から続く話なら、最悪世界自体ぶっ壊れるかもしれない。だから言い訳が必要だ。俺たちは暫定的に手を組んでいるだけです、というな。

そして俺が異端でなかった場合。これは何も問題はない。俺という思想が天使として選ばれたのなら、俺は俺の思うままに動く。結果天使と神子が手を組むなんて前代未聞の出来事も平気で起こす。異端でないのなら、これは予想された行動であるはずだ。仮にも『神』と呼ばれる存在が作り上げたシステムだから。そう言っちゃ俺は異端　矛盾であるというのはいってことになるが、まあいい。

こんなところだ。何か質問は？」

完全に諭され、「うう……」と意気消沈の氷水。

話を聴き入っていたアシルが手を挙げる。

「ちよつといいいか？」

ヴァインは投げやりに「どーぞー」と答えた。

「なんでこの世界に来て一月のお前がそんなに詳しいんだ？」

しばし、部屋に静寂が訪れた。

「そ、そう言えばそうよ！　私と同じ時にこの世界にやってきとい

て、なんでそんな『何もかも知ってます』って顔でバカにしてるのよ！ おかしいじゃない！」

それを聞くと、ヴァインは冷静に氷水の目元を指した。

「何？」

「限」

見ればヴァインには深い隈があり、反して氷水は健康そのものというような、綺麗な肌の色をしていた。

「一日何時間寝てんだ？ 寝すぎじゃねえのか？」

「うつ……うつ……。確かに一日七時間は平気で寝てますよ！ 元の世界のリズムだとそんなだからしょうがないじゃない！」

「参考までに聞くんが、元の世界は一日何時間で回ってたんだ？」

「二十四時間よ！」

「ここより二時間多い訳か。それじゃおねむの時間が長くてもしょうがないわな」

「バカにしないでよ！ あんたのとは何時間よ！」

「二十五だ。つっても足りなくて、徹夜なんか日常だったが」

今も変わらん、とニヤニヤ笑う。生気は有り余っているようだ。

「まあそういう訳で？ 夜もぐっすりな神子サマと違い、俺は研究熱心なんだ。寝ても覚めても好奇心。歩けば調べ、調べば探る。それが俺様の日常よ」

「いや、研究熱心って何？ あんた科学者なの！？」

氷水のツツコミに「言ってなかったか」と笑う。

「聞いてないわよ！ それならなんであんたあんなに強いのか！」  
「お前が弱すぎるだけだ。まあ科学者つてのとはちよつと違うけどな。うちの家系はそーゆー疑問に思ったら調べなきゃ死ぬ、調べないくらいなら死んだ方がマシだつー、好奇心と知識欲の針がぶつ壊れてるバカばっかなんだよ。……俺も似たようなもんだがな。」

俺だってこの一族に紡がれてきたこの炎がどこまで継承されてるのか 戦乱の全盛期から進化しているのか。知りたくて知りたくて堪らなかった。元の世界じゃ戦う相手もいなかったからな。この

世界で試すのは決定事項だが、一概に試すと言ったっていくつか方法は分かれる。雑兵を蹴散らす汎用性、猛者と対峙可能な高火力。まあ　王に反逆しようとしまいと達せれるんだが、それで死んじや元も子もない。単純に、生存確率の高い方を選ばせてもらった。それが反逆の理由だ。ずっと気になってたんだろ、イラレージユ君？」

とシャルフをその名で呼んだ。  
ハアー、と長い溜息をつく氷水を尻目に、シャルフは立ちあがった。

「今の話、上に報告してくる」

「あ、私も……」

ア ril が続いて立ち上がり、二人は扉に向かう。

「シャルフ君。終わったらそっちの隊長の妹さんに会いに行つてやれよ」

立ち去る背中に、ヴァインがからかうように言った。

「……言われなくとも」

照れるように進むシャルフと、後ろを笑顔でついていくア ril 。扉が閉まる直前、ア ril は残る二人の会話を耳にする。

「お前はお前で暇そうだな。町の案内でもしてくれねえか？」

「イ・ヤ・よ！」

パタンと扉が閉まり、二人の声はア ril に届かなくなった。

## 二章 2

そこにあるのは血肉の香り。

悪魔はそこに、堂々存在した。

ミールルハイトの南、宗教国家サマサマーナ。

今この国は、滅亡の危機に瀕していた。

始まりは小さな村の消滅だった。

他国にて英雄の光が望まれるのとほぼ同時、国の最南端に存在する村が消えたのだ。

旅人からもたらされた情報に、国は半信半疑で使いを出した。

使いの者として信じていない。一夜にして村が消えるなど、有りえるはずがない。大方地方の為政者の重税に耐えきれなくなった村が、丸ごと姿を消したのだらう。それを比喻として跡形もなく、と。そうでなければ、旅人の勘 違いだ。

そんなことを思って、村へと赴いた。

否。

そこは村ではない。

跡地だ。

村があった場所。そこは文字通り、なんの比喻もなく消えていた。村があったのは、交通の便が悪く、人の出入りも少ない街道沿い。小さな街道を下っていけば、その村には辿り着く。

だが待ち受けていたのは、残骸散らばる地平。

人どころか建物すらなく、あるのは家が建ってあっただらう、その建材と大地にしみ込む血の香り。

そして数メートルの体軀はあろう、巨大な獣の足跡。

これはもう、明らかだ。

死神の英雄、悪魔。

それがこの国にいる。

大山脈に住まう魔物は、こんなところに突然現れはしない。

この世界に転移を可能にする魔術はない。

ならばこの世界外。異界より呼び寄せられた者であるが必定。

使いの者はすぐさま馬の向きを返し、王都へと報告に戻る。

神に祈りを捧げながら。

その先に何が待っているのか知る由もなく。

数日後、使いの者は大変疲弊していた。

王都へと戻ろうと馬を走らせた使いの者だが、次の町でも異変が確認される。

血のしみつく平野と、獣の足跡。

ここもやられたかと、恐怖に慄きながらも自らの使命を全うしようと走らせる。

が、

行く先々、村が、町が、消えている。

建物ごとかじられたかのように、残骸が散らばる。残るは妙に広い土地と血肉の香り。獣の足跡ある場所ない場所様々で、果敢にも足跡を追うが不自然にも途切れている個所が多く見られる。

それでももう、使いの者には分かっていた。

悪魔はこの国を北上している。

それも途轍とてつもないスピードで。

使いの者は、行きにこの町々を通っているのだ。それとどこかで行き違ったとはいえ、馬に追いつかない速度で進み、町を全壊させ、更に進む。

それは文字通り悪魔の所業で。

しかしそれも、王都直前でピタと止まった。直前の町は半壊しており、生き残った者が言うには、襲ってきた魔物は何十人も喰らったところで満足したように姿を消したのだという。

彼はそれに僅かな安堵を覚えながら王都に戻り、報告に戻る。

これは大変危険だと。

近隣に助けを求めるべきだと。

南の町から既に報告があつたため、権力者たちもその案はすでに動いていた。

北にはミールルハイト。そこには神子が存在する。

彼ら宗教国サマサマーナの人間にとって、崇拜すべき対象 女

神、その使者が。

そして権力者たちにとって、利用すべき愚者が。

存在するミールルハイトへ、既に報は向かっている。

## 二章 3

結局 氷水はヴァインを案内することとなった。

先のやり取りから見ても分かる通り、ヴァインはそれなりに弁の立つ方である。論理と感情が入り混じった拙い言葉は、正面切って論破される。

やや苛立ち混じりに外へ出た氷水は、まずどこへ連れて行くのかと考える。

どうせならさっきの仕返しにおもしろくないところに……

「まともな案内しろよ？」

読んだかのように言葉をかけるヴァインに、氷水は動転しつつ答える。

「あ、当たり前でしょ！ 公私はきっちり分けますとも！」

言ったなと、彼は不敵に微笑む。

もしかして図られた？ などと邪推する彼女に、彼は黙ってついていく。

これは思いっきりプライベートな内容だと気付きながら。

「さあまずは ってあんた、その服で？」

彼が着ているのは、相も変わらず紅蓮の祭祀服。通気性はいいのだろうが、かなり目立つ。

「この服しか持っていないからな」

苦笑交じりに言うヴァインに、氷水は「決めた」と声を出す。

「まずは服ね」

スタスタ先を歩く氷水に、ヴァインは注文をつける。

「他の奴らに紛れるってえ意味じゃ服に問題はないが、この素材、あると思うか？」

彼は自身の服を指して言う。

「ない……でしょうね」

氷水は冷静に判断する。

「燃えない布　アスベストでできてるんでしょ？　材料とか私知らないけど、そーゆーの消防士の服とかにも使われてるって聞いたことあるから、その分有用だと思うわ。それなら高値で取引されてもおかしくないけど、都合よくここに流れてくるとは……あ」

「何を言っているのかはさっぱりだが、それなりに価値があるなら、逆に集まるぜ。ここは流通の要所だからな」

「……そうね。でもこの世界でもそうとは限らないから。ひよっとしたらそっちの世界よりもさらに希少かもしれないわよ」

それなら普通のいいよと、諦め交じりに漏らすヴァイン。もうそこには、古着屋があった。

「まずはあそこでいいでしょ？」

「まあ文句言える立場じゃねえしな」

二人は衝突なく古着屋へと入った。

「いらつしやい」

どこか無愛想な爺さんが出迎える。

「なにかお探しかい？」

「えーとこっちの男の服、何着か見繕ってほしいんだけど」

「その前に。爺さん、この服と同じ物でできたのねえか？」

ヴァインが長い袖を爺さんに見せるが、爺さんは「お生憎と」と首を振った。

それじゃさっきの注文通り、と言葉をかけてから傍にあった椅子に座ってくつろぎ始める。

「……あんだ、本当に堂々としてるわね」

「それほどでも」

そんな風に嘯いて、隣に座らないかと椅子を示す。

分かりましたよと素直に座る氷水。

「ここが終わったら次は？」

「そっちに任せる」

消極的なヴァインに、氷水は不思議に思っ言葉をかける。

「あんだどうかした？」



彼は少し返答に躊躇うが、まあいいかと答える。

「こんなに人がいるとは思わなくてな……」

疑問符を頭に浮かべる氷水に、ヴァインは自分の世界のことを話し始めた。

「俺の世界はもう、滅亡寸前なんだよ。大昔の魔獣大戦争とやらで魔物の撲滅を成功させるとともに、人類の大半が死んだそうだ。生き残りは各地で細々と暮らし、隣の村に行くまで歩いて二十日は当たりまえ。力があつたって戦う相手もいねえからやることはない。ただ動物を狩り、作物を育て、日々の生活に満足するだけだ。だからこつも人が多いのは気が滅入る。俺は静かな方が好きみたいだ」  
弱音を吐くヴァインに目を丸くする氷水。

「なんだ？」

「ん、ううん、なんでも」

氷水の見たヴァインという男は、いつも自信満々、傲岸不遜としているような奴だと思っていたが、それが早くも崩れ去った形である。それに親近感を覚えながら、古着屋の主人を待つ。

しばらくして、主人が十着ほど服を持ってきた。

「好きなのをお選びくださいませ」

そしてヴァインは、悩む様子もなく幾つかの服を選ぶ。

ほとんどが赤々しい、派手な色だった。

「……少しは地味なの買いなさいよ」

「分かつてるよ」

そうして手に取ったのは、白いのが一着だけ。

ため息が出そうになるのを我慢して、氷水は「いくら？」とおじいさんに尋ねる。

「銀一枚と銅二十枚です」

氷水が財布を取り出そうとするのを、ヴァインが止める。

「金なら持つてる」

その手にはいつの間にか、高そうな財布が握られていた。

「……どこから出したの？」

「袖」

袖の下って……

今度こそため息をつきながら、ヴァインに払うよう眼を向ける。

「こいつでいいか？」

銀貨を二枚出すヴァイン。

「ありがとうございます」

言葉だけは丁寧に、お爺さんはお釣りだと言って銅貨を八十枚渡す。

それを財布に入れると、袋を持って外へ出る。

「で、次は？」

ヴァインの問いに、ちょっと悩んでから、

「ぐるっと一周しましょうか」

簡単な提案をした。

ミールハイト首都ミーティアは、中心に城を構える城下町として栄えていた。

家々は城を中心に据えるよう円環型に立ち並び、大きく東西南北四つのブロックに分かれる。

北と南は人の出入りが激しい為、必然露店が並び、市場もそこを中心に並べられる。

居住区は主に東西の内側だが、西は富裕層、東は中流層と分かれ、貧民層は食べ物求め南北に住まう。そのため南北は治安が悪く、対照的に西地区は良い。また住人の差から、西地区には高級レストランや仕立屋などが、東地区には古着屋や雑貨店が、南北には宿屋や酒場などの働き口や人の集まる場所が多く存在する。

「なるほど町の仕組みは分かった。で、アリル団長の家は？」

「どうしてそうなるのよ」

町をぐるりと一周し、東地区へと戻ってきた二人。ただ歩くのもおもしろくないと食べ歩きをしていたのだが、それも遂には飽きた

か、ヴァインが突然そんなことを言った。

「えーとなんだ？ そう、シャルフだシャルフ。あいつが団長さんの妹とちゃーんとやってるか、冷やかにしに行こうぜ」

突然の提案に、氷水は額に指を当て、頭痛そうに答える。

「あんたって……なんで『そう』なのかしら？」

「好奇心には素直に従うが吉だぜ」

「こっちには『好奇心は猫をも殺す』ってことわざがあるんですけどね！」

カカツ、と乾いた笑いを放ちながら、ヴァインは氷水の肩に馴れ馴れしく手を回した。二人の顔が近づく。

「まあまあ、そう言うなよ。お前だってあのお堅そうな団長さんのオトモダチだろ？ 二人がどうなるのか気になるだろうよ？」

こういう馴れ馴れしい男に幾度か捕まったこともある氷水である。顔が近づこうが動じず、肩に乗った手を払いのけた。

「確かに気になるけど、私はあんたみたいに干渉しないの。町の案内は終わったでしょ？ そろそろ帰るわよ」

城へと歩を向ける氷水に、ヴァインはやれやれと首を振る。

「甘いな、神子サマ」

「？ 何がよ？」

不審げにヴァインを見る氷水。それを受け、勿体つけるように間をあける。

「早く言いなさいよ」

「考えても見ろよ。突然現れたどこの馬の骨ともしれない奴が、曲がりなりにもこの神子有するミールハイトの国の魔道騎士団長の家へと行ったんだぜ。他国の間諜にしてみれば、これは付け込める弱みだと思うだろう。シャルフの強さは知らないだろうからな。逆にその強さを知っているヴァルルージェの間諜にしてみれば、これは逆にアイルとその妹のことを知らない。人質にできるかもと襲う可能性がある。だから下手に二人を自由にするのは危険だ。あの二人だけなら問題はないが、団長の妹とやらもいるんだろう？ そ

れにもし二人が揃って部屋を出てしまったら？ 妹さんは狙われるぜ。そうなる前に俺らでどうにかする必要がある」

ヴァインの並べ立てる嘘八百に、氷水は青い顔をして脱兎のごとく駆ける。

驚くほどの速度で町を駆け抜けると、東地区の外れの小さな軒家に辿り着く。周りに家はなく、少し離れたところに少し大きな建物 孤児院が庭に花を咲かせてあるだけだった。

氷水が壊すように扉を開く。

「大丈夫！？」

それを受け、「ん？」と振り向くシャルフ、ア ril、ベッドに座る少女の三人。

呆けたように立つ氷水の背中に、ヴァインは嫌みたらしく一言。

「バーカ」

「だ、騙したわね！」

「てめえが勝手に勘違いしてつつこんただけだろうが」

入り口で始まる口論を止めるべく、ア ril が立つ。

「どうしたんだ？」

「こいつがア ril やミ ril が襲われるかもって騙して私を」

「俺は可能性があると言っただけで、今まさに襲われているとは一言も言っ てないんだがな？」

それだけでなんとなくの事情を察したア ril は、フフと笑って「入っ て」と言っ た。

家は六畳一間の小さなもので、二つのベッドとキッチン、衣服を入れた棚、小さな机と椅子二つでもう一杯だ。

ア ril とシャルフは座ってくれと椅子を勧めたのだが、ヴァインも氷水も辞退してベッド脇に立つた。その時氷水が驚いていたのは言っ までもない。

「押しかけたこっちが悪いから」

「全くだ。お前が突入しなけりゃ水入らずのところを邪魔せずに済んだのになあ」

もしやそれを言うために辞退したのか勘ぐるはめになったのは、氷水としても非常に苦しい。

そこでベッドの端で上半身を起こしていた少女が、ツンとした眼をヴァインに向けた。

「あなた、誰？」

「ククツ。可愛げのねエガキだ」

無愛想な問いに、呟き返すヴァイン。氷水が「止めなさいよ」と止める間もなくヴァインは続ける。

「ヴァイン」ハイゼルト。『天使』だ。よろしく頼むぜ」

と空中に炎が「よろしく」と、この世界の共通言語を躍らせる。

眼を丸くする氷水を尻目に、少女は先ほどよりも眼を尖らせて訊く。

「ヒミナお姉さまの敵？」

見上げる眼差しは、子供とは思えないくらい鋭利で伶俐。

「そんな赤い目で見られてもな。泣いてたのがバレちまうぜ？」

ハツと目を擦る少女。「泣いてないもん！」と強がるが、それを見てヴァインは再び「クカカツ！」と笑う。

「？お兄さま？と感動の再会だろ？ どこぞのバカに邪魔されたからって、無理して泣き止む必要はねえよ」

氷水が「誰がバカよ」という視線を送るが無視。少女が顔を上げると目元が僅かに潤んだ程度で、先のツンとした表情は変わらない。「いいねえ気に入った。名前は？」

躊躇うように眼を伏せ、ア rilルに眼を送る少女。頷きが帰つてくると、そつと答える。

「ミ rilル」クウェート。ア rilルお姉さまの妹よ」

ヴァインが手を差し出すが、ミ rilルはプイツとそつぽを向く。

「そうかい」

あつさり腕を引っ込め、踵を返す。

「ん、もう帰るのか？」

ア rilルが問うと、「ああ」と返事が返ってきた。

「おもしろいのが見れた。また今度邪魔するぜ」

後ろ手に手を振って、外へ行くヴァイン。氷水もハツと、それに続く。

「ごめんね邪魔して。三人ともごゆっくり」

手を合わせて謝り、二人は城へと向かった。

## 二章 4

翌朝。

来客用の部屋で寝泊りをしたヴァインは、部屋をノックする音で目を覚ました。

「ん？ 誰だ？」

服はやはり、紅蓮の祭祀服のままだった。

「俺だ」

「ああイラレー……シャルフか」

扉を開けると、緑髪の青年が鎧姿でいた。

「なんだ朝早くに。久々にぐっすり寝ようと思っていたのに台無しだぜ」

ノックで起きる浅い眠りをしておきながら、口から出たのはそんな嘘である。シャルフも気付きながらもそれには触れず、用件を済ます。

「お前、所属する軍は決めたのか？」

「前も言った通り、第一候補はお前に潜入任務を申しつけた、頭の切れる奴んとこだな」

それは都合いいと、シャルフが踵を返す。

「お呼びだぞ、天使」

「ふん、そいつあ光荣だ」

すっかり頭を覚醒させ、シャルフの後ろをヴァインがついていった。

シャルフが向かったのは、西地区の豪邸だった。

一軒一軒がかなりの大きさをひしめき合いながらも、その華美さを損なわぬよういくらかの間隔を開けて建っている。

彼らが訪れたのは、その中でも一際小さい邸宅だった。

「ふん……。王族でもなく、軍属でもなく……。か。そして家は貴族

にしては小さいが 実用性重視と見るべきかな。こりや当たりだな」

シャルフは邸宅の扉の取っ手を掴み、コンコンと扉に打ちつけた。間もなく扉が開く。使用人が内に控え、扉の横で腰を曲げた。メイドの案内なく、歩きなれたように二人は進む。

「シャルフ、一つ訊きたかったことがある」

「何だ？」

歩む速度は変えず、そう返す。

「お前がヴァル＝ルージエへの潜入任務を受けたのは、金の為だけじゃないだろう？」

「……何が言いたい？」

歩調は変わらず、シャルフは邸宅二階にある部屋を目指す。

「とぼけなくてもいい。十歳やそこのガキが、他国への潜入任務を受けるはずがないだろうが。金が出たからって、孤児院で育ったからって、お前みたいなひねた野郎が、孤児院にそこまで深い思い入れがあるとは思わない。勝手に助けて勝手に送りだすんだ。仕送りをしなけりゃいけない義務はないはず。まア俺の世界にやそんなモンなかったから実際はどうか知らねえが……」

自らの知、及ばぬ故言い淀む。しかしすぐに言葉を繋ぐ。

「とにかく、ガキがまだ戦争の影も落ちていないご時世に、わざわざ他国の それもとりわけ治安の悪い国に赴いて潜む訳がわかんねえ。それなら」

「ついたぞ」

ヴァインの言葉を遮るようにシャルフが言った。

「話はまた後だ」

ノックとともに、部屋へと入る。

部屋は広いながらも、廊下や広間と比べるべくもない、質素なものだった。

「来たかシャルフ」

その中で机に向かっていたのは、白髪が目立つ老紳士。筆を持つ



手を止め立ち上がり、シャルフとヴァインに向き直る。

「よくぞ来た、天使ヴァイン」ハイゼルト。おぬしを我が軍に迎え入れられること、心から光栄に思う」

老紳士の青い目は、鋭く深い。

それは隣国の元王などでは到底敵わない、清濁併せ呑み突き進む者の底知れぬ器。

「なんだこいつ……！」

その片鱗を嗅ぎ取ったヴァインは、思わずと言う風に言葉を漏らした。

「口を慎め。このお方は、今のお前ではまだ早い」

忠告を促すはシャルフ。

敵対しながらも認めた相手だ。シャルフ、あるいはイラレージュという男がどれだけの自信を内に秘め、臆すことなく立ちまわってきたかをヴァインは知っている。その男が『このお方』だ。その言葉に揶揄の響きはもちろん、屈服を強いられた時の反するがごとき苛立ちも感じられはしない。

僅かな驚きと共に眼を睜<sup>みは</sup>るヴァインへ、老紳士は穏やかな口調で言葉を続ける。

「別によい。相手の力量を測れぬ弱者は私にはいらぬ。そして見極めてなお正しい選択を下せない愚者は、従えるに値しない。どの判断を下すかは個人の自由。それを互に見極めるための面会なのだから」

男の言葉に「話が分かるね」と、余裕を取り戻して言う。

「それで俺がお前の下に『ハイそうですか』と従うと思って」

瞬間、刃を突きつけられる。それも三本。

一本目は隣のシャルフの長剣。

二本目は、扉の影にいた男の短剣。

そして三本目は、殺意の刃。目に見えない魔力が、違和感を生むほど凝縮されて向けられていた。

ヴァインはそれらを見、感じて、握りかけた剣の柄をそっと放す。

「とんでもねえガキだな……」

見れば部屋の隅、眼の暗い少女が錫杖片手に、魔力を放っていた。  
「おい、隅のそいつにや気付いていたが、こっちの男は何だ？ 気配が全くしねえぞ？」

刃に魔力と、敵意を超える殺意を突きつけられてなお、彼の平静は揺るがない。この武力より、先の男の大器、そこから感じられる圧力の方がよっぽどまずいと彼は思う。

「優秀な部下だよ。まだ戦いを覚えたての君とは違う、ね」

挑発するように答える老紳士を前に、ゆっくりと手を上げて降参の意を示す。

「負けだ負け。本物の暗殺者ってやつかこいつ？ シャルフよりもよっぽどやべえじゃねえか」

見れば短剣には薄く水気が見られる。毒だろう。

「まあいいさ。お前らがその男を崇拜しているのはよくわかった。

俺としても問題ない。何せ若年のシャルフ君を魅せ、幼馴染の命で脅して敵国のスパイにさせるような男だ。この国の裏を一手に担ってそんな極悪人！ 飾りでしかない俺が従わないはずがねえ」

ヴァインの言葉に、シャルフが驚いたように問い返す。

「お前……」

「ああもちろん気付いていたさ。どこに幼馴染ほつといて他国に潜入する奴がいる？ 正義を信じてやまない善人様か？ そんなやつが、潜入任務なんか務まるか。力が全ての独裁国家で、その現状を見て、それでも耐えて上へ昇り詰めるなんて小賢しい真似できるはずがねえ。ならなんだ？ それが本当に必要なことだと、認識させるか？ 小さなガキに？ それこそ無理だ。仮に認識させたところでガキはガキだ。無慈悲に振る舞うのも限界がある。だから」  
不敵に笑う。何もかも知っているかのような、ブラフ混じりに堂々と。

「脅した。幼馴染を使って脅した。まずは金。何をもってしてもそれで釣る。釣った後は、脅す。ガキはガキなりに、誰だって正義感

を持っているもんだ。自分の所為で知り合いが 友人が それ以上の者が 死ぬのを良しとするはずがない。後はそれをネチネチネチネチ刷り込んで御出立とした んだと思ってたが……な」

齒切れ悪く言葉を断つ。

懐柔？ お前が？

てめえはそんなに安かねえだろ、とヴァインは思う。

紛い物の俺より強く、あのふざけた国で期を待てるほど強かだ。そして無慈悲に振る舞いながらも、てめえはてめえの知らないところで人望があつた。王に従う犬でありながら、兵たちはお前を信用していた。だからこそ王や貴族を殺した後、あの国の兵たちは俺たちを逃した。てめえは運よく逃げたのだと思ってるのかもしれないが、あいつらはその一回だけは処罰も覚悟して見逃した。軍の引き戻しも、歩きの俺たちより遅く早馬が辿り着くなんてありえない。

黒幕あいつの作戦は、自身の手を汚さずに玉座を乗っ取ることだ。

その為には犯人は徹底的に追い詰め、捕まえないければならない。少なくともその姿勢を崩しちゃいけない。だから王の死は軍に回つてただろうし、容赦をする旨も書いてなかったはずだ。なのに見逃された。それだけお前が慕われてんだ。殺されていいとは誰も思っ  
ねえんだ。

そう、お前は下に付く器じゃねえ。この男に負けるようなやつじゃない。俺の見立てではこの男と張れるくらいには……

考える、考える。現状を考える。必至を得るべく必死に必死に。

俺の見立ては偽りか？ 甘いのか？ いや違う。違うはずだ。仮に俺の勘が甘かったなら、俺はあの時、親父と一緒に死んでいる。衰えていたなら、俺はイラレージュと一緒にここまで来れていない。俺は、俺の勘は、俺の観察眼は、まだ、生きている。だから、こいつは、こいつらは……！

「お前らは、お前らの都合で動いている」  
断言する。

「国や国王、その下の誰か。お前らはそんな奴らに従っているんじゃない。そしてお前ら二人は一方的な上下関係でもない。対等な関係にあってなお、仮初めの上下関係を演じている」

そりゃあ忌むような口ぶりがないはずだ。この関係は、合意の上で成り立っている。

何のためか？

決まっている。

この俺を、騙す為。そうだろう？

そこで初めて、老紳士が笑った。

「シャルフ　お前の慧眼にも恐れ入る」

その眼は鋭さを潜め、純粹にこの場を笑っていた。

「そう言ってくれるとありがたいな、ヒュネー」

シャルフも気さくに言葉を返す。

皆各々の？武器？を収め、場の空気は完全に弛緩していた。

「……あー、あー……。まあいいさ」

すると一人剣を抜くヴァイン。咎めるように皆が見るが、彼は警戒させないよう下がると、ゆっくりとそれをかざす。力を受けた神剣は、それをヴァインの形へと変化させる。

「折角だ。一遍に済ませてしまおう」

彼は掲げた刃を、シャルフへと向けて問う。

「お前らは俺を試した。あえて訊こう。その結果は？」

「文句なしだよ。我々には君の力が必要だ」

答えるは老紳士。ヴァインの雰囲気が変わったことを受け、彼もまた弛んだ空気を締めるべく、厳粛とした声で答える。残りの者も立ち位置を変え、彼を迎え入れるように並んだ。

「刃を握り、自らの名において誓え」

応ずるヴァインの言葉。たったそれだけ。しかし皆、それで彼の言外の意を察す。

通過儀礼だ。

お前を俺と対等の存在と認めるといふ、そういう宣言。

刃を握るとは即ち、血を流し、血で以って誓えという、血盟。

「ヒュネー」スザナフ」

老紳士が。

「シャルフルージエ」

緑髪の騎士が。

そして。

「天使、ヴァイン」ハイゼルト。

俺もまた認めよう。俺はお前らの仲間だ。お前らは俺の仲間だ」  
そう言って刃を握る。

上からヴァイン、シャルフ、ヒュネー。

ヴァインの血がシャルフを汚し、シャルフの血がヒュネーを汚す。  
血はヒュネーの下で混じり合い  
ボオツと、炎となって消えた。

三人の手を、炎がそつと撫でる。

「これで終わりだ。

…… フン、予想通りだな」

彼がシャルフを見て言うのと、「なるほど」と彼も頷いた。

「刻印だ」

彼は血を流した右の掌を差し出す。

「天使の軍勢。その証。僕の刻印が今、芽吹いた」

彼の掌には刻印 剣抱く二つの翼が、くつきりと描かれていた。

### 三章 日常の変化

帝国ヴァル＝ルージエに住まう騎士はかく語りき

あの天使と言うやつには驚いた。

先代の天使と言うのは、この国を腐らせ暴虐の限りを尽くした大罪人だ。この国に住まう者どころか、世界のほぼ全ての者がいい印象を持たない。

しかしこの男、伝承に語り継がれるそんな傍若無人、悪逆非道な男とは一味違う。最初出会った時の印象は、やはり先代の伝承もあってこのような男かと落胆せざるを得なかった。しかし彼は、乱暴なようで聡明だ。自分勝手に振る舞ってはいるが限度はわきまえ、おもしろきことあればそれに喰い付き、乗ることもできるお調子者。終始ハメを外したのは恐らく最初だけ。

そして何より、この国の現状を憂いていた。自分勝手な貴族たちと貧窮に喘ぐ民。虐げられる者を助けるべきだが、王族に目をつけられれば動けない。だから仮面を被った。王族に従順な、利用しやすい単純な奴と思われるような仮面を。

そして彼は、あるうことが軍の者である私に接触し、クーデターを持ちかけた。この世界へ降り立ち三日でだ。私は既にクーデターを計画し、貴族を皆殺しできるだけの武力。即ち金に釣られず裏切らない者たちを集めていた。王らが国を支配してできていたのは、従える兵が強力なのではなく、従わないとどんな目に合うかわからないという恐怖を与えていたからだ。兵の多くは歯向かえば殺されるか、他の人間に重い罰が与えられるというのが分かっていたからこそ何もできなかった。だから一斉蜂起できれば、兵は全てこちらにつく。こちらが正しいと分かっているから。こちらが勝てると分かるから。

私が行ったのは、一斉に牙を剥けるような念入りの根回しと、貴族を皆殺しした後でも国を回せるような人材を集め、教育すること。

貴族らに見つからないように行つそれらは、必然場所や時間が限られてくるが、たった三日で漕ぎつけるというのは尋常でない。私は彼の洞察力に驚嘆するとともに、計画の変更を余儀なくされたよ。

「この男を放つておくのはまずい」とね。

結局、彼は反論なく、それどころか絶賛するように私の計画を受け入れた。自らが汚名を被ることを計画に加えてね。

どうして彼がそんなことをしたと思う？

「それの方が勝率が高い」からだそうだよ。

だからこそ、と言うわけでもないが、どうにも彼は負ける戦はしない性分のような。絶対勝てるという保証が欲しいわけではないが、絶対負ける勝負には絶対降じる。当たり前だが、それを何よりも先に考えている。だから彼が感情のままに動くことは、未来永劫一度もないだろう。これは確信を持つて言える。

もしかしたら彼は、それを悔やんでいるのかもしれない。

商業国ミールハイトに住まう主婦はかく語りき

神子様？ ああ、いい子だね。

何がつてそりゃ、毎朝挨拶してくれるたり、子供が転んでたら手を差し伸べたり。優しい子だからねえ……もつと他にこう、とは言えないさね。いつも笑ってるいい子。私からは、それ以上の言葉は出ないよ。

でもねえ……最近は心配だよ。なんてつたつてコレ、ができたみたいだからね。

おや？ 知らないのかい？ ここいらじゃもつぱらの噂だよ。

「神子様に男ができた」ってね。

その男がどんな姿か？ うーん、いつも赤い服ばかり着てる、今までここいらじゃ見なかった顔だね。髪も真っ赤、目の下には刺青なんかして、粗野な男だよ。

それでも神子様、あの男の何がいいのか、いつも怒ったり笑ったりしてるんだよ。

今までは愛想笑いばかりだったんだけどねえ……やっぱり男は女を変えちまうのかね。

あ、そうそうそう言えばお隣の……

宗教国サマサマーナに住んでいた者はかく語りき

あれは、まずい。あんたが何もんなのかは知らねえが、関わるのはやめておけ。伝承で言われる悪魔なんかとは比べモンにならねえ。後悔する。

何故か？ バカなことを訊くな。見れば分かる。

あの暴力は……生きることの無意味さを教えてくれるさ。



### 三章 1

シャルフの刻印成立から十日余り。彼はその証をア ril や、氷水を含めた全員に隠して生活していた。

これは一つのカード。敵に易々と知られてはいけないものだ。戦で敵の意表を突くには、相手に隠すことはもちろん、味方に隠すことも重要となる。指揮する立場の者に知られれば、その力を考慮しての配置となり、布陣にその意図が薄く滲むのだ。パワーバランスをとったり、重要拠点の守りだったり。そこから力量を察知される可能性もある。できることなら不意について楽に倒せるのが一番いい。

シャルフの現在の地位は、貴族ヒュネー「スザナフに仕える一騎士。神剣と天使を得た功績はヒュネーの手柄となり、それを達したシャルフには何の恩賞もなかった。

理由はいくつかある。

まず帝国の方から、王を暗殺した者へ手配が回っていること。が、これは表面的な理由だ。帝国の内情 無能な貴族も皆殺しにされたこと を知る者なら、そちらが本気で犯人を特定しようとしているなどとは考えもしない。どころか、現在指揮を執る立場の人間が首謀者で、犯人は汚名を着せられたか民のためにやった。そんな予想は考える間もなく思いついてしまう。

また、恩賞についてはシャルフとヒュネーの利害が一致した。ヒュネーはこれまで以上の地位を。シャルフは顔を知られたくはない。その理由から、手柄を譲るのは当然の結果。シャルフにすれば、顔の利く権力者はヒュネー一人いれば十分なのだから。

だが一番の理由は……天使の所在を明らかにしていないことにあった。

ヒュネーが王に報告した手柄というのは、三本の神剣の入手のみにあった。

天使を配下にしたと報告すれば、神子の敵　危険因子とされ、殺される公算が高い。

かと言って捕らえたなどと報告すればそのまま処刑。

神剣入手の主軸を担ったとはいえ、その脅威は無視しがたいものには違いないのだ。この国の実質的トップであるヒュネーといえど、庇いきれるものではない。

神剣のみの献上ならば、喋る口がない故、嘘はいくらでもつけるし黙秘も可能だ。

天使ヴァイン。彼は紛れもなく城下にいて、また城の一室を宿にしている神子とも度々会っているのだが、彼自身が天使であることに誰も気づいていない。無論彼自ら明かした神子とア ril、ミ ril はそのことを知っているのだが、誰に言うでもなく、また城に自由に入出入りしていることから気にしていなかった。

実際はヴァイン、シャルフ共々ヒュネーの名を借りて通行許可を取り、城の氷水とア ril とも出会っている。しかし事情を知らない者は、帝国軍の陽動任務直後から現れたこの二人についてどういう繋がりなのか知らない。

だからこそこの状況。

……今シャルフは、ア ril のファンに尋問を受けていた。

「ああ〜ん？　それでどういう要件で団長につきまたってんですかア？」

頭が痛い……。

額を押さえつつ、やれやれと首を振るシャルフ。

目の前には二十半ばの青年。特徴的なのは腰に提げた長剣と背中  
の青いコート。団長という言葉から予想できるように、魔道騎士団  
の一人のようだ。後ろには似たような年代の男たち　それも国の  
兵士らしき者たちが数人控えている。

場所はミーティア東の中流区域。空に星が瞬く頃だった。

シャルフはこの街に帰ってから、毎日のようにア ril の家へと向

かっていた。時間は夕刻に変わる間際。いつものようにアリの家へと向かうと、ベッドの上で本を読むミルと、その脇の椅子で同様に読書をするヴァインの姿が。

「ん。少し長居しすぎたな」

パタンと本を閉じ、足元に置いてあった一抱えするほどの量の本を持って立ち上がった。

「それじゃ、また来るぜ」

言い残し、シャルフとすれ違う。

「おい」

開いたままの扉を足で乱暴に閉めようとするヴァインへ、シャルフは呼びかけた。

「なんでお前がここにいるんだ？」

当然と言えば当然の疑問。戦闘狂いのこの男が、何故こんな場所で読書なんかを？

「特に理由はないな。逆に訊くが何故お前はここに？」

返す言葉は余裕に満ちている。

……いや、わざとそう言う風に見せて、シャルフの動きを楽しみにしているのだろう。頬の刺青が僅かに歪んでいた。

「……お前と同じだよ」

「だろうな」

互いに目配せして言外の意図を察し合う。

ヴァインは扉を閉めて家を去る。

「お兄さま、座ったらどうですか？」

しばらく入り口で呆けていたシャルフは、ミルの言葉でようやく動き出した。

「あいつは本を読んでいただけなのか？」

「ええ、そうですよ」

本から目をそらさずミルは答えた。

「お兄さまと同じように、初めてここに来た日から毎日です」  
さらに、聞き捨てならないことを言う。

「何？」

「ですから、真昼　おばさんがお昼を作るために一度帰っていく時間を見計らってやってきて、お兄さまと会う前に帰っていくのです」

ミリルは病弱だ。今でこそ小康状態だが、シャルフが例の任務を受ける時、彼女の病氣快復へ手を打つことを条件として盛り込まなければ、死んでいたかもしれないほどに。

おばさん、というのはミリルの面倒を看てくれる近所の人だろう。それがヒュネーの手回しの結果なのか、アリの仁徳かは分からないが。

つまり、ヴァインは二人の行動時間を知っていたことになる。まるで予知能力でも使えるような

「あ、でもおばさんがご飯を持ってきてくれるので、その後は一緒にご飯を食べるんですよ」

それ以外はずっと本を読んですけど、ミリルの言葉、表情に、それは良かったな」

そんな言葉が、自然と口について彼自身驚いた。

そしてしばらく雑談し、シャルフは帰る。アリが帰ってくる前に。

「そんなところも、あの人にそっくりです」

その言葉に、シャルフは苦笑いするしかなかった。

そして家から数歩で捕まった。

「だから言っているだろう。アリの昔馴染みだ。北へ旅に出ていて、最近戻ったんだ。頼れる者もいないため、彼女に世話になっている」

事を荒げるまいと口裏を合わせておいた設定を述べる。やや苛立っているように振る舞い、あえて隙を残すのも忘れない。

「それじゃあなんでさっき団長の家にいたんだ。今団長の家には妹しかいないはずだ！　しらばっくれるな！」

「恩返しだ。彼女は金銭の類を受け取らない。確かに私が頼んだのは家の手配と、近所の人との仲を取り持つことだけだ。金が絡むほどのことではないだろう。彼女は当然のことをしたまてだと辞退した。」

そんな彼女に恩を返さずしてどうする？ 病弱な妹がいたのは知っていた。ならば私の都合の付く限り、面倒を見ないでどうする。それこそ当たり前のことじゃないか。

しかし……君たちは何だ？ 何故今彼女の家にミルルしかないことを知っている？ 知っていて何故彼女の世話をしない？ アリルが家にいないこともだ。さては君たち、ストーカーの類か？ 彼女の家に近づくのは止めてもらおう。近隣住民として言わせてもらう」

何が待っているのか知らずに藪をつつく愚か者に、彼は一気にまくしたてる。

男たちが怯んだ瞬間、興味を失ったというように男たちから視線を外して路地を去る。

全ては演技だ。ヴァル＝ルージュという病巣で生き抜くために手に入れた力だ。

「待ちなあ」

「……」

無言で歩を進めるシャルフ。

「神子様に付きまといっている頬に刺青をした赤い髪の男を捕らえている。お前さんの連れだろう。しばらく付き合ってもらおう」

男たちのバカな言葉に、

「ぷっ」

思わずもれる笑い声。

「はははははは！」

「な、何がおかしい！？」

「いや、最高だ。久しぶりにくだらないことで笑えたよ」

そしてずっと顔を戻し、いつもヴァインがやるような、愉快そう

な悪い笑みを浮かべ、

「それじゃあ後は任せた、アリル」

暗がりの先にいた昔馴染みへと声をかけた。

「ん。お前たち、犯罪行為を自白するのはいいが、これにこりたら二度としないようにな」

『あ、アリル団長！？』

後ろの悲鳴と同時に、紫の空が一瞬橙の色に染まったのは気のせいではないだろう。

## 三章 2

事が起こるのはいつだって突然だ。

ガシャガシャという甲冑の擦れる音が、決して静かではない大通りに響く。目をやれば城の警備をしているはずの部隊が、物々しい様子 顔は統一された兜に覆われて見えない で通りを過ぎ、南門へと向かっていた。

「どうしたんですか？」

氷水は夜の灯りを切って進む彼らに追いつき、先頭に行く部隊長に声をかけた。

相手は少し遅れて兜を向け、氷水ということを認識すると「神子様でしたか」と答えた。

「魔物ですよ」

歩くペースは変わらず、兜を正面に戻して彼は続ける。

「南南東から魔物の一群が向かっています。早くに気付いた物見が警備兵を出して退治したのですが……後から後から魔物の数が増えているそうなのです」

部隊長はこれで説明の義務は果たしたというように、先よりも早く動く。

「あ、あの、私も手伝います」

歩幅の関係で小走りに追う氷水は、腰に差しているクラウ・ソラスを持ちだした。

「いいえ、結構です。我々には我々の仕事がありますので、神子様はごゆるりと」

きっぱりと、反論を許さない物言い。ですが、と反駁する氷水に、部隊長はやや鋭い言葉を放つ。

「神子様、本日あなたは休みでしょう。数が足りている仕事に無理して出る必要はありません。大体」

再び部隊長は、視線を氷水へ向け、

「あなたはその装備では戦えないでしょう」

今の氷水の姿は、飾り気のない服に剣を提げただけの私服姿だ。決して闘いに出る格好ではない。剣は女神の力で武器となるため、あくまで今の姿ではあるが、問題はそこではなく。

「神子とはいえ、あなたはまだ一介の魔道騎士団員。それも見習い。確かあなたの正規装備は、レーザーアーマーに関節部位を鉄で覆った装備でしたな。悪いことは言いません。軽装でしかないそれで戦場に行くのは死に行くのと同じです。あなたにはまだ、魔道騎士団としての経験が足りないのですから」

部隊長は口の中で遊ぶように、ア ril 団長とは違ってね　と、小さく付け足した。

「で、では、装備を整えてから　」  
「大体っ！」

突然声を荒げ立ち止まる部隊長に、氷水は竦み上がる。

「あなたは何様のつもりですか。我々はこのような事態には慣れています！　わざわざ指揮系統を混乱させてまで神子を投入する必要はありません！

あなたは勘違いしているっ。誰もあなたに期待などしていません  
！」  
「っ」

苦虫を噛み潰したような表情をする氷水。

ハッと、言いすぎたことに気付いたのだろう。部隊長は慌てるように「失礼します」と言い、足早に駆ける。続く兵たちも、同情するように兜をそちらに向けるが声をかけはしない。それは隊長の言葉に一定の理解を示しているからかそれとも。

大通りだったこともあり、多くの人を取り残された氷水へと目を向ける。しかしタイミングを逃したのか、一人浮く氷水に誰も声をかけれない。

「騒がしいと思って来てみれば……まーたおもしろいことになってんのな」



「……ヴァイン」

そこへ、路地裏から現れたヴァインが言った。服は以前買った赤々しい古着の一着だ。腰には氷水と同じように神剣を提げているが、目では朽ちた剣ということが分らない。

「あいつの言い分は当然だな、短気なのがマイナスだが。てめえじや力が足りねえし、お前が前線にいて士気が上がるとも思えない。悪いことは言わねえ。その装備で行くのは止めとけ」

「でもっ、いないよりは」

「マシかもな。けどよお、邪魔する可能性の方がよっぽど高いぜ。この国、大山脈に挟まれてっから魔物の襲撃が多いんだろ？ 何度も繰り返され、パターン化されてるはずだ。そんな中何も知らないだろっ神子様が出しゃばるから、疎ましがられる。なんら不思議じゃない。」

で、実際どうなんだ？ こういう立ち回りは団長さんに聞いたのかい？ そもそも魔物の襲撃なんぞ、お前が降臨してからあったのか？」

「……どちらもないわ」

言っのを恥じるように、間をあけて返す氷水。

「だろっうな。少なくとも魔物の報は。ヴァル＝ルージエの方に流れ込んで、好き勝手してたからな」

「どういうこと？」

「簡単な話だよ。あの国は民の命なんざどうでもいいから、魔物が襲つてきても助けない。だから人は死んで、魔物がのさばる。まあ流れ込んできたのは一時的なものだろっうが……その所為で何度も襲撃の報を聞いた。最後にや燃やし尽くしてやったが」

ニヤリと笑うヴァイン。「さて」と、腰に手を当て言う。

「つまりは久しぶりの敵襲。もたもたするような馬鹿ばっかじゃないだろうが、討ち洩らしがないとも限らない。街は城壁で囲まれているとはいえ、壁を壊されたり、飛んで超えられたりする可能性も十分にある。」

そこにわざわざ段取りの知らない神子様を投入する余裕はないってことだ。精々次のための見学のために呼ばれるくらいだろう。お前本当、一月もここで何やってたんだよ」

やれやれと大仰に肩を竦めるヴァインへ、「いいから続けて」と催促。

「だから、お前がどうしても役に立ちたいってんなら……装備整えて、外ではなく中、市街の城壁近辺を哨戒すべきだな」

最後に何の策もない、例えば「それでも無理に前線に出りゃあ役には立てるかもな」みたいな、投げやりなことを言われると思っただけに、あまりに普通かつ建設的な意見の登場で力が抜けた。

「なんだい、目を丸くして？」

そんな言葉も白々しい。

ため息をつきそうになる口を無理やり動かし、氷水はヴァインに言う。

「そうさせてもらっわ。あなたはどっすの？」

「ついていかせてもらおう。お前の与えられた力つてのも、いい加減に知りたいしな」

そういえば言っでなかったわねと、氷水は今更のように思い出した。

「魔物相手じゃ出番ないわよ」

「なら答えだけでも教えろ」

それなら勝手に調べられると、ヴァインは言うが、氷水は取り合わない。

折角だからずっと悩んでなさいっ！

歩き出す二人。向かうは王城。

まずは装備から。

準備を終えた氷水は、改めてヴァインの姿を見る。

どう見ても着の身着のままなんですけどつ。

頭の天辺から足の先まで、ざっと眺める。以前共に買いに行った服だ。間違いない。

武器は神剣。

防具はない。

頬のタトゥーが、いつものように歪んでいる。

「あんたはそれでいいわけ……？」

「もちろん」

何がだ、と言いつ返さないあたり、やはり自覚しているのだろう。

二人は王城の南東の城壁付近にいた。

魔物の襲撃は南南東からだそうだが、さすがに外の兵も東寄りに張っているだろう。そんな兵たちが見逃してかつ、侵入を許しそうな場所はこの辺だろうと当たりをつけてここを選んだ。

しかし

「来ないね」

「そりやな」

殺伐としているだろう南外壁から離れ、南東のここはまさしく無人、まさしく静寂。この近辺に人家はないようで、僅かばかりの畑を広げるにとどまっている。

市場の格安新鮮野菜の多くはここで取れるんだろうかと、庶民的なことを考えながら氷水はヴァインに問いかける。

「まるで当たり前のように言うじゃない。来ない方が確かにいいんだけど、あなたの立てた予測でしょ？ 何か言うことはないの？」

これでは拍子抜けだ。意気揚々と準備してきたのがバカらしい。

「何を言っている。普通は群れる魔物で防壁は壊れないし、空を飛ぶ魔物つてのはレアなんだ。壁を超えるのは極々稀だ。言っただろう。『どうしても役に立ちたいのなら』と。誰も見張らない万が一のポジションがお前にお似合いだよ」

いつの間にか地面に座り込んでいたヴァインが、城壁を見据えながら答える。

「……じゃあなんであんたは来たの？ 時間の無駄だと分かっているのに。」

そ・れ・と・も……私と二人つきりになりたくて来たの？」

冗談めかして言う氷水だが、返答が返ってこない。

シーンとした空気に、声を出そうとする氷水だが、同時に耳が荒々しい足音を拾う。

「教えてやろうか」

ヴァインは立ち上がり、剣を抜く。剣はたちまち柳葉刀となり、それを壁へと向ける。

「ただの勘だよ」

同時、ドッ！ という音が目の前の城壁を揺らす。轟音は一発では終わらず、続きドドドドドドッとしどりを騒ぎ立てた。

そしてガッ！！ という破砕音と共に、二人の正面から少しだけ離れた位置にある城壁が砕け飛ぶ。内に瓦礫を飛ばし、壁を破ったそれが、土煙を立てて正面へ走る。

彼は横を通り過ぎようとする魔物へ刃を向け、その刀身から炎を放つ。橙の炎は魔物の肌を舐めまわすように焦がす。

魔物は突然の炎に向きを変え、大きく円を描いて発火源のヴァインへ向かう。

ヒューと口笛鳴らすヴァイン。

「どこぞのバカどもとは違うな」

突進を横へ跳び退ることで回避。余勢で通り過ぎる魔物へと、炎の追撃を見舞う。

「燃え盛れ」

赤い炎を繰り、過ぎ去った魔物の足を狙い、燃やす。ブオオオオオオという悲鳴が空に響いた。

壁を破ってきた魔物は、サイに角を増やしたような形の、見るからに鈍重そうな生物だ。

「見とれてんじゃねえ！」

ヴァインの叫びに我に返った氷水は、空いた壁から何匹もサイの

ような魔物が出てくるのを見た。

「私も……！」

剣を二刀に変え、低く構える。

正面からは絶対無理。先頭を避け、右の一頭を横から狙う。イメージは、先のヴァインの動きだ。寸前で避け、勢いそのままのサイもどきを横合いから切り裂く。

一、二の……三ッ！

横へ跳び、サイの群れを躲す。しかし転がるように避けたため、立ちあがった時にはもうサイたちは過ぎ去っている。

その群れが向かうのは、仲間を燃やしたヴァイン。

「オイオイ神子様。全部こっちつてのは、さすがに無」

一頭目を躲し、

「理だっつー」

二頭目から逃げるように飛ぶ。

「の！」

三頭目は彼の目の前。避けても左右には別のサイが控えている。

「ヴァイン！」

しかしヴァインはサイの突進を、角の先端に飛び乗ることで回避した。斜め下から持ち上げられる角の一本に足をかけ、勢いを殺さないようサイの背中を転がる。サイが走ることで、彼はそのまま背中から投げ出される。

「ふんっ」

落ちる寸前、炎がサイの体を覆った。サイは燃えながらもなおも走り、群れ全体で楕円を描く。再び二人 いや、ヴァインへと突進をかますのだろう。

サイから落ちたヴァインは、数回転がって勢いを殺す。

「つぶねーな。俺じゃなきゃ死んでたぜ」

確かにそんな芸当、普通の人ではできないけどっ！

サイに目をやれば、やはりヴァインへと向かっている。

「ど、どうするのっ！ あんたの炎でもまだ倒せてないじゃない！」

一匹目も既に動きを再開。群れに加わり、炎を纏ったサイがその群れの存在を誇張する。

「くくっ！ どうしようかなあ。神子サマがもつと頼りになるなら困らなくても済むのになあ！」

いつでも皮肉を忘れないヴァインに、呆れるべきか、状況を恐れるべきか無駄なことで悩まされ

「もつと頼りになる奴が、来たようだぜ」

パリンという割れるような音と共に、ヴァインの目の前に来たサイたちが、次々に横転、あるいはヴァインから逸れていく。

「二人とも、時間を稼いでくれて感謝する。この場は私が受け持つ」

街の方から現れたのは、魔道騎士団長アリル。

サイの足元を見れば、地面が凍っている。彼女がサイの進行方向を凍らせ、スリップを促したのだろう。駆けまわるサイの足に霜が付着していることから、別の細工もしているのだろうか。

「それじゃ団長。あの一匹は神子サマにやらせてやれ。模擬訓練だけじゃ飽きたみたいだしな。ああ、あっちのカラスどもは俺がやる。安心してくれ」

カラス？ と氷水が城壁方向に目を向けると、体長一メートル以上もある黒い鳥が、三羽ほど舞っていた。クチバシは長く、翼も大きい。

「あんなのカラス、いてたまるかっ！」

「雑魚は所詮雑魚だよ」

ヴァインがパンと手を叩き、その手を広げる。手の中には赤い炎が踊っていた。

「それじゃ、開戦だ。てめえはちゃんと、あいつを殺れよ」

体を燃やしながら走るサイを示され、氷水は配慮はされているんだなと感じた。

### 三章 3

地を駆ける驀進する犀を見ながら、ア ril は意識をヴァインへ向ける。  
リヴァーヴァレイトライ

彼女が探るのは気配と魔力。とは言うが、両方とも感じ方が違うだけで同じものだ。気配が五感の延長線上の感覚で、「雰囲気」と「強弱」が知れるのならば、魔力は第六感の延長線上で、「質」と「量」が知れる。

あくまで気配や魔力という感覚論。言葉にしても分かりづらいし、感じ方も解釈も変わる。

彼女に言わせれば、ヴァインのそれは強くはなく穏やかで、だが濃くも多い。言うなれば老衰まったただ中の賢者だ。若さに反して落ち着きすぎている。また、内包する力は底知れない。ア ril の魔力を優に超えているだろう。戦いたくはない相手だ。

また、一方で酷く弱いとも思う。戦う時に発される気配が拙い。戦うことを忌避しているのではなく、本気を出していないかのような細さだ。しかしそれも、また違うようですらある。

ア ril はヴァインを意識から外し、氷水へと向ける。

氷水はヴァインとは反対で、弱く荒々しく、少なくて……濃い。ただ、濃いというよりはその身に受けたる神の御加護でばかされているような印象だ。加護という魔力を超越した力が、彼女の魔力と混ざって掴みにくいのかもしれない。

それを踏まえて言えば、子供が勝てない何かに立ち向かっているような そんな印象。意地を張っているようでもある。

と、ア ril に突進する影。考えを及ぼすまでもなく、リヴァーヴァレイトだ。

ア ril はそらんでいた氷の魔法を、彼女を中心に地面へ放つ。凍りついた地面は深く踏み締めなければ滑ってしまう。その重量を速度にするリヴァーヴァレイトでは、その速さを活かせないことは自

明。

さらに言うならば、犀という種は暑さに強く、寒さに弱い。ヴァインの炎で処理できなかった理由がそれだ。毛のない厚い皮膚を焼き切れなければ、ダメージは通らない。同様の理由で生半な火力の魔法のほとんどは通じない。しかしその例外が氷。冷たさがダメージにならずとも、その動きを遅くする。

滑って僅かに逸れる犀の動きに合わせ、紙一重で躲す。そしてその分厚い皮膚ではなく、薄い目元へ剣を差し出し柄頭を押さえる。後はその勢いのまま犀が刺さって脳を抉る。

問題は刺さる瞬間に体を支えなければいけないことと、その後犀の勢いを受け止めなければいけないことだ。だがそれも、彼女の技で補える。

氷使いであるア ril のブーツは、親指の付け根からスパイクが伸びている。小さい物だが、地面の薄い氷を破碎するには十分で、埋まりさえすれば踏ん張れる。

そうして刺せば、後は犀の勢いを止めるだけだが、彼女は踏ん張らないことでそれをなす。スパイクを上げ、勢いのままに氷上を滑る。死んだ犀の余勢はすぐに止まり、ア ril は姿勢を崩さず、手を傷めずに一体を狩り終える。

残りのリヴァーヴァレイトから、街へ向かうものの足へ氷結の魔法を放つ。詠唱は先の攻防の間に完成している。

足の一本が表面だけだが凍りつく。地面の氷と相俟って踏ん張ることができない。あえなく犀は横転し、動きを止める。

ア ril は手元の犀から剣を捻って抜き、氷水へと走る。ア ril の担当する一匹が、氷水へと向かっていた。

「こっちはいいから、お前は街に向かう奴から片しな」

氷水の襟首を引っ掴み、ヴァインがア ril へ言った。リヴァーヴァレイトを氷水を抱えたまま躲すが、後ろから黒の鳥が迫る。彼はそれにも気付いていたのか、慌てず刀を向けて炎を放ち、翼を焼く。レイヴンの姿勢が逸れたところで、硬い嘴を避けて根元に斬り



かかる。ここにきて神の武器の面目躍如。バターを裂くような滑らかさで、嘴と顔とを切断。レイヴンを落とす。

見ればレイヴンの死骸は五匹目。数が増えていたようだ。それでもヴァインに傷はない。

これなら大丈夫か。

ア ril はそちらに向かうのを止め、市街へ走るリヴァーヴァレイトへ剣を向けた。

苦もなくリヴァーヴァレイトを駆除したア ril は、ヴァインと氷水の許へ行く。氷水はまだ戦っており、ヴァインは横で助言しているようだ。

「おら、避けるならもつとギリギリで」

リヴァーヴァレイトという犀の脅威は、集団爆走による回避の難しさとその一撃の威力。残るが一匹で、守るものがないならば怖くはない。遠目から気配を追った限り、リヴァーヴァレイトが街へ抜けようとする度にヴァインが気を引き、戻っていたようだ。

「氷水では決め手にかけるのではないのか？」

ア ril は街の側で構えるヴァインの隣へ。ヴァインは「かもな」と頷き、

「だが実戦にや違いねえ。勝てなくても、経験積ますには十分だろう」

「十分……だが、実戦だぞ？ 万が一ということもあり得る」

「なら、さつさと止めに行けばいいだろ？」

突き放すように言うが、口は笑みを浮かべていた。

「やらないのは、あいつに少しでも経験を積ませたいから。それもできる限りリスクの少ない形で。この状況は、その意味では理想通り。それでも、止めさせたいのはためえが過保護だから。違うか？」

ア ril は苦笑い。

「ま、安心しろよ、さすがに死なせはしない。ただあんなのに負け

るような神子だったら、剣を奪って、神子の刻印を焼くだけだ」

「刻印を、焼く？」

ヴァインは静かに首肯する。その言葉の意味を十まで説明はしてくれない。

ア ril は考える。剣と刻印の喪失。それが何をもたらすか。

「神子の証の剥奪……か？ いやでも、それで何が……」

それで神子は死ぬわけじゃない。天使たるヴァインは勝たず、また、悪魔たる第三の英雄も残る。神子の証明手段を奪ったところで何が……

神子の、証明……？

ハツと面を上げるア ril 。

「あいつが戦わなくて済むのか？」

「あいつが戦わされなくて済む、だ。あいつは弱い。神子の能力がなければ いや、あつてもそこらのモンスターに勝てない程に。

それでも何を勘違いしたか、神子の役割を戦うことだと思ってる。周りがそうさせてんだ。戦わせようとしてんだ。だから今のあいつの場所を奪っちまえば、神子に期待されてるのが戦いなんかじゃないってことにも気付くだらうよ」

表情を変えず言うヴァインに、何故、と問いかけていた。

「何故あなたがヒミナのことにもそこまで……？」

ヴァインが初めて、苦虫を噛み潰したような顔を見せた。

「……………俺に、」

ヴァインは唇を動かし、その先を紡ぐ。しかし意図したものか、それとも彼の心が拒否したのか、言葉は放たれない。それでもア ril は唇の動きで読みとった。

似ているから……？

顔を背けたヴァインはいつもの表情に戻る。一度リヴァーヴァレイトと氷水を見ると、刀を構えて北を見据えた。

「それじゃあ神子サマも頑張ったようだし、そろそろあのデカブツも殺してやろうかね」

たった一匹のリヴァーヴァレイトに、汗だくで向かっている氷水。リヴァーヴァレイトの方は、目を凝らせば短剣の傷がそこかしこにできていた。しかし致命傷には程遠い。

それが今の氷水の実力なのだろう。

ヴァインは刀を肩に担ぎ、悠然と歩み寄る。どこか氷水に倒れて欲しいような、そんな風を思わせる動きだった。

リヴァーヴァレイトが氷水に突進。それを躲す氷水。リヴァーヴァレイトは目の前にいたヴァインに駆ける。

ヴァインは両手に刀を構え、リヴァーヴァレイトの角へと斬りかかった。

キィインと、金属同士がぶつかるような音がする。間もなく、キキキツという金属の擦れ合う、嫌な音が響いた。刀の凹凸が角で音を奏でたのだろう。音がすぐに止まったことから、がっちり嵌まったのが窺えた。

ヴァインが砂埃を上げて後ろに滑るが、彼の表情は余裕に満ちている。

刀が炎を纏った。

じわりじわりと炎が濃くなり、熱気が彼の周囲をぼかす。

ヴァインは数十メートルリヴァーヴァレイトに押され続けたが、姿勢は打ち合った時と変わらない。ア ril は昔、ヴァインと同じように、リヴァーヴァレイトと同種の魔物に打ち合った人間を見たことがある。それなりに力に自信があったようだが、ヴァインのように姿勢が保てず、下敷きにされて重傷を負っていた。ヴァインとの差は武器なのか、技術なのか。

炎がリヴァーヴァレイトの角を溶かした。

リヴァーヴァレイトもヴァインも、込めていた力が互いへ流れる。しかしこれを仕掛けたのはヴァインだ。対策を取っていないわけではない。

踏ん張る姿勢だった右足で地面を蹴り、崩れるような姿勢でリヴァーヴァレイトのすぐ横を飛んだ。それでも刀を握る手は緩めない。

ヴァインの刃は、リヴァーヴァレイトの体を真横に焼き切っていた。

「こんなもんか」

高温に熱せられた刀を錆びた剣へと戻し、ヴァインは「こうやるんだよ、神子サマ」と、皮肉るようにタトウーを見せる。

「それじゃ、団長サン。神子サマに魔道騎士団の警備シフトをちゃんと教えてやれよ」

ア ril はその言葉に、得心がいったと頷いた。

魔物襲撃かでの魔道騎士団の割り当ては市街の巡回。街に入り込む魔物の駆逐が主で、防壁のすぐ内側を回るのがセオリーだった。

氷水とヴァインが魔道騎士団の団長と出会ったのは、偶然ではなかったのだ。

氷水がそうですと、汗を乱暴に服で拭いながら、ア ril へ訊く。  
ヴァインの姿は消えていた。

### 三章 4

何か嫌な予感があった訳じゃない。

ただキリがよかったから動いただけ。

だから今回ののはただの運。運が、良かっただけ

ヴァインは目の前の民家に入っていく男の姿を認め、自分の行動を振り返る。

サイども。相性は悪かった。だが、それ以上にできていたこともあったはずだ。

最初の接敵時、あのサイどもがこっちを狙ってこなければ街がやられてた。仲間が燃やされて逆上したんだろうが、んなのは結果論だ。次からはア ril のように目を狙って仕留める。

足音を立てないよう、民家へ近づく。その間も今日の反省は続く。カラスども。こちらは上々。ただし刀の性能に頼りすぎか。

もう少し応用の利く仕留め方を検証すべき。

ヴァインも先の男と同じよう、民家の中へと入っていく。音は必要最小限。中の人間に気付かれないように。

室内を確認。誰もいないことを確認すると、上階へと続く階段へ進む。

階段を上がりきる直前、上方から剣が振り下ろされた。

ヴァインは予想していたのか、それを朽ちたままの剣で受け流す。やはりと言っべきか、朽ちた様相で在りながら、剣は折れることがない。

彼は自身の力で手許に炎を作る。月明かり差し込まない屋内の一角が、この時だけ炎に照らされた。

「……貴様か」

剣を振り下ろした男が、舌打ちするように言って剣を引いた。対してヴァインは肩を竦める。

「人に剣を向けといてそれはないんじゃないかな、シャルフクン」

ヴァインは炎を消し、剣を引いたシャルフを追って窓の一つへ付く。そして窓から窺うように、少し離れた位置にある小さな民家を監視する。

「お前が出てから何分くらいだ？」

「四分」

ならそろそろかと、脈絡も確信もなくヴァインは思う。

そしてそれが当たる。

闇を駆ける人の姿。魔物の襲撃で出歩くものがない今この時に、だ。

「魔法使いは入り用かい？」

「いらん。貴様はそこで見ている」

ヴァインの言葉を切って捨てるシャルフ。剣を抜き、いつでも飛びだせる状態だった。

闇を走る影が、民家へと到達。こちら側からは見えないが、扉から侵入するつもりだろう。あの家は小さすぎる上に窓もない。侵入経路は入り口しかないからだ。

「そろそろいなくて大丈夫か？」

「大丈夫だ。手は打ってある。今は他のやつらをおびき出すのが先決だ」

シャルフが目を閉じ、集中する。ヴァインはシャルフの周りに、魔力が蠢くのを感じた。しかし彼の知らない感覚。彼の使う炎の魔法でも、この世界で使われる魔術でもない。また別の力。この世界にはない、確立された魔の気配。

「捉えた」

シャルフが目を開き、壁の向こうを見据え、また別の方を見遣る。「二人か……。一人はお前に任せる」

「あいよ。だが、万全を期そうか」

ヴァインは右手を出し、剣を握るシャルフの右拳を掴んだ。

「神の力の解放だ」

シャルフの力を引き出したヴァインが、それをそのまま剣へと込

める。

そして護神の剣、コールブランドが再び姿を変える。

コールブランドが模すのはシャルフの力。内から溢れだす存在感。剛腕が振るうべき無骨な武器。

ヴァインの力を受けて生まれた変則的な姿とは違い、叩き斬るという機能を追求した、無骨な大剣が姿を現した。

「手にくるものがあるねえ。片手じゃ持ち上げられねーな」

幅五十センチ、長さ一メートル八十の大きすぎる大剣。彼はそれを両手で持ち上げ力を込める。

「どうするつもりだ」

「どうするも何も、お前の力で敵をぶちのめすだけだ」

ヴァインはニヤリ笑みを浮かべる。

「なるほど、神の力つてのはやはり嘘じゃないみたいだ。この力がどういうものなのか、求めれば答えが返ってくる」

従者、シャルフルーリエ。

カテコライズ

種類、法則 重力。

それは物を地面に縛るもの。

それは物を引き寄せるもの。

「英雄が力を解放すれば、僕もこの力が使えるんだったか？」

英雄を立て、僕の反逆を防ぐため であるルール。ヴァインは「分かるだろ？」とシャルフへ言う。

「どの敵が近い？」

「そこから出て左。すぐだ」

「わかった。そっちは俺がもらう。力試しといこうじゃないか」

大剣を担ぎあげ、窓枠に足をかけるヴァイン。すぐに彼は飛び降りた。

重力操作。引力低下。

剣の力 ひいては神の力を使い、自身へかかる重力を軽減。

受け身を取る必要もなく、すぐに駆けだした。

ヴァインの目の前、影に潜むようにする男を発見。剣を振りかぶ

ると、相手は慌てたように暗器に手を伸ばした。

「チツ、ハズレ」

小物だ、と彼は吐き捨てる。

彼は振り上げた大剣を降ろすことなく足を止め、その剣へと魔力を込めた。

さア、重力つてやつのを見せてもらおうか！

目標、正面の男。重力操作、引力増加。

突如男は体を支えられなくなり、手を膝について崩れ落ちるのを防ぐ。

「ふーん。相手が軽装すぎたか。完全には落とせてないな。この力もシンプルなようで奥が深い。いいねえ、俺好みだ」

膝から手を放そうとする男だが、彼を襲う重力がそうさせない。息をするのも苦しそうに、ゼエハアと喘いでいる。

「それじゃ、死ね」

重力生成、中心力場大剣刃先。

ぐぐぐと、振りかぶった大剣に、重しがついたように力が発生。

正面の男は、何がどうなっているのかわからないと、混乱の表情で大剣へ　ヴァインの前へと引きずられていた。

「こりゃ失敗だな。力は振り下ろしのポイントにだけ発生させるべきか」

大剣は、振り下ろしの速度と通常の重力を加え、男のすぐ横で急激に落下。地面を砕き、土を飛び散らせる。

ヴァインは生成した重力を止め、再度剣を振りかぶる。

男は増加した重力に体を押さえつけられ、ヴァインからの死の一撃を回避できない。顔には絶望的な色がにじみ出ている。

ヴァインは剣を振り下ろす。軌道が男を捉えると、重力力場を大剣に生成。重力の作用を受けて、大剣が地面へ一直線へと向かう。

彼は鈍い手応えを感じ、剣を元に戻した。足元には頭の潰れた男が転がっていた。



「……最近二人がよく来ていた理由はこれだったのですか」

ベッドの上に座る少女ミリルが、姿を現したシャルフとヴァインに、確信した口調で訊いた。

「さて、何のことやら」

「……」

一室しかない家には、不法侵入してきた男　恐らく間諜　一人とミリル、そしてシャルフとヴァイン。そして最後に一人。

「それにしても手を打ってあるってこいつのことかよ」

間諜を押さえているのは、ヒュネーの邸宅で見た気配のない男だった。

……とは言うものの、体つきと身長、そして印象が似ているだけ。顔は覆面で隠しているため、厳密にヴァインが見た者と同じとは限らない。

彼としてはこんな気配のないそっくりさんが二人もいてたまるかという気持ちなのだが。

気配のない男はシャルフへ顔を向ける。シャルフが頷くと、彼は間諜を引きずって外へと出て行った。戻ってはこないだろう。

ヴァインはやれやれと、椅子に座った。

「ミリル、お前の推察通りだ。後はもういいな？　俺はしばらく寝る」

椅子に腰かけると、前かがみになってヴァインは目を閉じた。

ここで見た間諜たちは、ミリルを狙ったものだ。理由は氷水に説明したとおり。神子の出入りする民家。一般人の住居。人質。これらが繋がる。

ヴァインが氷水に言った言葉は、嘘ではなかった。

その危惧はシャルフにもあった。だから二人はそういう輩が現れないよう、ア ril の仕事の中にこの家に入り浸り、間諜たちに見せつけた。

俺たちがいるから寄ってくるなという。

もし彼らのことを調べずに襲うバカな輩が現れば、それはヴァインあるいはシャルフが撃退すればいいだけの話だから。

そして今回の魔物の襲撃は、絶好の機会だった。魔物の襲撃下は、人の目に付きにくいため動きやすい。間諜が狙う可能性は高い。そこでいつも張り込んでいる二人がいなくなれば、それは当然チャンスと見る。非常事態故に実力者二人がいなくても不思議ではないからだ。

そこをシャルフとヴァインは狙った。シャルフは家に気配なき男を配置するよう、ヒュネーへと頼んだのだろう。そしてあえて直前まで家にいることで、退室した姿を間諜たちに見せつけた。

ヴァインは運がよければ、という程度でふらりとやってきたのだが。

こうして魔物襲撃の一幕が閉じた。

## 四章 深まる絆、別たれる繋がり

### 地学 大陸ウィール

この世界は、たった一つの大きな大陸でできている。それはそのままこの世界の名となり、それこそがウィールである。

ウィールの形は些か形容しがたい。平面的かつ簡単に表すならば、二つの台形が重なり合ってできた大陸の各所を、三角形をつけたり消したりすればできあがる。

もっとも特徴的な地形は、大陸中央を東西に走る大山脈だ。台形が重なり合った場所の繋ぎ目を隠すかのように、険しく大きい山々が続く。人の手を拒むように険しい自然が待ち構え、太古の魔物が跋扈する、世界有数の危険地帯だ。残りの危険地帯が海上であることを考えると、唯一と言ってもいい。

そんな山脈のちょうど真ん中 即ち大陸の中央。そこには北と南を結ぶ谷間があった。谷間は山中だと言うのに不自然なまでに穏やかで、そこに平原を作り上げている。左右の山脈から均等に距離を取れば、地平線の際に山脈が見渡せるくらい広い。

そしてその平原の主こそが、商業国家ミールハイトである。

国土は山脈に押しつぶされるかのように横が細く、反面大山脈の南北と同じ長さある縦は非常に長い。

大陸の中央という立地、また山脈の抜け道であるそこは『大陸の臍』と呼ばれ、ウィールにおいて最も重要な土地だ。南北間の交易はここを除けば海路しかなく、海の各所は渦潮が発生し、その近辺には必ずと言っていい程海獣の姿が見られるからだ。それら渦潮を越え、海獣の縄張りを避けて通れる人間は数えるほどしかない。

その土地柄を理解しているのか、ミールハイトは関所を設けず、自由な出入りが許可している。下手に規制を設けると、結託した国々により武力侵攻をさせてしまうためだ。そんな背景もあり、商業国としてしか生きられない国であった。しかしそれに足るだけの金

が、この国に落とされている。

大陸の臍と隣接する国は三国。

ミールルハイトの北端東側三割程度。そこは帝国ヴァル・ルー・ジエ。ミールルハイトとの国境は、広がる森林地帯。土地面積は大陸の臍の十数倍だが、大陸全体から言えば二%もなかった。東の大山脈ハガラジャと接し、形はほぼ正方形を描く。

北端西は、山脈から下る大河が北へと流れる。そこを跨いだ先は大陸最大の面積を誇るスイ・ラ・グネ。大河はそのままスイ・ラ・グネとヴァル・ルー・ジエの国境となっている。この国の面積の比較対象にミールルハイトを出せば、数百倍でも足りはしない。西の大山脈イミナヤに沿うようにできた大国で、縦はヴァル・ルー・ジエと同程度。横は大陸中央から海までという長大さ。大陸の半分の長さを誇り、大陸全面積の一割強を占める。

残った南には、サマサマーナという宗教国家が扇状に鎮座している。宗教対象は平等を掲げる女神そのもの。各地には女神像が掲げられ、護神を邪神と忌み嫌う。その過程において、護神の司る魔術を異端の法とし、国から排する動きが広まっていた。

以上に挙げた四国は、中央四大国家と呼ばれ、大陸最大の力を持つ国々である。魔物の多く棲む大山脈と大きく隣接する為、武力を持たざるを得なかったからだ。この傾向は大陸共通で、中央の大山脈に近づくほど軍事力が強い傾向があった。

中央諸国の次は北の漁業について……

## 四章 1

魔物たちの襲撃から一週間が経った。

民間の被害は少数。兵たちの被害も僅かと、魔物たちの規模にしては軽い被害と言えた。

それでも城は、魔物襲撃の事後処理に追われていた。

「南門を東に沿っていったところの穴の修理費用です。既に修繕は始まっていますので」

「えっ、魔物の死体が転がってる？ どこの区画だ」

「死傷者のリストはまだか！？」

ア ril が王城内で拾った声の数々。自身もまた似た話をする事になるのだろうか、彼女にしては珍しく憂鬱な思いに駆られた。

彼女は呼び出された場所の目前へと辿り着いた。そこは謁見の間。王が外部の者と相対する、王の威厳を高める場所である。部屋は赤い絨毯が扉から一直線に敷かれてあり、縦長の部屋をさらに細い縦長に割る。奥は幅の広い階段数段で高さを上げ、並ぶように王と王妃、そして王子の椅子が設えられる。普通は部屋の壁際には高価な調度品で格式高さを強調するのだが、この城の主の意向で調度品は最小限。最大の贅沢が、椅子の後ろ壁一杯のビロードの国旗なのだから頭が下がる。

通常、謁見の間は内部の者と看做される騎士団の長を呼び出す場ではない。そう考えると、儀礼的にも王を高めて配下を落ち着かせる必要のある緊急事態か、外部の者との同時謁見か。

思いを巡らすア ril だが、それは杞憂に終わる。

謁見の間の両脇に立つ兵からの目礼を受け、観音開きの扉をくぐった。赤い絨毯の上、奥の階段前で立っていたのは、紅の衣に身を包んだヴァインであった。

「よう」

王の御前でありながらも変わらない、ふてぶてしい様子。些か気

を緩めるア Ril だが、しかし一騎士団の長の責務ゆえか、流れるような動作で傳く。ヴァインにそんな気はないようで、立ったまま、座る王を見上げた。

「魔道騎士団長、面を上げよ」

王の言葉に顔を上げ、周囲を窺うア Ril。

ヴァインの他に兵の姿はなく、背後の扉はいつの間にか閉められていた。ヴァインとア Ril を除いた人間は王と一人のみ。その者は文官で、確か外交官の一人と頭の片隅から答えを出す。

「それで、魔道騎士団長とスザナフ家の用心棒一人呼びつけて何の用でしょうか？」

退屈そうな表情のまま、ヴァインは慇懃無礼に問いかけた。その態度に体を振るわせる外交官だが、王が何も言わないことから自らも怒りに染まる顔をそのままに黙りこくる。

場が落ち着くのと同時、王は丁寧な口調で二人へ語る。

「この度お二人を呼んだのは他でもありません、伝説の？英雄？としての話です」

王から滑り出た言葉に、ニヤリと笑うヴァインと疑問を浮かべるア Ril。

先に言葉を発したのはア Ril だ。

「失礼ですが、何故ヒミナではなく私に？」

ヴァインやシャルフが隠しているはずの事実がバレている。しかしそちらはそちらでなんとかするだろう。そんな無責任とも見える彼女の信頼。

ひとまず自身の疑問を優先する。

ヴァインもそれでいいようで、退屈そうな表情が一転、ギラついていた。

「今回の事態はいずれ噂が街に広がるでしょう。一般の兵や市民の声に流されぬことのないよう、上官として彼女を導いてください。これはまだ少女である彼女に判断させるには少し早い、重大な話です」

まだ少女　なるほど、言いて妙だとア ril は思う。

氷水はまだ、英雄どころか戦士でもない。さらに女性とも言えない、子供のようなものだ。前者は本人も自覚のあることだろうが、後者は無自覚だろう。

それは女性として経験があるとか、年齢がどうかの問題ではない。ただ少年を青年に、少女を女性に、子供を大人に成長させる何かが不足しているのだ。その多くは通過儀礼として区切りを設け、先の世界に馴染ませることで引き上げる。そんな形として有る。

氷水はまだ、儀礼も儀礼でない何かとも出会っていない。だから少女。

王の言葉に納得したが、肝心の話を聞いていない。隣を向くと、ヴァインは続けるというように、顎で前を指す。

「陛下、此度の話とは？」

ア ril の問いかけに王は頷き、外交官に先を任す。

「では陛下に変わりました、私目が」

区切りを置き、二人に傾聴の姿勢を促す。

「南方の宗教国サマサマーナからの急報にございます」

一々区切る外交官。王の前置きと言い、不穏な気配が二人の間に漂った。

「して、内容は？」

外交官も、勿体つけるために区切っているのではないだろう。言葉を選んでいる。

それが分かるからこそ、ア ril も彼が言葉を発しやすいよう促した。

「英雄の一人、？悪魔？の存在が確認されました」

目を見開くア ril 。英雄としての話だと言うから予想はしていたが、やはり言葉にされると心にくるものがある。

「で、報告だけに呼んだ訳じゃないだろう？　さつさと用件を言いな」

しかし隣はそうでもないようだ。この世界の人間でないが故危機

感を感じてないのではと思ったが、それは違つと理性が否定する。  
この世界の人間は悪魔という存在を過剰に意識してしまっているし、  
彼はそんなことも承知でそんな態度なのだろう。この城で語った彼の  
推論を忘れてはいない。

外交官のヴァインに対する評価が下がり続けている。それでも不  
躰な対応には慣れたか、硬い口調で言葉を返す。

「ヴァイン殿にはそちらの調査に向かつてもらいます。無論スザナ  
フ候へ用向きを伝えた上で、そちらで動かせるだけの兵を動員して  
もらつて構いません。」

ア ril 騎士団長には、神子様を含めた魔道騎士団でそちらの方と  
共に調査へ向かうか、神子様の本格的な教育に着手するか選んでも  
らいます」

「オイオイオイ、えらく急な話だな。それに神子サマには選択肢を  
与え、俺には働けと命令しやがる。何様のつもりだい？」

牙をむいたのはヴァイン。

「あなたは身分を偽り入国しているでしょう？ 城にも度々無断で  
出入りしているようですし、こちらも衛兵を呼ぶ準備はできていま  
すよ？」

外交官の言葉を聞いたヴァインは「ククツ」と笑い、引きさがる。  
彼なりの冗談のようだ。

「答えは今返すべきか？」

「お願いします。サマサマーナからの使者を待たせてあります」

「では引き受けさせてもらおう。……悪魔が相手だったな。魔道騎  
士団の半数を動かさせてもらうぞ」

「そちらの判断は御随意に」

話はまとまった。

「それでは諸君らの健闘を祈る」

王の言葉を聞くと、ヴァインが真つ先に扉へと向かう。

ア ril は再度王へと傳くと、「失礼します」と謁見の間を去る。

部屋を出てヴァインへ駆け寄ると、何を考えてる、と直接問うた。



「何をつてまあ、この世界　この世界の伝承についてだよ」

「英雄か……」

彼の推論が頭を過ぎる。『俺は？天使？としては異端なのではないか』

「三人目だ。奴の存在で何か答えが出せるだろう。俺と、あいつと、そして三人目の。願わくは悪魔が俺の智に役立つ存在でありますように」

彼はそうして掲げた握りこぶしを開く。中から炎が現れ、彼はそれを吹いて消した。

それがまるでおまじないのようで。

「フフ」

笑った。

ア ril はその似合わなさに、笑ってしまった。

「なんだ？」

本人は無自覚の行動だったようで、そのことが彼女の笑いに拍車をかける。

「フフ、ハハハ、ハハハハ……！」

「なんなんだよてめえ」

どうもこの二人は似た者みたいだな。

目の前の？少年？と、この街のどこかにいるであろう？少女？を思い浮かべてまた笑った。

## 四章 2

『悪魔討伐？』

『ああ。悪魔の仕業と思われる事件が隣国サマサマーナにて確認された。辺境の街々が徹底的に破壊されているそうだ。目撃者はゼロで、偶然通りがかった旅人が壊された街の跡を発見し、今に至ること。』

実際に悪魔の仕業なのか、また、まだサマサマーナに潜んでいるのかは謎だが、魔道騎士団を動かしての調査となる。上からは調査に専念し、悪魔と出会っても敵対してはならないと指示を受けている。悪魔と事を構えるには数力国の全軍が必要だからな。ここで間違っても神子を死なせる訳にはいかないんだ。だから、もしお前が悪魔と出会ったなら全力で逃げる』

そんなことを言ったのが十日前。出発したのが六日前。

今は魔道騎士団半数と、そしてシャルフとヴァインを連れて馬で南下。サマサマーナへの国境へとたどり着こうとしていた。

魔道騎士団は遊撃部隊という側面も持つゆえ、騎乗は必須スキルだ。神子氷水は、剣技と共に真っ先に覚えさせられている。

対する天使ヴァインは……

「ようやく野郎の背中から解放か。待ち詫びたぜ」

「まだその後も続くのが不満だな」

シャルフの馬の後ろに乗り、揺られているだけだった。

出発時に氷水が問いただしたところ、「初挑戦でなんでもできるほど万能じゃねえ」と答えが返ってきていた。

後でシャルフに訊いたところ、出発までの五日間で練習したところ、乗れはするが扱えないとの答えが返ってきた。要は落馬するほど軟じゃないが、馬を歩かせたり止まらせたりできずに馬を潰してしまうのだそうだ。

その後氷水がヴァインに茶々を入れ、大人気ないと一蹴されたこ

とを付け加えておこう。

そうこうして国境に作られた関所が見えてきた。関所は平地の真ん中に立てられ、そこから東西に城壁が伸びている。関所では通行許可証の確認と荷の検査を行ったあと通される。

彼らは今回の検査時間を利用し、体を休めてから南へと抜けるつもりだった。

しかし

「……なんだあいつら」

先頭を走るア ril と シャ ル フ、そしてその後ろに乗るヴァインがそれを発見した。

間近に見える関所。そこから逃げ出すように幾多の人々が現れた。見れば多くの者は何も持っておらず、馬で駆ける者もない。

遅れて発見した後続は、異常事態にすぐさま気付き、団長の指示を待つ。

「……行こう。馬のことは気にするな。？何か？を止めた後は大休止だ」

全員の乗る馬の速度が上がる。

「これはまずいな」

魔道騎士団を進ませたア ril は、手始めに氷水を含めた十人を、逃げてきた人間たちからの事情聴取に当てた。残りの四十数名とヴァイン、シャルフは先行させ、各自の判断で動くように指示してある。

ア ril と氷水他八名を残したのは言わば保険だ。今回の任務の第一目標は神子の生還。道中起こったいざこざに神子を巻き込み、死なせましたじゃ済まないのだ。氷水へのリスクは最低限に、だが危険を与えて成長を促す。ア ril に求められているのは運の絡む繊細な作業だった。

「早く助けにいかないと！」

氷水も逃げ出してきた人から話を聞き、関所の惨状を知ったようだ。

『今、関所は魔物に襲われている』

『詰めていた衛兵や商人の護衛なんかが立ち向かったが齒が立たない』

『怖くて逃げだした。大扉が開かないから荷や馬は連れだせなかった』

要約すればこんなところだ。

逃げ出してきた人たちの中に衛兵や雇われ護衛などは交じっていなかったため、魔物の種類や数、実際の強さは聞くことができなかった。しかし話を聞く限りかなりの数、獣型の魔物がいるようだ。神子へのリスクを考えるなら、ここで交戦すべきではなかった。

しかし肝心の氷水は助けに行く気満々。剣を出しそれを二刀短剣へと変化させていた。

「止めるのは無理、か」

「ア ril、行くよ！」

ア ril の呟きは聞こえず、氷水の声にかき消される。他の団員も氷水同様　いや、氷水に釣られるようにして関所を見た。

「五人は馬を見るために残れ。先行部隊の馬も回収するように。残りの四人は私に続け」

具体的に名前を上げるまでもなく、メンバーはそれぞれ動く。

「行くぞ」

ア ril を先頭に、氷水と三人が続く。

関所は対称な作りになっており、中央に馬車も通る大扉、左右に人の通る扉が設置されている。本来なら扉を見張る兵がいるのだが、緊急事態故に兵はおらず、そのため大扉を開くことができないのだ。氷水たちは横の扉が入り、油断なく剣を構える。

内部は天井が高く幅も奥行きもかなりある。馬車が二列に五台ずつ、計十台は収まる大きさだ。しかしその空間は崩れた荷や喉笛を掻っ切られて死んだ馬、魔獣、何人もの人間の死体が転がり、死

臭に溢れていた。

生存者はいない。戦える者は獣たちを追い払い南側へと出たのだろう。戦えない者たちは先ほど逃げてきた者が全てのようで、急所を喰らわれて死んでいるのが散見された。

「うつ……」

氷水がそれらを見て口を押さえ目を背けた。

「……そうか、ヒトの死体は一度も見ていなかったな」

氷水の初陣が魔道騎士団を上げてのヴァル・ルージュエ防衛線。次が先日 of 魔物の襲撃事件。共に死体と触れあうことはなく、それ以前は都市の中で訓練にいそしんでいたため立ちあう機会はなかった。氷水とて曾祖父や曾祖母、そして親友の死体を見ているが、老衰という穏やかな死と、車のプレスで上半身無傷の出血死。下半身は車に隠れて見えなかったし目もそむけた。結果肉抉れ、骨見える、そんな死を見ていない。

「ヒミナ、後ろの五人の許へ行け。残りは我々で行う」

すると氷水は、口許に当てた手を戻し、一度唾を呑みこみせり上がってくるそれを胃に戻す。一度深く息を吸い、

「行く。いつまでもこのままじゃられないから」

僅かに悪くなった顔色で、しかししっかりとア ril を見て言った。

「……分かった。無理はするな」

いずれは通らねばならぬ道だ。ア ril は警戒を怠らぬまま向かいの南の扉へと向かう。

その時。

「後ろッ！」

ア ril の声に、氷水以外の三人が瞬時に振り向く。

後方馬車の影から魔物が八匹現れた。いずれも犬型の魔獣で、牙や爪を光らせていた。

どこから現れた？

ア ril は常にあたりを警戒　気配や魔力を探っていた。馬車の影にいなかったことは確実だ。どこからか現れ、警戒の薄い後方か

ら現れたはず。

目に着いたのは、壁から伸びる階段。

しまったと思うがもう遅い。この魔獣たちは城壁の上の見張り台から侵入してきたのだろう。どうやって昇ったのかは謎だが、実際にここにいる以上そうとしか考えられない。

三人が獣たちの迎撃に当たり、行き場のない氷水がア ril ルの横へと下がる。魔道騎士団の基本隊形だ。前衛三、後衛二の布陣で相手を迎え撃つ。しかしこの場合は不適切。氷水は遠距離攻撃を持っていない。必然後方からの援護はア ril ルだけとなる。

「ヒミナは後方警戒。私が援護を行う」

ア ril ルが言葉にすることで、氷水が自身の役割を見つける。悪かった顔色は、目の前の敵 恐怖によって払拭されていた。

前衛三人が各々の武器で闘いながら魔術を唱える。ア ril ルも遅れて詠唱。

三人の魔術が完成。それぞれ炎弾、雷撃、風刃だ。波状攻撃を仕掛けてくる複数の魔獣たちに炸裂。一匹を燃やし、一匹を焦がし、一匹を切り裂いた。そしてそこにできた魔獣の攻撃の隙へ剣や槍を向けてまた別の魔獣に傷をつける。

そして再び魔獣の攻撃が始まると三人は守りながら詠唱開始。数撃受け止めた後、ア ril ルの魔術が完成。

「アイスウォール」

進む氷が地面を這って三人の合間に行く。氷は床を割るように生まれ直進。氷塊が獣たちを下から押し上げ、また動きを阻害し、前衛の攻撃の的にする。

これが魔道騎士団の戦術。前衛が時間稼ぎ、魔術で迎撃。そこで生まれた相手の隙について追撃し、後衛の魔術完成までの時間を稼ぐ。そしてそれによって生じた相手の隙をさらに追撃する。嵌められはかなりの人数を落とせる戦術だ。

しかしこれは対人戦には使いづらい。相手に優秀な指揮官がいれば、瞬く間に隙を埋められ攻撃の手がなくなる。また、こちらが魔

と武を修練しているのに対し、相手は武を専門にしている。前衛が防御に専念するとはいえ、破られる可能性もあるのだ。

だからこそ魔道騎士団は遊撃隊として運用されていて、またそれなりの成果しか挙げられていない。

「ワオオオオオオン！」

ア ril を除く四人が一齐に硬直する。

階段側から巨大な遠吠えが聞こえたのだ。同時、波状攻撃を崩され隙だらけだった魔獣たちが一齐に立て直す。

「何だっ！？」

さらに階段側から魔獣がドツと溢れだす。戦っている最中も数匹ずつ出てきて波状攻撃を成立させていたのだが、ここにきて突如その数を三十まで増やし、関所内を埋め尽くした。

「まずい、下がれッ！ 囲まれるぞ！」

三人は馬車と壁の間で横になり防波堤となっていた。魔獣に馬車を迂回して攻撃すると言う発想がないからだ。しかし今魔獣の数が急増し、馬車の反対側まで溢れていた。間もなく魔獣たちは横側から襲ってくるだろう。

ア ril は氷水を先に空いた扉へ向かわせる。南側は既に先行した魔道騎士団の面々と、元々関所に詰めていた兵士たちで攻勢に出ているだろうからこちらに何人が当てられるはずだから。

だが、扉を抜けた先で見たのは巨大な獣。全長十メートルはある巨大な狼。

「何……アレ……」

氷水の呟きが、五人の気持ちを物語っていた。国の魔物の文献を一通り漁ったことのあるア ril でさえ知らない魔獣だった。

その巨狼と相対しているのはヴァインとシャルフだ。ヴァインは二メートル近い見たこともない大剣で戦っていた。二人に致命傷はないようで、だが巨狼にダメージを与えてもいないようで、長期戦を否応なく予想させる。

二人と巨狼の周囲には魔獣も人間もおらず、そこから距離を取る

ように左右に分かれて戦っていた。魔獣たちの総数は多く見積もっても五十相当。こちらに送っていた魔道騎士団の人数が四十三で、見慣れない、衛兵や傭兵であろう人の姿が十数見えることから、残りは「あの巨狼さえなんとかなれば」という思いで戦っていただろう。

ここにきて、後ろから敵の増援が来るなど思ってもみなかったに違いない。

士気の低下は免れないが……

「後ろから魔物が来るぞ！ 数は三十！」

一瞬で戦況把握を済ませ、ア ril はそこにいる全員に呼び掛ける。ぎよつとしたように動きを止める衛兵をカバ―する魔道騎士団員の姿が見えた。

騎士団員はそれぞれ後衛が戦場を俯瞰し、後衛の指示に従って人をさらなる後方、ア ril の下へと集める。ここまでの動きは迅速だ。これができないようなら、それなりの戦果さえ挙げられていない。

一方ア ril たち五人は配置換えを行っていた。

関所から出るには中央の大扉か、両脇の扉しかない。だが大扉は耐久性が両脇のより高く、また中にあつた馬車に邪魔されるためにそう簡単には壊せない。となると魔獣が出てくるのは両脇の扉しかない。

ア ril は扉前で魔獣を押さえていた三人に逆へ向かえと指示を出す。逆側は彼女たちが誘導したわけではないので数が少なく、また扉も閉まったまま。突破までに時間がかかる。ならば戦力である自分はこちらにあてるべき。神子は自らの傍から離せない。そこまで考えての配置だった。

三人は一斉に扉から離れ、代わりにア ril と氷水がそこへ入った。前線からの応援がそれぞれの後衛として入るはずのため、前衛として行く。

攻撃を仕掛けてくる魔獣を素早い剣戟で行動不能に陥らせ、詠唱した魔術は氷水が相手する魔獣にぶつけて援護する。扉前で張って



いるため、敵は同時に二匹以上出てこれない。今は後衛が来るまでの防御に専念し、傷を負わないことを念頭に動く。

すぐさま背後に仲間の気配。足りない前衛の三人目がアリの隣に入り、獣たちを裂く速度が上がる。

三匹、四匹、五匹と獣を裂きながら、氷水へと届く攻撃を紡いだ氷の防壁で防いでいく。

捌き切れる。

頭を過ぎった瞬間、関所内の奥に四メートル近い大きさの 階  
段をぎりぎり下れるくらいの大きさを持つ 三つ首犬が見えた。  
ケルベロス

「逃げるッ！」

訓練された正魔道騎士団員は、すぐさまその場から左右に分かれる。団長が言うからには何かある。何かあるとすれば上からか扉の奥からか。なら扉の直線上はまずい。左右に逃げよう。彼らにとつて、ここまでの思考サイクルは当然だった。

ただ一人、見習いである氷水だけが動けず、アリの体当たりをくらって手前の魔物の攻撃と、遅れて放たれた炎を避けた。

炎は進路上にいた魔獣を燃やし、すぐに収まる。一拍遅れて魔獣たちが扉を抜け出てきた。出口を防いでいた五人が退いたことで、二匹ならず五匹、六匹と外まで侵入を許したのだ。

こうなつては基本隊形を破棄して、後ろへ逃さないよう戦うしかない。囲むように四人が動くが、唯一氷水が対応できない。

ワオオオン！

再び遠吠えが聞こえると、魔獣たちの動きが突如代わり、アリの方へ いや、アリの背後で立ち上がろうとする氷水の方へと殺到した。

「なんだこいつら……！」

突然の動きの変調、団員の呟きはアリの引き継がれる。

「知性があるのか……？」

五匹を一度に相手取るアリ。といつても同時にしかけられるのは三匹が精々。剣と腕と足で往なし、たまにある不意打ちを魔術で

防ぎ、一撃も受けずに捌ききる。

しかし攻撃に移れない。他の団員も同様で、囲いを破棄するわけにはいかないし、ア ril に攻撃できない獣が状況に応じてそちらに仕掛けなおす。しかしそれも一定以上は踏み込まず、守に徹している。魔術の援護も、ア ril に当てないよう足元に向かつてしか放てず、そうなる とア ril に喰ってかかる三匹を狙えない。

もし後ろに氷水がいなければ、躲したところで止めという手段が使えるのだが、相手が氷水を狙っている以上横に立たせるのは今以上に危険。一言下がれというのにも細心の注意を払った。

幸い時間を稼げば稼ぐほど、前線で戦っている人間に余裕が出る。そうすれば囲いを維持する必要もなく、遠慮なく戦える。

ア ril はこの状況を維持することを決めながら、かかってくる獣たちを払う。

だがそれも打ち碎かれる。

壊されな いと思っていた大扉。それは、冷静に考えれば分厚い木でできた板だ。

ゴオオオオオオオ！！

そんな音と共に、扉が炎に燃やされる。

現れたのはケルベロス。扉を全て焼くと同時に、魔獣が溢れだす。

「総員、円を組め！」

ア ril はそう叫ぶと同時に、動きが分からない氷水を攫い、この場の全員から等しい距離に投げた。

ア ril の叫びに一瞬の間を空け、騎士団員が一斉に持ち場を放棄して投げられた氷水の周囲。前方に巨狼、後方にケルベロスを迎える位置で二重円を組んだ。中心を神子、内が後衛、外が前衛の形。動きに付いていけなかった衛兵や傭兵が何人か魔獣の攻撃にあつて死んだが仕方ない。これは下策だ。敵に囲まれてしまった時という、非常事態にのみ使う最後の手段、背水の陣なのだから本来使つてはいけないもの。

こうして出来上がった円環は、同サイズの近接型の敵に対して無

類の防御を発揮する。

つまりこの場に於いて防げないのは炎を吐くケルベロスと、あまりに巨大な狼の二匹。

円の外に残されたのは、ア ril、ヴァイン、シャルフ。

「フフ、こんな状況久しぶりだ」

ア rilは冷や汗をかきながら不敵に笑った。円の外は無法地帯。

後ろと左右を魔獣に囲まれ、正面のケルベロスを相手取らなければならない。

孤立無援の状況。停滞は敗北と思え。

魔道騎士団を任される者の実力、甘く見るなよ！

## 四章 3

巨狼の横振りの一撃を特注の大剣で受け止める。

ズシャアアアと地面を滑りながらもダメージはない。完全に受け切った。

「テメエはいいよなあ。受け止める、なんて選択が取れて」

シャルフが横滑りする中、後方へ紙一重で跳んだヴァインがそんな言葉を口にする。

「今俺がこれを受け止めなければ、お前はそのままミンチになっていたのだが？」

左にシャルフ、右にヴァインがいた。巨狼の一撃は左から右への一振り。シャルフにヒットして幾分勢いが弱まったこと、その上でヴァインの回避がギリギリだったことを考えると、シャルフの言葉は紛れもない事実。

「ああ。だからこーやって感謝の意を表明してるんだろうがよオ！」  
ヴァインは手にある大剣に力を込め、重力を生成。叩き潰しの為に持ち上がった前脚を、地面に引き寄せることで地団太に変える。しかし長くは続かず、再び持ち上げられてしまう。

「さっさと逃げるよっ！」

ヴァインはそう言う間に巨狼から距離を取る。

しかしシャルフは大剣を下に構えた。

巨狼の前脚が振り下ろされる！

「余計な……お世話だっ！」

振り上げられた大剣は、振り下ろされる巨狼の足裏にぶつかる。

巨狼も魔獣の一種なのか、本来肉球であるそこは、金属同士をぶつけたような甲高い音を辺りに鳴らせて剣とぶつかり合う。大剣が挟りこむことはなく、押し掛かりと斬り上げによる力比べとなった。

巨狼の前脚から体重を受け、僅かに苦しげな表情を見せるシャルフ。しかしすぐにも潰れるような様子はなく、数分は持ちこたえそ

うだ。

これが必要だと思つたとぞつとするな。

対悪魔用にヒュネーに準備してもらつた、三メートル級の幅広肉厚な大剣だ。大人二人がかりで運んでもらつた常人では持てども振るうことはできない大剣だが、シャルフはそれを振り回すことを苦にしない。

大剣はその厚さ重さに足るだけの頑丈さを發揮し、巨狼の攻撃を受け止め続ける。腰に提げたの長剣ではこうはいかなかつただろう。

「足止め御苦労！」

下がつていたヴァインが一転、シャルフの頭上で力比べする前脚に飛び乗り、重力剣に自らの炎を纏わせ横に振り抜く。

ガアアグオオオオオオ！

大剣はその重量で肉を抉り、炎が剥き出しの血と肉を焼く。

反射的に上がる前足。シャルフは開放され、ヴァインは足の上で肉から剣を抜く。

痛みに怒りを覚えた巨狼が、その巨大な牙を足の上に立つ小さき者へと向けて進ませる。

喰われる　瞬時に察知したヴァインは、すぐさま飛び降り、迫る牙を回避。足での追撃はシャルフを壁にして逃げる。

先ほどからこのようなじゃれあいばかりだ。

こちらは体格差を前に攻めきれず、あちらは目標の不相応な力故に攻めきれない。

まともな有効打は今の初めて。

だがしかし、向こうもそれは学習しただろう。

相手は獣。本来の武器は長い爪と鋭い牙。

体格差を利用した圧殺攻撃など、獣の動きではないのだ。

それでも今まで使わなかつたのは、こちらが小さすぎた故。爪は急所を抉るためにあり、牙は喰らうためにある。小さい目標に対して爪を使うことはできない。また、その大きさ故に口の中は人一人どころか数人が丸呑みできる。それは圧倒的優位だが、脆い口内を

晒すのは危険だと結論付けたのだろう。

だから今まで使わなかった。

だが巨狼は、牙を見せた。獣の武器を用いた。

ここからはシャルフにとっても一撃が必死。だが同時に相手を倒すための選択肢が増えることでもあった。リスクとリターンが跳ね上がる。

口腔を晒す巨狼。顎は開かれ、斜め上方から牙が迫る

「う　おっ……！」

ヴァインは牽制のためか、体を炎に包みながら後ろに跳んでいく。巨狼はそちらへ首を伸ばし、喰らわんと足を進ませる。

しかしそれにはシャルフが動く。

獣へ横から近づき、その有り余る筋力で跳躍。ヴァインを喰らうために屈んだ巨狼の首の高さ半分まで飛び上がり、大上段に構えた大剣を振り下ろした。

大剣が皮を裂き、肉へ突き刺さる。だがやはりというべきか、この大剣もまた無骨な剣。斬ではなく打、だ。皮は破れども、その強靱な魔獣の肉を裂きはできない。先端が肉にうずまり、シャルフの動きは止められる　が、

「ハアッ！」

重力生成、ポイント、大剣先端。

与えられた神の力により、大剣は惑星の重力との相乗効果で下へ下へと引き寄せられる。

開放された僕の潜在能力は、僕自体も操作可能。シャルフの大剣は傷をつけた位置から下へ下へ、筋肉を歪ませ千切るように降りていく。これには巨狼もたまらず呻いた。

「はんっ！　それでもダメージは薄いだろうよ」

あくまで表面を削っているだけだ。痛みは強いが、倒すだけのダメージにはならない。

「分かっている」

まだこれは様子見。武器の、そして神の力の威力を知るための試

し切りなのだ。この程度で死んでもらっては困る。

シャルフは暴れる巨狼から大剣を引き抜き、地へ降り立つ。再び戦線を維持するよう、関所の門を遠く背にして魔獣と向かい合った時。

「総員、円を組め！」

周囲のざわつきは気にならなかったが、不思議とアリの言葉は耳に入ってきた。

足音やざわつく声、そして気配を追っていくと、今まで戦線を作っていた人間が二人の後方に集まっている。

「おい、後ろは今どうなっている！？」

シャルフは一步踏み出し、ヴァインの前に出る。獣の前に、背後を確認する気にはなれなかった。ヴァインはシャルフの意を汲み、一步下がって背後を確認する。

「げっ、俺たち置いて円を組みやがった！」

「すぐさまシャルフの隣へ並ぶヴァイン。」

「なんだ？ また何かあったのか？」

先程は増援だと言っていた。しかし魔獣が近づく気配はなく、二人は変わらず巨狼の相手をしていたためそちらがどうなっているのかも気にすることができなかったし必要もなかった。てっきり巨狼の攻撃に味方を巻き込まないよう、獣たちは左右に向かっているとばかり思っていたが。

「後ろの関所ぶち破って、火を吹く三つ首の犬を代表に十数匹。足止めに失敗して仕方なく隊形を変えたようだ。後ろから攻められりや俺たちも死ぬからな。団長サンの判断は正しいんじゃないの」

二人は会話しながらも油断なく前を見る。巨狼は二人の後ろにある円陣を見て、一步下がり、姿勢を前に倒した。

「だが、これは……」

「ああ、こいつを止めるのは俺たちの役目みたいだぜ」

巨狼がその足を前に駆けだした。

あの大きさを後ろの陣につっこめば被害は甚大。大きさは力だ。

防御魔術も前衛の盾も役に立たず、全軍総崩れとなるのは必定。

「重力操作、引力増加」

ヴァインが言葉に出す。それを受けてシャルフが合わせるように返す。

「目標、巨狼、大顎」

二人が大剣を駆けてくる巨狼の顎へと向ける。  
直後巨狼の顎が地に沈む。

二人分の神の力を受け、一気に首が下がった。だが巨狼も顎を削りながら、突進してくる。これがチャンスだと分かっているのだから。

「任せたぞ」

「ああ！」

シャルフは後ろをヴァインに任せ、前に出る。

サイズの違う魔物と戦う時のセオリーは、足止めと大規模魔術だ。数十、数百人で敵の動きを止め、その間に三十人以上からなる魔術小隊で大規模魔術をぶつけて倒す。

普通ならば。

しかし足止め役、魔術師、共に普通を越える。

神の力を宿す者を前に、巨獣一匹、下せぬ訳がない！

迫る巨狼。向かうシャルフを見て上顎を上げ、下顎を引く。歯を見せた、噛み砕かんとする姿勢。二人の重力操作は続いているが、それを受けてもとった攻めの姿勢だ。

シャルフは大剣を腰ために構え、振り抜く準備。巨狼へと走りながら、一振りのために力を溜める。

衝突はすぐに来た。

振り抜かれる剣にぶつかる下歯。土を抉りながら後ろに下がるシャルフ。巨狼の突進する勢いは僅かに弱まってきていた。

しかし上顎がシャルフに迫る！

シャルフは踏ん張りを止め、前から崩れるように口の中へ飛び込む。間一髪、牙で裂かれる前に中へと入る。



口腔では、落ちたシャルフを呑みこむため、その巨大な舌が踊っていた。入り込んだ異物を嚥下せんと、シャルフへ迫る舌。

これを、待っていた！

重力操作、解除。

重力増加、目標大剣。

その長い長い刃を下に向け、大剣へあらん限りの重力を込める。

大剣はその重みを何倍にも増し、刃先を舌に埋ませ地へ沈む。それを掴むシャルフも必死。大剣は舌を貫通し、下顎へ到達。それすら裂く感触を得てシャルフは思惑通りと唾液でべたついた頬をつり上げた。

数瞬で大剣は大地へ届き、巨狼の動きから、大剣とシャルフは下顎を切り裂きながら咽喉へと吸い寄せられていく。

反響する悲鳴。巨狼の動きは止まり、しかしその大音声は止むことなく彼に衝撃波をぶつける。

持てる力を最大に使っての足止め。しかしそれは成功したのだろうか？ 巨狼との力比べではかなり引きずられたように感じるし、舌と下顎を貫通するにもいくらかかかったような気もする。そこから巨狼が足を止めるまで、というと、後ろにいたヴァインは確実に巻き込まれているだろう。何もできずに終わったとは考えにくい。ギアアアオオオオオオオオン！！！！

反響する悲鳴をさらに上書きする、断末魔と呼ぶにふさわしい一声が鳴った。

直後頭上から、上顎を破って一振りの刃が。

「考えることは同じか」

振ってきた剣は異常な速度で落ち、見事に下顎に刺さる。だがシャルフと違うのが、その剣は炎を纏っていたことだ。炎が周囲を焼きながら落ち、肉を軟らかくする。ヴァインは自身の持つ力と神の剣の特性を有効に利用している。

それだけだと思ったのだが、落ちてきた剣が先ほどまで見ていた無骨で巨大な剣でないことに気がついた。

その剣は最初ヴァインが使っていた柳葉刀に近く、意匠の複雑さは変わっていない。しかし大きさと形状が違う。あれが一メートル弱だったのに対し、こちらは二メートルは下らず幅も広い。そして直刀。柄も長く、斬馬刀と呼ばれる刀であることが伺い知れる。大きさに合わせて拡大された穴は、もはやソードブレイカーの役割を果たせないほどに大きくなっていた。むしろその幅広さと合わせて考えると、穴空き包丁のような斬りやすくなるため、斬ったものからはがれやすくなるためのものと思われる。直刀が突に特化しているため、斬の特性を補っているのだろう。

「なんだこれは？」

頭上の穴に声をかける。くぐもった音で返事が来た。

「『剣は英雄、あるいは僕の力を受けて変化する』んだろう？ 二人の力を込めたらどうなるかって実験だ。その答えがこれだよ」

炎の力、柳葉刀を基本に、重力の力、大剣の大きさを受けて成ったのがそれ。

「纏わせた炎と重力は、一発でこいつの頭蓋をぶち割ってくれたぜ」  
せせら笑うヴァインの声が届く。

「ならさっさと次に行くぞ。三つ首犬がいるのだろう。さぼってないで貴様も働け」

閉じた巨狼の上顎を、牙を持って持ち上げる。さすがに片手では開けず、両手で思い切り引き上げる。巨狼の顎が開いたことで、僅かに風が入ってきた。唾液に塗れたシャルフはほんの少し顔をしかめる。

「いや、急がなくても大丈夫みたいですぜ」

巨狼の上からヴァインが飛び降りてきた。無言で中の剣を回収して来いと催促すると、「唾液臭え」と不満の声を上げる。しかし回収しない訳にもいかず、渋々口内へ入っていった。

そう言えばどうやって巨狼の上に登ったのだろうか。上まで飛び乗る筋力がヴァインにあるとは思えない。

「……みたいだな」

だがひとまず置いておき、  
歯を担いだ状態で、  
円陣のさらに奥を  
見て言った。

そこではアリルと氷水が、  
二人でケルベロスに挑む姿が見えた。

## 四章 4

凄い。

囲まれた円の中、一人背伸びしてア ril を見る氷水。

仲間たちの向こう、単身ア ril は周りの獣たちごとケルベロスと戦っていた。

剣は猛り、血飛沫が舞う。動きは全て紙一重。皮膚一枚削らせも、雄々しく屠る。

動きの一つ一つに無駄がない。繊細優雅に、豪快無法。

ヒトとして洗練された凄さ。

傷を負いながらも次を。

行きたい。あの、境地まで。

ア ril の凄烈さを見ると、自然と高なる心臓。

足は自然に前へ踏み出していた。

「私も外に出して」

前にいた仲間へそつと声をかけた。

背後からの声に、驚いたようだが、氷水からだど気付くと頷いた。  
「団長は、あなたから動くのを待っていました。……こんな土壇場で来るとは思っていなかったでしょうが」

苦笑いしながら、前衛と交代する。乱れた隊列を周囲がすぐさま埋めにかかる。下がった前衛が、氷水を見て急な異動の意味を理解した。

「次のアイツの後退で、突っ込んでください。援護します」

先ほど前衛に入った団員が、片手を背中当て、指を三本立てた。意味はすぐに分かった。

三、二、一、零。

獣の一匹に一打加えると、バックステップ。開いた隙間に氷水が走った。

目の前に獣。右の短剣を閃かせ、首を狙う。

拙い動きは獣に避けられ、伸ばした腕を牙にやられる。反射的に滑り落としそうになった短剣を、噛まれたままで掴み直す。

すぐにあんな風になれるなんて、思ってたない。

この痛みが大事なんだ。

失敗を恐れては、前に進まない。

私は、強くなる。

左の短剣をその獣の首を攫わんと下から狙う。獣はそれに気付いてか、噛む力を強めた。

魔獣の習性らしい。生半可な攻撃では死なないため、獲物からの反撃がくると力を強めて削り合いに持つていくという。

だがそれは、神の加護の最も強い神子には逆効果だった。

そこ！

刃に宿る力を放つ。対の短剣が同じ磁力を宿し、刃が反発で加速する。

短剣が決るように魔獣の首を攫う。氷水はその肉を裂く感触を覚え、ぐつと歯を噛みしめた。

殺すということ。

氷水は噛まれた箇所をさっと見る。牙の痕があつたが、それだけだった。

常人なら喰らわれていただろうが、魔に絶対の耐性がある神子ゆえただの獣に噛まれただけですんでいた。

氷水はその理解を得ると、短剣を強く強く握りしめ、アリの許へ走った。

「アリル！」

彼女へ駆け寄り、隣に並ぶ。アリルは装備している簡易鎧も、肌を見せる腕も顔も、いたるところが傷だらけで、でも致命的な傷は負っていない。足元には獣の屍。一人戦い続けたことがありありと分かる。

「……ヒミナ」

ア ril は氷水に気付いていたのか、後ろも見ずにそう呟いた。  
「アレの相手はさすがにお前には無理だ。お前を庇ってやれそうに  
もない。大人しく戻れ」

凜々しい顔のまま、彼女は有無を言わず氷水を突き飛ばした。  
ケルベロスがしかけてくる。

右の頭が炎を吐く。ア ril はそれを右に動いて避け、正眼に剣を  
構える。

ケルベロスの中央の頭がア ril へ牙を向けた。その首へ、面への  
フェイントから袈裟斬りに切り替える。左の頭がその剣の軌跡に牙  
を当てて止める。中央の頭から、炎が吐き出された。

ア ril の魔術が発動。氷柱を生成し、それが上から降り注ぐ。二  
ードルスパイク。これでケルベロスは退かなければならない  
見ていた氷水はそう思った。

違う。

ケルベロスは右の頭部を持ちあげ、頭上から降り注ぐ氷柱群を炎  
で溶かす。

即ち、中央の炎は止まらず

「ア ril ツ！」

悲鳴に近い声でア ril の名を呼ぶ。炎に包まれたア ril はどうな  
った？

数瞬後、炎の中から転がり出てくるア ril の姿。地面を転がり、  
燃え移った火を消す。

「大丈夫！？」

駆け寄る氷水だが、ア ril に手で制される。

「大丈夫だ。私にも魔術を使うものとしての耐性がある。この程度  
の炎、火傷にしかならんよ」

ア ril は膝立ちの状態でそう言ったが、ケルベロスは待ってくれ  
ない。迎撃に動くア ril を、今度は氷水が止めた。

「私がいく」

短剣を順手に構え、受けやすいよう前で構える。

「しかし」

「私はバックアップできないから」

ケルベロスのブレスから顔を庇って受ける。神子の耐性は、アリの比ではない。

「ア Ril が後衛、やってよね」

炎から突進してきたケルベロス。爪を伸ばし氷水を裂かんと横薙ぎに振るう。それへ短剣をぶつけ、攻撃を阻止。僅かに地面を滑るケルベロスはその勢いのまま頭を前に出し、氷水へと喰らい付いてきた。

「ッ！」

喰われる　　躲すのは無理だと判断し、次の瞬間やってくる衝撃に身構える。

しかしそこへア Ril からの援護。氷の障壁が、氷水の腕とケルベロスの頭部の間に現れる。障壁は薄く、ケルベロスの勢いでそのまま割れてしまうが、噛みつきという行動がその一瞬でズレる。氷水は手を引くと、ケルベロスは空を噛んだ。

「ありがとう！」

「……当たり前だ」

氷水の言葉に、後ろから心強い言葉が返ってくる。

氷水は彼女の役に立てたことを嬉しく思った。

ア Ril は自ら前へと立つ彼女を頼もしく思った。

それだけで、英雄の仲間と認められる。

芽吹く刻印。

剣握る拳。

女神の紋章。

ア Ril の首元へ生まれ、ほんの一部しか知らない、氷水の紋章の場所、首の裏と結ばれる。

氷水はその瞬間、頭を巡る魔術の波動を理解した。

体が作りかえられる感触に震えを返す。足りないものを補った感触。

刹那の快樂が体を通り過ぎ、氷水はそつと力を込めた。  
そして剣が進化する。

短剣は長剣へ。刃を薄氷に。薄く煌めく氷の刃。重さを感じさせない、対の長剣へと。

司るは、磁力と氷。

ケルベロスから距離を取り、二つの剣を正面で交差させるように構えた。

短剣二つならともかく、長剣となると簡単には振り回せない。それならば。

ケルベロスは、炎を撒き散らしながら彼女へと突進する。

氷水はそこに氷の力を込めた。

薄氷の刃は薄く鋭く、刀身を伸ばす。薄く薄く、光を透過させ魔獣に気付かれないまでに薄く。

そして、伸ばした刀身へ、磁の力を注げば

二つの刃が缺となってケルベロスの頭三つを切断した。



## 四章 5

交差した剣の先、三つの首が鋭利な刃物で切断されたように落ちる。

腕と連動するように切れたことから、なんらかの物理現象での切断か？ 考えられるのはあの二対の長剣のルーツ。つまり神子の僕になったのだろうアリの得意分野。氷。剣の延長上に伸ばした氷を、アリの能力で吸いつければ……

ヴァインは氷水の動きを観察し、その解析を行う。知的好奇心刺激するからという理由もあるが、もっとも重要なのはそれが対抗策となりうることだ。

誰への？

氷水でもあるし、他の誰かでもある。

いつどこで誰が敵になるかなど分からない。結局のところ精進する以外に他にないのだ。

自身の中で一定の解決を得ると、シャルフを伴って氷水、アリの許へと行く。

残っていた魔獣たちは散り散りに逃げた。その場に残るのは、死体と負傷者だけ。

「神子サマ、今日は随分と頑張るじゃないか」

皮肉るように頬を吊り上げ、座り込む氷水を見下ろす。

「え、へへへ……」

氷水はその皮肉を受けても、笑って彼を見上げた。彼女は彼の皮肉に気付いていないのか、気付いていてもその言葉に頷いているのか、ヴァインにも判断が付かなかった。ただ満足したように見上げている。これには彼も毒気を抜かれた。

「部隊の状態はどうだ？」

シャルフがざっと周りを見渡しアリルに訊いた。

「大丈夫だ。魔道騎士団員に死者はいない。傷も見たところヒミナ

が一番深いだろう」

魔獣たちの攻撃を掠りながらも捌き続けたアリル、連携によって魔獣の警戒を買い殆んど戦わなかった騎士団員。氷水の傷は噛みつかれた腕だけだが、騎士団員はそれすら受けていないということだ。常人が噛みつかれればそのまま肉を持っていかれるため、それも当然と言える。

魔道騎士団の者たちは個々に分かれて状況の捜査に動こうとしていた。

その、瞬間。

ッ！

「逃げ」

勝利の余韻残る、騒がしき元戦場。そこを駆け巡った、得体のしれない、ヴァインにしか感じられないような、害意の芯通る寒気。

ヴァインは叫びながら、体に炎を纏わせ横へ跳んだ。予想外の出来事が起こると、彼は体に炎を纏わせる。シャルフはそのことを知っていた。

突然のヴァインの動きにコンマ数秒の誤差でついていける可能性があったのは間近にいた三人だけで　ヴァインの叫びに反応でき、彼の動きに従えるのは一人だけ。

シャルフも同様に　いや、目の前にいたアリルの腕を取って跳ぼうとしていた。しかし彼女もまた、ヴァインと同時に敵の襲来に気付いていた。彼女はその分、シャルフより動きが早かった。

彼女は思い切り、目の前にいた少女を右手で押した。背後から迫る悪意のない害意、重く苦しく痛ましい必死の気配から、神子を氷水を逃すため。

反動で下がる体。シャルフは離れるその指先を掴み取って跳んだ。二人の体が宙を　。

そして、悲劇は一瞬だ。

それ。口。赤い。牙。白。ヒト。肉。血。服。青。

視界を埋め尽くす、赤き口腔。その奥にこの世の果て　ある意

味ではその通り　　のような黒き穴。牙にはヒトが、舌にはヒトが、  
闇にはヒトが。

ヒトが、ヒトが、ヒトが、ヒトが、ヒトが、ヒトが、ヒトが、ヒトが、ヒ  
トが、ヒトが、ヒトが。

喰われている。

その口が、シャルフの目の前で閉じられた。

カッ　　バキッ

歯のぶつかる軽い音と　　骨を砕く鈍い音。犬歯が擦れ合い、前  
歯が間をおかずに人を潰した。

彼の手が掴むのは、アリの腕。その腕から続くはずのアリの  
体はそこにある。潰された部分の皮が無残に垂れ、僅かな血を噴き  
出すのみ。断面から覗ける綺麗に折れた骨が、その圧力を物語って  
いた。

「あ、あ、あああああ……」

シャルフの目の前で、彼が最も大事にしていた者が喰われた。

アリスを喰らった獣は、先の巨狼よりさらに大きい。体長は三十  
メートルを超し、体を覆う毛は黄金に輝いている。地につける四足  
は太くしなやか。狙った獲物を逃さない。それは百獣の王　　ライ  
オン。

「オオオオオオオオオオ！」

獅子の咆哮。

「い、い、い、嫌あああああああああ！」

叫ぶヒミナ。

「ああああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアア！」

吼えるシャルフ。

なんなんだよ、コイツは……！

彼らの叫びを前に、ヴァインは一人彼らを視ていた。冷や汗が頭  
の天辺から顎まで一瞬で流れ落ちる。その滴は一粒でなく、ぽたぽ  
たと彼の焦りを表わすように流れ落ちる。

なんだこのケモノは。いつ現れた？ どうやって？ 生き残り  
りは？ 三人（俺たち）以外全滅？

ヴァインの目の前で、シャルフは大剣を構えた。顔には怒りと憎  
しみを始めとする敵意、殺意に分類される感情全てに悲哀を混ぜた、  
ぐちゃぐちゃの修羅の顔が映っていた。

待て！

ヴァインは声を発したつもりだが、喉が委縮して声を発さない。  
自身も気づかないうちに獣の存在に、逃れられない恐怖を感じてい  
た。

「うおおあああああ！！」

獣の足へと跳ぶシャルフ。頭はすぐ上にあるが届かない。そして  
頭から前脚までも数メートルの距離がある。シャルフの超常の筋  
力がその距離を一瞬で飛び越える。振り下ろしに入った剣は、前足  
を叩き折らんと斜めに下ろされていた。

入る そんな予感とも必然とも思える動き。目で追いきれない。  
獣は見えていない。動かない。入らなければおかしい距離。

獣が姿を変えた。

その大質量を一点に小さく集めて、粘土を捏ね繰り回すように形  
作る。

男のようで 女のようで 若いようで 老いてるようで 強  
そうで 弱そうで。

なん、だと……！

「刃を止めてはもらえませんか？」

獣が 獣だった者が立っていたのは、シャルフが斬りかかった  
足元に立っていた。

獣の変化を見届けたシャルフは、空中にある己の体を無理に捻り、  
刃を紙一重、肌を擦るような勢いで地面へと突き立てた。

シャルフは決して、その者の言葉に従った訳ではない。己の理性が、  
それを斬ることを否定した。

なぜならそいつが、女の姿をしていたから。

それでありながら女に見えず、だからといって男に見えるわけでもない。

そんな性別年齢不詳、実力未知数の、女の姿をしたよくわからない何かに。

矛盾している。

分かっているながらも、その直感が間違っているとも思えないヴァイン。

そして シャルフはそれ以上に混乱した。

「ア……リ……ル………？」

その獣は、獣だった何かは、今、明確に、魔道騎士団長ア Rilル「クウェートの形をしていた。服も生前着ていたものと同じもの。唯一違うのは右腕、喰らい損ねた部分。別の兵士が着用していた皮のグローブをそこに、魔道騎士団の青いコートを背中につけ、ア Rilルが浮かべない薄ら寒い笑みを浮かべていた。

そんな明確な姿を取っているながらも、ヴァインにとってはそれがヒトではない何かにしか見えず、女という皮を被った何かという表現しかできない。笑みを取ってもそうだし、何より目では捉えられない雰囲気は圧倒的にヒトであることを否定する。

「攻撃中止、感謝しよう」

それはア Rilルの声で、だが決してそうではない口調で、仕草で。そんな言葉をかけた。

「オイ……。貴様は一体、？何？だ？」

震えるヴァインは問いかけた。ヴァインの震える心とは別に、言葉は強くこの場に響く。

彼の問いは、シンプルでありながら意味深だった。誰とも聞かず、名を訊くわけでもなく。

本質を、問うた。

「何がいい？ 主に呼ばれる呼び名は四つ。魔神、獣神、魔獣、魔王。中には気取ったように『宵闇の主』、『月夜の新月』、『災厄より最悪なる罪悪』なんて言葉で呼ぶ者もいた。君はなんて呼ぶ？

私をなんといい表す？」

それはアリの体でそう言った。

「……【魔神】、だな」

圧倒的存在感。ヒトではない何か。ヒトを越えたる何か。人はヒト<sup>あら</sup>非ざる者をなんと呼ぶ？ ヒトはそれを、神と呼ぶ。

魔の神。

「では私はこの世界では【魔神】と名乗ろう」

顔には笑みを湛え、魔神は頷いた。

この『世界』では……？

考えを纏める前に、今は間を開けないことが重要だと感じたヴァインは、続けざまに問いかけた。

「お前は这个世界で便宜上『悪魔』と呼ばれる、死神の使徒なのか？」

「ああその通り。私が今百年戦争で『悪魔』の役割を為す『魔神』。従えるは『獣』。以後お見知りおきを。炎使い、『天使』ヴァイン  
「ハイズルト、磁力使い、『神子』鏡氷水」  
名乗ってもいない名を当てられ、自身の力を挙げられる。

調査はばっちりつてか……

彼がそう考えた時、

「いいえ、違いますよ」

「！？」

心が読まれ      ！？

「ええ」

魔神のその言葉に、彼は深く考えることを放棄した。腹芸したところでバレるんじゃない。ただ自分の思うまま、好奇心の刺激するままに。

「何故読める？」

「そういう力ですのぞ」

「獣の力か？」

「この世界に来る前に得た力です」

「前の世界はどんなところだ？」

「『前』の世界は平和でしたよ。私の所為で台無しですが。ただこの世界に呼ばれたお陰で、絶滅させずに済みました」

「その言い口だと、まだ前があるようだが？」

「はい、ありますよ。私の持つ力には、世界を渡るというものもあります」

「他にどんな力を持っている？」

「あらゆる力を持っています。数えきれないほどの力を。始め私にあった力は、『喰った者の力を得る力』だけでした。私は私の力に従い、あらゆる者を食べ、こうして今も生きています」

「お前が今その姿の理由は？」

「食べた者の力とは、何も戦いに関するものだけではありません。エネルギーも力ですし、肉体とて力です。そしてまた、感情さえも私の体の中に、アリルという彼女自身も保存されているのです。そして彼女はあなた方を見て、最も強く『ここから出たい』と願ったのです。そうすると自然と私の体は、その者の姿に近づくんですよ。出ようとする彼女を、私の力が抑えつけているのかもしれないね。さすがにそこまでは分かりません。あなた方が何故自分が生きているのか、分からないのと同じように」

魔神の言葉を聞き終え、ヴァインは剣を投げ捨てた。

「喰いたきゃ喰いな。俺はもう満足だ。今お前の中で死ぬるなら、楽でよさそうだ」

地面に胡坐を組んで座り込む。眼は閉じ、腕を組んで静かに待つ。  
「……どうした？ 俺は逃げねえぞ。俺を喰えば炎術師としての力と、『天使』としての力が手に入る。その剣も扱えるようになるだろう。そうすればお前はもっと強く」

「興味がないですね」

「あ？」

「強さなど、興味がありません。私は既にあらゆる世界上最強の存在と定義されています。何を足そうと、無限大が増えることはない

のです。それに――

ヴァインは瞼を開き、魔神を見た。魔神は手を前に差し出し、そこから……炎を――

「昔々、あるところに、人と魔物との大戦争を行った世界がありました」

世界の魔物は人を駆逐し、人もまた魔物を駆逐する。終わりなき負の連鎖。互いが互いを捕食し合う終わりなき螺旋。

「ある日それを終わらせたのは、一匹の魔物だった……か」

その魔物は世界を喰らい、全てを無に帰した。その災いを運よく逃れたのが我らが祖先。

「ただの与太話じゃなかったか。てことはうちの先祖も喰ったことがあるんだろ？」

「ご想像にお任せしますよ。こういう力は、世界を巡れば見つかりますから」

炎を体に巻きつける。生きているかのように踊る炎は、とぐろを巻く龍のようで――

「……くそっ」

ヴァインは悪態をついた。彼が思う勝率はゼロ。

ゼロの確率はない。それが俺の持論だったはずんだけどな――

途方に暮れるヴァインの前に、魔神は仄かに笑った。

「久しぶりですよ、私を知ってここまで心穏やかな人間は」

魔神はアリの顔で　いや、人として無個性を極めたような平凡な顔でそんな言葉を発した。

なんで、顔が……

思い出すのは先ほどの会話。

『あなた方を見て、最も強く「ここから出たい」と願った』  
あなた方。

そうではなく、特定の誰かを見て思ったのでは？



今無個性なのは、出たいと願う人が同列だからなのでは？

後ろを振り返るヴァイン。崩れ落ちる氷水は未だ変わらず。始め魔神の目の前にいたシャルフは一体？

ヴァインは視線を魔神へ戻す。シャルフはいない。

「フフ」

薄く笑う魔神。人間の個性を平均し続けたようなその顔は、笑っていてもマネキンのような無機質さを取り除けはしない。

しかしその顔に影がかかる。雲か？ 見上げたヴァインは、驚愕に見舞われた。

「シャルフ」

今まで一度も魔術を使う素振りを見せなかった男が、宙に大剣を構えて浮いていた。

それがおかしいことに、ヴァインはすぐさま気付く。

この世界の魔術体系では、『浮遊』などという継続的現象を起こすことはできない。

シャルフは能面のように表情を消していた。だがそれ故、彼のキラキラした眼は他者の気を惹く。

彼を宙に支えていた力が消え失せた。彼は数メートルの距離を自由落下しながら、大上段に構えた大剣を体ごと反転させて振り下ろした。その先にあるのは、没個性、性質の悪い人形と呼ぶべき魔神。大剣が、叩きつけられた。

キン

金属音が空に響き 大剣が割れた。

天を シャルフを向く魔神。混ざりに混ざったヒトの体は、すぐさまそれを再構築。アリの顔が不思議と違和感なく浮き出してくる。そしてアリの姿で、落ちてくるシャルフを抱きとめた。

「シャルフルージエ。先代『天使』と、先代『神子』の子の間に生まれた、力と智を受け継ぐ者」

魔神から放たれるアリの声は、抱かれたシャルフをびくんと痙攣させる。

「百年前、世界の毒と呼ばれた天使は『風』の属性を持ち、見た目の細さでは考えられない筋力で以って、あらゆるものを打ち砕く剛力を発揮したという。」

同じく、天使に一年かけずに殲滅された神子は『自然』の法を操り、エルフという種族故の長寿とそれ故の博識さで自然、とりわけ植物を味方につけたという」

魔神はシャルフを大地にそつと降ろした。

「そして、百年前の戦争で、神子の軍勢を圧倒した天使軍は神子を生け捕りにし、その美貌に心奪われた天使は、彼の者を凌辱した」  
その言葉に、生気を失っていたシャルフの顔が、自然と怒りへと動いていた。

「そして生まれた子は女。ハーフェルフ。天使率いるヴァルルジェ軍は、天使の生存を危険視。天使は女兒が生まれたことにより、軍の不満を解消すべく神子を殺す。そして神子の子を育て、その先に――」

「止める」

シャルフの弱々しい怒気が、この場に響いた。

「俺の記憶を……！」

シャルフは涙を流しながら立ちあがり、ア ril の姿をした魔神の首を掴んだ。

魔神は止まらない。

「そしてその子と、死ぬまでの間毎日のように交わり合った」

魔神の首を、ア ril の姿をした魔神の首を絞め続けるシャルフ。

魔神は止まらない。

「そして生まれる子供。一人目は男。片腕がない状態で生まれてきた。近親相姦がタブーと呼ばれる所以だ。奇形児が生まれやすい。そんな中生まれた二人目の子は、五体満足でそのまま王宮で育てられた。その子の名は、シャルフルージェ」

魔神の首を絞めるシャルフの手。震え、力が籠らない。

「後数年を王の下で暮らし、生まれてくる五体不満足な弟妹たちを

外へ逃がし、そして来た王の病死。そして反乱。公的に認められた唯一の王子は、その時行方を眩ました」

シャルフの腕は、もう魔神の首にはない。

「そして五十年。エルフの血を四分の一受け継ぎ、剛力の血を半分受け継ぐ者は、生きていて　そして、ア Ril という少女に母の面影を見た」

語られるシャルフの出自。

聞き手はヴァインと涙を流すシャルフ。俯く氷水は蚊帳の外。

「彼女は七歳の身でありながら、突如現れた見かけは青年に、慈母のように接し、子のように慕った。顔は陶磁のように美しく、触れれば壊れるように繊細だった。それらが彼の母を思い出させた。そして数年、少女は彼が成長しないことに気付き、また彼も秘密を打ち明けた」

ア Ril が、十年近く会っていないシャルフのことを、一目で気付いた理由。

その姿は、人間の一年に相当する程度にしか成長していなかった。

「そして彼女の前からいなくなり、十年後、戻ってきた」

そこで魔神の話は終わる。

間違いない。今の話は、

シャルフの記憶を読んだもの。

話の継ぎ目が、まさしく彼の主観。

今の話を聞き、不謹慎だと思ふ理性とは別に、謎が氷解したと心が躍る。

いなくなり、ヒュネーと取引を交わすシャルフ。幼くない精神で、十年前のあの男と張り合った。老年同士の、対等な関係。

そしてヴァル＝ルージェへ潜入する。五十を数える少年が潜入し、伸し上がる。変わらない外見をどうやって隠したかは知らないが、印象を変える方法はいくらでもある。最終地位が副団長だったのも、王城での活動期間を絞ったからかもしれない。

そしてあの魔の巣窟で、剣を奪取する機会を待ち続けていた。血

気に逸る少年ではなく、落ち着き払った老年だったならば。何もおかしくはなかったのではないか。

そこに小さく佇むシャルフ。

俯けた顔は、髪に隠れて見えはしない。

「なんで、どうしてだ？ どうしてお前はそんなことを……？」

ヴァインの口から、問いかけの言葉が出た。

どうしても分からない。どうしてこの魔神は、こんなことをするのか。

「どうして？ 簡単さ」

それは、アリの顔で、人間という物が凝縮されたその芯で答えた。

「こうした方が、おもしろいだろう？」

ヒトの残酷さを、その神は、間違いなく得ていた。

## 五章　かくて戦乱収束す

文献　英雄の力

### ・属性

事物の持つ『根本的性質』。

何かに強く、何かに弱く。

何れにも強く、何れにも弱く。

それ単体では性質しか持たない。

過去の天使は、他の英雄らの力によって戦況を大きく左右されたという。

例……熱い、冷たい、速いなど。

### ・法則

空間を掌握する『覆せない規則』。

そこにある絶対の支配者。

属性を従属させ、法則の上で属性を現象として表す。

力は総じて扱いが難しく、神子は扱いに慣れる戦争後期ほど強い傾向がある。

例……成長など。

### ・生物

属性を持ち、法則の中で『生きる物』。

生き物を使役し、その特性を具現する。

属性と法則に従属しながら、それを凌駕する力を有する。

生物使役は、一人の悪魔を軍に、群を全にたらしめる力である。

例……獣、魚、虫など。

## 五章 1

コンコン。

ノックの音を響かせ、氷水の部屋の前に立つ。

魔神との邂逅から五日。

生き残った三人ではあるが、シャルフはあの後修羅の形相で姿を消し、未だ見つかっていない。十中八九魔神を探しているだろう。彼には理性など残っていない。勝てるかどうかは問題でなく、ただその溢れんばかりの怒りの発散するところを求めている。

ヴァインは三日かけてミーティアへと戻ってきていた。行きの半分という速度だが、その代償として馬が二度と使えない程衰弱していた。無理に乗りまわした結果。順当とも言える。

また、ヴァインに背負われ入城した氷水は、泣いて一切動かなかった。彼女はヴァインが残っていた馬に乗せ、手綱を引いて無理やり連れ帰っていた。

氷水は心身衰弱していて、戻ってきてから 戻る最中も 飲まず食わず、部屋に閉じこもって泣いている。心配に思った知人やア ril の上役などが様子を見に行けば、「罰」や「罪」と言った単語を呟いていたそう。

唯一平静を保つヴァインだが、まともに話せる一人と言うことで丸一日事情を聞かれ、馬に乗り続けていたこともあり、一日開けた今でも疲労の色は濃い。

そんな彼も、ついに業を煮やした。

「開けるぞ」

中の返事を待たず、ヴァインは扉を開ける。

昼だと言うのに、部屋は暗い。カーテンは締めきられ、蠟燭ろうそくなどの灯りの類は点いていない。

部屋の隅では布団にくるまった氷水が、すすり泣きをしながら「罪、罰」などと呟いている。

ヴァインは左手に火を灯すと氷水に近づき、その布団を一気に剥いだ。

怯えるように顔を上げる氷水。ヴァインの炎に照らされた顔は、目元には隈がくつきりと表れ、頬も瘦けていた。

「いいか、一度だけ言っただけでやる」

彼は苛立つように右の手で氷水の襟を掴むと、自分の顔の位置まで引き上げた。

「立て、この腑抜け!!」

突き飛ばすように右手を放すと、氷水はガクンと崩れ落ちる。

「いいか、五日、五日だ。俺は五日待った。腑抜けたテムエの代わりに、報告から何やら全てやった。あいつが死んだことは悲しい。だが、誰だって親しい人間との死別はある。皆が皆そうやってたら社会つてものは成り立たねえんだよ。誰だって乗り越える！ 生者がいつまでグズってんじゃねえ！」

氷水はうんともすんとも言わない。ヴァインは続けて捲し立てる。「なんでお前はまだそこにいるんだ？ お前にとってあいつは、その程度の存在なのか？ 死んだ奴の思いを代弁するなんて、ガラにもねえが言っただけ。あいつはお前がそこで泣き叫ぶのを良しとするのか？ そうじゃねえだろ？ ぜってえこう言う。『私のために泣かないでくれ』ってよオ。団員たちもそう。誰もかれも、善い人ばかり。善人すぎる。俺にだって分かるくらいだ。より長くだいお前が、分からないはずないよなあ」

「……」

彼の挑発めいた励ましも、氷水の心に届かない

「……てめえはそれでも、泣き叫ぶだけなのか？」

ヴァインが初めて悲しげに、声を押さえて言った。

「シャルフのように怒り狂い、復讐しようとは思わないのか？ 魔神が憎くないのか？」

俺はな……憎いよ。憎悪の炎に身を任せようと思いたくはなる程度に」

常々冷静な印象の彼と相反する言葉と、その穏やかな声に秘められた激情に、氷水はようやく身動きする程度だが動揺を見せた。

「魔神が憎い。人の命をただの快楽で刈り取る奴が憎い。失われる？可能性？を、もつたいたく思う。可能性は、進化だ。進化とは可能性の果てだ。」

だから可能性の潰えた愚者は殺すし、前途有望なガキには援助する」

彼の眼は　　ヴァル＝ルージエの貴族たち　　アリの妹ミリル  
彼らを遠くに見ていた。

「魔神が憎い。可能性の　未来の存在しない進化の極致であるアイツが憎い。俺の持っていないものを持っている、アイツが憎い。お前はどうかんだ？　お前はお前の理由で、アイツが憎いだろう？　憎くないはずがないだろう？」

俯く氷水。

「……………いよ」

「アア？」

「憎いよ」

口から静かに言葉が漏れる。

「憎い、憎い。でも、でも、でも！」

声は徐々に熱を帯びる。涸れたはずの涙が、再び噴き出す。涙が顔を覆う。

「でも！　罪！　罰なの！　私が、私がこの世界に来たのも！　ア  
リルが死んだのも！　私が親友を助けられなかったから！　私がそ  
れを忘れて楽しんでいたから！　私のせいなの！　私がいなかった  
らこうはならなかった！　私がこんなじゃなきゃそうはならなかつ  
たの！　私への罰なの！　それに巻き込まれてアリルは死んだの！  
！」

「テメエの所為じゃねえ。あれは別格だ。誰であつても回避は不可  
能。殺すこともできん。そう、言うなら運が悪かった」

「だから、罪なの。私がいたから、不運が、罰が……………！」



涙を流し、いじけるように頭を抱える氷水。怯える子供のように頭を押さえ、髪をかき乱す。

「罪も罰も知るか！ ハッ！ ふざけんな！ そんなモン誰が決める？ 神か？ この世界に語られる三神サマか？ んなわきゃねえだろ。神がいるなら、存在しているなら、親父をこの手で殺した俺は、どうして裁かれない！」

ヴァインの言葉に、氷水が嗚咽を止めた。

ヴァインは思わず言ってしまった言葉に顔をしかめ、出来る限り冷静に言葉を続けた。

「十年前 俺の一族は、その知識欲の対象もヒトを求めた。俺を含めあいつらには躊躇も後悔も、見据えるべきその先もない。全員が全員、研究者でありながら気狂いで計算高く、そして？ 今？ しか見ていなかった。

一族は人を攫い、生とは何かを知ろうと思ってしまった。人体実験。どうすれば人は生きていけるのか、殺すことで逆説的に確かめていった。生きたまま体を焼き、血を抜き、内臓を抉り……そうして生と死の境界を捉えていった。

そんな時だ。俺は一人の少女と会った」

氷水身動きしない。静聴しているようにも、気付いていないようにも見えた。

「そいつはな、言っただよ。

『どうしてこんなことをするの？ 死にたくない。私は家族と一緒に静かに暮らしたい』

そしてそいつは、力を使った。そいつは俺の一族のような、純粋血統じゃない。洗練された力を持っていないはずだった。だがそいつは、そいつの持っていた『火』の力は、一族の『炎』に匹敵する力を見せた。俺はその時、初めて『可能性』を見た。天才という、万の可能性でようやく生まれる価値に。

だが一族の人間は、その先にあるものを見ずに、今そこにあるものしか見なかった。突然変異という神秘を解き明かすことしか見な

かった。だから、な……」

そこでヴァインは、突如渴いた笑いを部屋に響かせた。

「ハハッ。ハハハッ！ ハハハハハ！」

俺は一族に弓を引こうと考えた。一族の言いなりで愚かにも力を使うだけだった俺の、唯一の反抗心。でもな……」

嘆くように、悲しむように、彼は言う。

「俺はその時、逆らえなかった。頭の隅の理性が、『ここで一族を敵に回して生き残れるはずがない』と、そう囁いたんだ。俺は動けなかった。」

俺は俺の弱さを知っていたし、俺の精神的弱さもそこで知った。

だめなんだよそれじゃ。

俺はその女が殺されるのを遠くから見るだけだった。そして俺が行った償いはただ一つ。

一族の皆殺しだ」

クク、クククと狂気に触れたように、彼は歪んだ顔で、嗤う嗤う、悲しみをその笑みに滲ませて。

「ああ、そうだ、一人ずつ、一人ずつ、燃やすのは一瞬だ、仲間さえ呼ばなければ、最後の子供である俺が負けるはずがないんだから。燃やして熔かして焼いて炙って、アイツラを、アイツラにその罪を償わせてやった。そう、そうだ、そうして俺は――」

父親を、この手で燃やしたんだ。

ヴァインの独白。僅かな沈黙。狂気から醒めたヴァインは、穏やかに続ける。

「そう、俺にとって可能性は羨望だ。進化へと至る唯一の希望だ。俺ができなかったそれをやってくれる力への道だ。だから、だから、俺は可能性を狩るアイツが憎い。そして、――」

氷水の首を掴んで持ち上げる。

「何もしない、お前がニクイ。」

力はあるだろ？ 可能性はあるだろ？ さあ、立てよ。望みがあろうが無かるうが、ここで立ちあがらなけりやお前……俺が殺すぞ」

ヴァインはその腕に力を込める。うな垂れる氷水に抵抗の気配は一切ない。腕は沈み、顔は涙を流すのみ。

「……………」

声が、聞こえた。

ヴァインの耳に、かすれるように声が。

手に込める力を彼は緩めた。氷水を壁に押し付け、崩れ落ちそうな体を壁に押し付け立たせる。氷水の唇が、ほんの僅かに動く。

「あなたは悪くない」

その言葉は、父を殺した彼の罪に対する彼女の思い

完全に気を失い倒れる氷水を、彼はそのまま捨て置き、そつと部屋を出た。

「お前は、お前は……………」

彼の言葉に続きはない。

## 五章 2

暗闇。ノックの音。

光。扉の開く音。

炎。彼女に話しかける声。

氷水は疲労感から朦朧としていた。意識は混濁し、身体は眠ろうとする。それを氷水は、「友が死んでも眠ろうとする浅ましい人間」とし、肌を爪を立てて無理に覚醒。馬上での疲れに上乗せするように一日を終え、そしてヴァインとの会話に至っていた。

臆気な意識はヴァインとの会話をぼんやりとしか覚えていなかった。

罪、罰、ヴァイン、憎い、魔神、魔神、魔神、憎い、憎い、憎い、ヴァイン、悪くない……

ぐるぐると回る言葉たち。夢現ゆめうつにそれらを咀嚼し、氷水は眠りから目を覚ます。

「！」

目を覚ますと、目の前に合ったのは絨毯だった。  
なんで と思いながら、手を突く氷水。

「っ ！？」

ひきつるような痛みが腕から発せられる。咄嗟に腕を引き、頭から絨毯に埋まる。

見れば腕の表面はボロボロに削がれ、垂れた血が腕の上で凝固し赤のストライプを描いていた。

そこで「ああ……」と彼女は思い出した。

私は、無力だ。

この世界へやってきたときの決意。友への贖罪。それを忘れ。ア ril の死を悼む自分。友への懺悔。それすら睡眠欲に負けてしまっ

仇への執念。怒りも憎しみもない。あるのは虚無。ぼつかりと空いた心の奥。

無力、無力、無力。

決意も完遂できない弱き意志。

友の仇を討つこともできない自らの無能。

「あは、は……」

氷水は笑う。

「私は、無力なんだ……」

涙を流しながら、嗚咽をこらえながら、一人、笑う。

だめだよ、皆。

真っ白な空間。

何も見えない聞こえない感じない。

一人にしないでよ。

誰もいない。一人ぼっち。

私も連れてってよ。

遠くから、声が。遠くに、人が。

私だけ、一人だけなんて……

「嫌だ……!!」

覚醒する。

氷水は床にうつ伏せ。同じ体勢で寝ていた。

目には涙の跡。

身体は未だ重い。肉体が空腹を訴える。

氷水は未だそんなことを感じる自らの身体を見て、笑う。

「はは。もう、いいや……」

このまま……死のう。

「何がだ？」

部屋に誰かいた。

「……誰？」

「人の声も忘れやがったか」

『誰か』は氷水の髪を掴み、乱暴に面を上げさせた。おもて

「はっ、おはよう神子サマ。もうお昼時ですぜ」

ヴァインはそう言っただけで彼女の腹のしたに足を入れると、「よっ」という掛け声とともに足を上げ、そのまま彼女をベッドの上に蹴り上げた。

氷水は抵抗なく、すぽんと厚い布団にダイブした。

「ヴァイン……」

赤い髪、赤い目、褐色の肌に、頬にはタトゥー。紛れもなくヴァインだ。

「なんだ？ 記憶まで混乱してんのか？」

笑うヴァインは、どかつと部屋の脇に置いてあった椅子に座り、足を組んで氷水を見下すように視線を寄こす。

「ふん。で、何がもういいんだ？」

問いかけるヴァインに、氷水は答えを返さない。無言を貫くと、ヴァインが呆れたように言ってきた。

「どうせこのまま何もせずに死のうとか、ロクでもないこと考えてたんだろっ？」

「なんっ！？」

「見りゃわかる。お前、自分がわかりやすい性格してるってこと、いい加減自覚した方がいいぞ？」

羞恥心に思わず赤くなる氷水だが、自分にまだそんな感情が残っていたのかと、嫌悪感が頭を冷静にさせた。

「別に。あなたには関係ないでしょう？」

冷静になった頭は、自らへの怒りをそのまま彼にぶつけてしまう。「ア ril も騎士団も、皆いなくなつた。なのにどうして私だけここにいなきやいけないの？ 私も死なせてよ。ねえ？ これの何が悪いっていうの？」

全部身勝手な自分が悪い。そう分かっている。でも、止まらなかつた。

「あなたは平気なんでしょうね。皆あなたと関わりはなかったからあなたは傷つかないものね。だからそうやって上から私に声をかけれるんだ。慰めてやるよ、なんて風に。あなたの勝手を押し付けないで」

暴言を涼しい顔で受け流すヴァイン。

「それだけか？」

あまつさえ耳垢を指でほじくる様子に、氷水の怒りは否が応にも増した。

「ふざけないで！ あなたはなんでそうなの！？ なんで皆のこと悲しんであげられないの？ 他人じゃないでしょ？ 少しでも話したでしょ？ なんでそんな風にいられるの？ なんで？ なんで？ なんで！？」

氷水の叫声に、彼はうるさそうに顔をしかめるだけだった。

ぐっ……と息を吸い、続けて声を発そうとしたところ、狙いすませたかのようにヴァインが返事を滑り込ませる。

「一昨日のこと、覚えてないようだな」

「なんのこと？」

「いや、いい。」

では問いに答えよう。

理由は『既に悲しんだから』だ」

男は不遜な態度を崩さない。悲しんだようにも見えず、困惑する氷水。

「てめえはいつまで引きずってるつもりだ。あれから七日たったんだぞ？ 葬式も終わってる。皆今を生きるために動き出している。お前だけだ、何もしないのは」

見下したように笑うヴァイン。

ギリと歯を食いしばった氷水に、彼は思い出したように言った。  
「そうそう……覚えてようとなかろうと、約束は果たしてもらっぜ」

彼は立ちあがり、ベッドに座る氷水まで近づくと　一息に蹴り飛ばした。

「え」

腹を蹴られ身体が宙へ浮く。

部屋を転がる氷水。王城の客間を使つてあるだけあり、少々暴れるには問題ない広さがあつた。四肢で身体を支え、ヴァインを見上げる。目の前に迫っていた。

「死ね」

次は腕を振り上げ、炎を纏わせる。避ける間もなく腹に拳が入り、氷水の何も入っていない胃を刺激する。

「がはっ……」

唾。遅れて吐しゃ物が口から漏れた。胃酸のツンとした臭いが立ち込める。ヴァインはそれを見無視。拳の形を変えて彼女の腹を鷲掴みにし、彼女を上へと持ち上げた。

彼は逆の拳を振り上げる。腹を掴む手、振り上げる拳。共に纏う炎がどんどん大きく、濃くなる。魔法の影響の薄い氷水を侵食する密度。炙られる腹、迫る拳　炎。

氷水は何も考えず、考えれず、顔を逸らしてそれを避ける。

頬を掠める炎が、彼女の頬をぴりぴりと焦がす。

ヴァインが彼女の動きを見て、ニイと笑った。

「死にたいんじゃないのか？」

彼はそう言うとはつと手を放し、彼女を落とす。

喉に残る吐しゃ物を撒く氷水。そしてその頭を踏みつぶすヴァイン。ほんの僅かに気を遣つたのか、潰す時は側面から鼻を地面にぶつけないようにだった。

「別に……」

「関係ない、なんて言うなよ？」

考えていることとは違つたが、答えず無言を通す。

「自分の理性と、身体の生存本能は別。違う違う。確かに事実なんだが、本当に絶望している人間がそんな反射に従う訳がない。俺は



見てきた。拷問された人間が自ら喜んで自身の首を掻く切るところを。俺は見えてきた。そんな人間が五万といたことを。

お前はまだ、絶望しきっていない。生を享受している。眼が死んでない。死に切っていないんだよ。お前は生きたいんだ。俺が今からそれを証明してやる」

そう言っただけ彼は移動し、部屋の扉を開けた

「神子様……！」

多数の声。

部屋の外にいたのは、城のメイドや町の人間たち。氷水と関わりのあった人間たちがそこにいた。

「見るよコイツラ。神子さまが死にそうって吹聴したら蟻のように集<sup>たか</sup>ってきたぜ。皆ご苦労なこった」

そう言うヴァインを睨みつける者も何人かいる。だが多くの人間はそれよりも氷水に眼を遣った。

「大丈夫かいヒミナちゃん」

「この男に変なことされてないだろうね？」

「もう遅いって」

「神子様死ぬなんて言わないでください」

「ア ril さんの死は悲しいですが、どうか立ち止まらないで……！」

「彼女もそう願っているはずです」

数々の言葉が投げかけられる。言葉の雨を浴び、そして今の自分の見苦しさ、不甲斐なさに自己嫌悪。

「見るよ」

ヴァインが彼らを示す。

「罪とか罰とか……誰が気にしてんだ？」

誰も気にしていない。

気にするのは、私だけ。

ヴァインが近づき、群れる皆を裂く。倒れている氷水の前まで来ると、先ほどまでとは打って変わって顎をそつと持ち上げた。

赤の瞳が、氷水の眼を見つめる。

「気付く。罪も罰も、んなもんは自らを律する枷だ。てめえのはそれに自己弁護を混ぜてるだけだ。理由にしているだけだ。言い訳にしているだけだ。お前の過去に何があつたかは知らないが、ちゃんとそれを見る。事実だけ見つめ直せ。そんな言葉に縋って逃げるな」彼の初めての真摯な言葉が氷水の心に染み

「あつ……」

ようやく、過去、彼女の死を直視できた。

なんで私がこんな目に！　なんで私が死ぬの！　なんで！？　なんで！？　なんで！？　

理不尽を嘆く言葉。

それは誰かを非難するものではなく　恐怖を遠ざける叫び。

ようやく彼女は、真実に気付いた。

「あああ……！」

眼から涙が止まらない。

私はあの子の死を、私の、ああ、ああ……！

気付けばヴァインの懷で泣いていた。

彼はそれを突き放すようなことはせず、そつと背を撫でた。氷水が泣きやむまでずつといてくれた。

「落ち着いたら、アリの家に来い。ミリルも待っている」

彼はそう言い残し、皆に囲まれる氷水から去った。

彼の眼は、我が子を見る父のように穏やかだった。

そして彼の眼は、仄かに笑う氷水を映していた。

## 五章 3

「来たか」

ヴァインの声。そこはアリの家。

「遅かったなシャルフ」

そこにはこけた頬を晒すシャルフの姿。

彼は無言で部屋へ入れるよう促した。

灯り漏れる小さな家屋。今は夜だった。

ヴァインが扉を開けると、ミリルと氷水がいた。

「お兄ちゃん……」

ミリルが心配そうに声をかける。

隣に座る氷水も同じような視線を向けるが、彼女自身も頬はこけて、どちらを心配すべきなのか咄嗟には判断できないだろう。

「とりあえず座れ。飯はミリルが作ってくれている」

彼に促されるまま進むシャルフ。アリのベッドだったところに幽鬼のように気配を見せず、うつすらと座りこむ。

ミリルがずっと机の上の皿をシャルフへと勧めた。

「……」

それを受け取り食すシャルフ。しかしその動きは決められた動作を淡々としているだけであり、食事というより栄養補給と言った方がしっくりとくる。

彼が食べ終わるまで、皆静かに待った。

食器を脇に置く。それをミリルが回収し、ヴァインが話を始めた。

「さてシャルフよ。一応聞くが……魔神は見つかったか？」

焦点の合わない視線。無言。

「だろうな。見つかったりやてめえは死んでるもんなア」

ヴァインの挑発にも一切の動きを見せない。

「……、分かったよ、本題だ。

三人で魔神を殺すぞ」

シャルフの眼が、刃のようにギラつく。

「……本当に、できるの？」

不安の声を上げる氷水。ヴァインは慎重に言葉を続ける。

「……賭けだ。勝率は三分と踏んでいる。乗るも自由だし、乗らないのも自由だ」

高いとはいえない。だが、相手を考えると低い訳でもない。

三割の勝率。あらゆる力を持つであろう相手に三割。

シャルフはスツと眼を閉じた。

「話を聞こう」

始めて言葉を発す。

「いいねえ、乗り気だねえ。ヒミナ、お前は？」

ヒミナ　と、名前で呼ぶ。

「私はやる。止めないと、皆死んでしまうから……」

決意に満ちた眼。

「いいだろう。作戦は簡単だ。俺が足止めで、お前らが止めを差す。以上だ」

「具体的な作戦は？」

「俺がお前の力を受けて《重力》を発生。全力で奴にぶつける。そうすれば奴は、あのバカでかい獣の姿は取れないはずだ。自重で潰れる。恐らくヒトか、それくらいの大さに収まる。そうすればお前らの剣術も意味があるだろうし、戦いやすいだろう。俺は重力の制御に全力をかけて、奴の化け物染みた　いや、化け物だったなその行動力を押さえこむ。そこをお前らが叩く。シンプルだろ？」

一見通用しそうな策ではあるが……

「ダメだな」

一言、シャルフが斬って捨てた。

「神子の力ではどうやっても傷を与えられん。俺の力でもダメージがあつたのかあやしいんだ。どうにもならんぞ」

思い出すのは必殺の一撃。振り下ろした巨剣が折れた感触。

閉じたシャルフの目の中で、未だ瞳はギラギラに光っていた。

「だろうな。だからこそお前らは全力であれを殺しにかかれ。時間を稼げ。俺がトドメを刺す準備ができるまで」

「何かあるの……？」

不安そうな声をあげる氷水。もちろん、と言う顔でヴァインは語る。

「だが内容は伏せさせてもらう。アイツには心を読む能力がある。対峙する以上、相手も殺し殺されに來ているってことだ。トドメの一撃の存在を知ろうとも、逃げて帰ることはないだろう。問題は、心を読む能力というのがどこまで使えるのか」

ヴァインは僅かに空を仰ぐ。

「今考えていることを読むってのなら俺がその存在を伏せれるかどうかには勝機がかかっている。そしてそも中身全てを見れるのなら、俺たちに勝機はハナっからない。この場合どうしようもないことだ。諦めてくれ。だが、その道を潜り抜けられたのなら俺が殺す。一瞬で。再生だとか、盾だとか、そんな異能を遣わせる前に」

ミシと音が出るほどに、拳をきつくきつく握りしめるヴァイン。彼の覚悟は伝わった。

目を開くシャルフ。目には深い憎悪と理性の光が宿っていた。

「いいだろう。だが、あれをどうやって探し出す？」

「……推測だが、アレは呼べば出てくる」

片眉を吊り上げるシャルフ。

「それで出るならとつくに」

「いや、正しくは？俺？が呼べば」

「お前が？」

訝るシャルフと氷水。

「どういうこと、ヴァイン？」

「アイツは俺を認めた。俺を奇異な人間だと。あれはあらゆる異能を持っているという超常の存在だ。俺みたいなのやつに何か仕掛けをしてもおかしくない。あいつに言わせれば『それがおもしろそうだから』になるのだろう。普通とは違う俺が、普通ではないアイツを

呼ぶ。それをアイツはおもしろい何かの前触れだとは考えないだろうか？」

おもしろさを求めるという魔神。

魔神が認めた、ただの人間とは違うヴァイン。

ありえるのかもしれない。

「まあモノは試した。やってダメなら、俺がバカでしたので済む。

二日後、南門に集合。そこから一時間ほど下って、そこでやるだけやるのでどうだ？」

二人は頷いた。

翌日。シャルフはヒュネーの所へと向かっていた。

自分がいない間の情勢と新たな剣の注文、そして　どうやって自分を見つけ、手紙を運んだのか。

シャルフは体に鞭打ち、修羅のごとく山野を駆けていた。食べるものは最小限、魔獣の肉を喰らい身体に取り込みただがむしやりに走りまわっていた。自分にも行き先が分からないのに、他人がそれも都合よく使者が見つけられるとは思わない。

ヒュネーの邸宅をそういった用向きで尋ねたのだが、既に先客がいた。

「間に合ったようだな、最後の一枚が」

「だがそれが何の役に立つ？　話を聞く限り魔神には……」

「いいんだ、これで。運が良ければ役に立つかもしれない程度だから」

紛れもなくヴァインとヒュネーの会話だった。

「ヒュネー、邪魔するぞ」

メイドなどは顔パスで、ここまで一人で辿り着いた。ヴァインが既にいるというのも入り口で聞いていたが……

「何の話だ？」

シャルフが問うと、ヴァインは手に持った白い短剣をくるくると

宙に放り投げてキャッチする。

「超高温で溶けない短剣。彼の望んだ品だ。私が準備できる最高の物　プラチナでできている。無論、形成に火を使っていることから絶対溶けない訳じゃないが……」

ヒュネーが苦そうに答える。

「分かっている。俺の瞬間火力より低いかは謎だが、それでいいんだよ。出来る限りでな」

ヴァインはそれで「じゃあな」といいながら去って行き　立ち止まった。

「どうした？」

「いや、シャルフに一つ言い忘れたことがあってな」

そしてシャルフとヒュネーは、ヴァインの言葉に目を見開く。

「それは……本当なのか？」

「推測だよ、推測。使えるかもしれないから今伝えただろうが。」

後でヒミナにも言って試しとけ。使えるなら……それで魔神を殺せ」  
そして今度こそ彼はその場を去って行った。

驚きに静寂が広がるが、いち早くヒュネーが言葉を発した。

「……さて、シャルフ。お前は何の用だ？」

シャルフも彼の問いかけに、心を落ち着かせ答える。

「剣だ。折れず曲がらず、出来る限り頑丈なのをくれ。サイズは通常でいい」

シャルフが言うと、ふっとヒュネーが笑った。

「どうした？」

「いや、あの男の言うとおりだと思ってな」

そう言うと彼は、机の脇から一振りの長剣を持ち出した。

「ヴァインから話があった。お前がそういう剣を頼むだろうから、先に準備している」

そう言って渡された長剣は、要望に沿いそうな、装飾のない無骨な剣だった。

「やつはどこまで先を見ているのやら」

ヒュネーは遠い顔をする。シャルフは移りそうになる感傷を、頭かぶりを振って振りはらう。

「知らん。それよりヒュネー。どうやって森にいた俺へ手紙を？」

ヒュネーは現実に戻り、変わった様子なく答える。

「同じ手紙を持たせた人間を各所へ放った。これもヴァインからの要望だ。ミリルと会うよう仕向ければお前は帰ってくる、とな」

確かに届けられた手紙はミリルのことが書いてあった。アリルがいなくなつて様子がおかしいとか、そちらへ向かえ、とか。

そんなもんかとシャルフは息を吐き、最近の話を聞き始めた。

そして、並ぶ彼らの前には魔神の姿。

「皆さん、私を楽しませる準備はしてきましたか？」

魔神の声に彼らは。

「もちろん」

ヴァインの憎らしい笑みで答えたのだった。



## 五章 4

私は、

「私は、あなたを殺す。皆のために 私のために」

氷水は女神の剣を握りしめ、そつと呟いた。

剣は短剣へ。

氷水は逆手に構えた二つの短剣を握りしめ駆けだす。

打ち合わせはない。既に終わっているとも言えなし、全くしていいとも言えた。

氷水は左、シャルフは右。そしてヴァインは剣を構えた。

魔神が身体を膨張させ、獣の姿を取る。それはあの騎士団を喰らった巨体。都市からも視認できるようなサイズで、ちっけな彼らを踏み潰さんと足を持ち上げる。

「うおおああああああああ！」

ヴァインの声。彼の持つ剣はシャルフの力を受けた重力剣。その力を行使した。

彼の持てる力を存分に使った重力が巨大な獣を襲う。

重力操作により自重を増して叩き潰す、重力の秘儀。相手が重ければ重い程効果がある。

見る間に獣の足が震え、大地を鳴動させる。足は地から離れず、瞬く間に崩れ落ちた。

ファーストステップ、終了。

氷水は第一段階が成ったことを、獣が元の人型 アリルの姿を取るのを見て知った。

魔神の膨張を見ても動じず動き続けた氷水とシャルフ。ヴァインは変わらず重力で人型魔神の動きを制限し、残りの二人が両側から挟みこむ。

本来の獣型を行動不能にし、慣れていない人型に制限を加える形。さしもの？魔神？もこれでいくらか そんなことを思いながら

彼らは進む。

氷水の刃が牽制の一撃を首へと見舞う。

無論悠々躲され、短剣を持つ手を掴むように右腕が伸びる。しかしそれをもう一方の短剣で受け止める。刃で抗したというのに、その手は傷つく様子もない。

同時、背後から伸びるシャルフの剣が迫る。魔神はそれを受けるが大事と判断したのだらう。体を九十度反転させ、迫る大剣の腹を左腕で押してずらす。

長剣は衝撃と共に地面を破砕。飛び散る土塊つちくれに構わず、三者は動きを止めない。

氷水の牽制のはずの初撃は、防がれずに魔神へと迫る。

しかし

「その程度で傷つけられるほど、軟やわではありません」

人体の急所であるはずの首。そこへ放たれた短剣は、岩を前にしたかのように斬り裂くことなく、微動だにしない。

「人であって人でなく。神でありて神にあらず。魔神獣神獣王魔王。魔獣。それが私。私であって、私でないもの」

「神なら神らしく、上で、干渉せず、黙ってな、さいっ」

突き立てた短剣を、滑らすように腹へと沿わす。

顔を上げると、魔神の背面でシャルフと目が合う。シャルフはすでに踏み込んでおり、切り上げの姿勢が整っている。

今ッ！

女神の力における法則干渉。磁力短剣の多重力場に、斬り上げるシャルフの大剣が吸い上げられる。同じく、シャルフの大剣から発せられる重力。英雄の武器開放による、従者の限定能力だ。それが氷水の短剣を吸い付ける。

短剣は溜めのないゼロ距離からの一撃。威力自体は重力プラス磁力の弾き作用だけでそれほど強くはないが、これはシャルフの攻撃から逃がさないためのもの。シャルフの切り上げは重力における重しと磁力による引き寄せでプラマイゼロだが、剛力の為す斬り上げ

は磁力と重力で動きがブレない。弾きを寄せ付けず、<sup>バリイ</sup>衝撃を逃がす逆は短剣に押さえられる。形としては非常にいいように見える。だが、

ガッ　！

氷水の頭が、地へと叩きつけられる。

ここにきてもやはり、経験不足が神子という人外の足を引っ張る。牽制もなく抑えつけもなく、一直線に短剣を向かわせた結果、魔神の右腕はフリー。気を急いだ氷水が、無理に連携を取ろうとした結果起きた失敗。

魔神は氷水を押さえつけた右腕でそのまま側転。歯車が回るように、大剣から僅かに先んじる。

「っ！」

歯噛みするはイラレージュ。最初の交錯は様子見に徹するつもり、と漏らしていたのを聞き及んでいる。彼も氷水と同じく、変則的な動きに合わせているうちに、体が動いたのだろう。

しかし魔神は人でなく、その姿もまた人であって人でない。人体の急所など意味を為さない。その無造作な動きが、彼らの予定を狂わす。

二人から距離を取り、降り立った魔神。顔には冷や汗すらかいていない。

「これはこれは。さすがに私も焦りましたよ」

声は平坦で、あからさまに嘘だと分かる。

シャルフは魔神から目を離さぬまま、氷水の手を掴んで引きずり上げる。

「立てるか？」

「ええ」

二人の意志は変わらない。

氷水はシャルフに目くばせすると、彼も頷く。

シャルフは剣を左手に持ち替えると、氷水の後ろを走って魔神の横へと回り込む。

氷水が先に魔神へと進む。短剣は共に後ろに回され、振り切る準備は万端だ。

魔神は悠々と 氷水へと迫った。

武器の威力からも、そっちが狙われるのは百も承知。

だからこそ氷水は、後ろ手に持つ二振りの大剣で斬りかかった。

魔神の顔が、驚愕に彩られる

『あなたの力を？』

氷水は驚いた様子で、シャルフに聞き直した。

『ヴァインから聞いた話だ。『法則』というカテゴリの源泉が神子の主、女神の力の一端であるならば、女神の剣と定義されているその剣でも扱えるんじゃないか だそうだ。これで魔神の不意を突くつもりなんだろう。できるかどうかは半信半疑だが……』

シャルフはそう言って、右の手に嵌めたグローブを外す。掌には天使の僕の証があった。

『お前の証は？』と問いかけるシャルフに首の後ろを指す。それぞれ証のある場所は違うようだ。

首の後ろというのはあまり人に見せるような場所じゃないので好きではないんだけど。

彼女はそんなことを思いながら、どうするの、と問いかけた。

彼はそこに右手を翳し、魔力でもない何かをそこに注いだ。

氷水の身体に鳴動するその何か。

手に持った女神の剣にそれを注ぐ。

『これは……』

シャルフが感嘆の声を漏らす。氷水自身目を丸くした。

女神の剣が、大剣に変わっていた。

聞けばヴァインもこれを護神の剣で再現したらしい。

ならばと、それにさらに氷水の持つ磁力の特性を付与すれば

一対の大剣が、姿を現す。

それに宿すは磁力と重力。他者を束縛する二つの力。

二つの大剣が、左右から魔神を襲った。

氷水の細腕では振るえると思えないその剣は、重力操作により疑似的な軽量化している。衝撃に合わせて重量化することで本来剣が持つ力以上の威力を放つのだ。

魔神はそれを知ってか知らずか、腕で左右のそれらを押さえにかか。本来ならばそれであっさり止まる対の大剣は、そこで驚くほどの加速を得、魔神の腕を拉<sup>ひ</sup>ぎにいった。

大剣は磁力の力を用い、対の大剣は互いに引き寄せ合う。さらに重力操作で増加した重さが鉄のように魔神の身体を挟み込む。動きを止められる魔神だが、傷はない。

だがその程度で驚きはしない。想像の埒外存在であることは既に嫌と言うほど分かっている。

動きを止めた魔神の背後で、シャルフが大剣を振り降ろした。

これならば……という期待は、あっさりとふいにされる。

魔神は頭を傾げ、頭部への直撃を回避。そのまま身体に大剣が挟りこみ、その身体を地に沈める。肩は人のように内出血を起こしていた。

それはつまり、人とは違う防御能力を誇る魔神でも、人と同じように傷つくということだ。

彼女の目に光。突破口が見えてきた。

これなら、ヴァインの攻撃も……！

そして三人は、後ろで構えを崩さないヴァインの尻目に、苦しい舞踏をしつづけた。

数分か、十数分か、数十分か。

彼らは戦い続けた。未熟ながらも、習熟ながらも、異常ながらも。

そして未熟な彼女が倒れるころに、その男が。

「シャルフ！」

ヴァインの言葉に、素早く反応するシャルフ。崩れ落ちる氷水を攫い、彼は最後に魔神へと一太刀斬りかかると、その身に残る力を振り絞り、魔神を重力の枷で縛りつける。

「貴様も、これで終わりだな」

飛び退くシャルフの背後、ヴァインは炎の剣を魔神へと向けていた。

「死んでもらうぜ、魔神！」

彼の剣から迸った炎の龍は、魔神の本体であろうあの巨大な獣に匹敵せんサイズに膨らみ、喰らいつくように魔神へ迫った。

「その程度で」

ふつと失笑が聞こえるその瞬間、炎龍はその姿を無数に分かつ。そして炎の龍は魔神の頭上を旋回し、そこに特大の魔法陣を作り上げた。

「なっ……！」

見上げる魔神。魔法陣は瞬く間に完成。その陣は炎を触媒に、周囲の魔力を吸い上げ炎の衝撃波に変える術式。だが、そのサイズが通常に用いられるものの数百倍。威力もそれに比例する。

「死ぬ。これが俺の切り札だ」

魔法陣も詠唱もいらぬ、魔法の使い手たるヴァイン。彼がこの世界の『魔術』というものを、『魔法』という前提の下組み上げた特大術式。炎龍の咆哮が、今まさに一匹の獣へと放たれようとしていた。

だが、魔神とてただ受ける訳はない。重力に押しつぶされそうな身なれど、まだその人外は優に動ける。ヴァインへ接近し、その術式を止めることも可能だ。

立ちはだかるシャルフ。魔神と打ち合う。魔神の姿は、アリルだ。彼はそのことを胸に深く刻みつけながら、その相手をし続けた。

「どけ、シャルフ！」

ヴァインはそこで白金の短剣を抜いた。炎を纏わせ、魔神へと投げる。魔神がそれを払いのける瞬間を見計らい、シャルフは撤退。頭上の魔法陣がその力を解放する。

放たれる炎波。それは瞬く間に収束し　魔神を呑みこんだ。

それが収まった時残ったのは、一本の短剣だけだった。

## 五章 4（後書き）

やっつけほんとスミマセン。

展開は元から考えてた通りなんですがね……。



## 終章 果

「本当に行くの？」

問いかける氷水に、ヴァインは「ああ」と頷いた。

「んじゃ、例の通りに頼むぜ」

「分かった」

頷いたのはシャルフ。二人は一人で旅に出るヴァインを見送りに来ていた。

『なんであなたが出ていく必要があるの？』

問うた氷水に、ヴァインはやれやれと言わんばかりに肩を竦ませる。

『神子サマ、折角？悪魔？とされる奴がいなくなったのに、天使と神子、仲違いする可能性を残してどうすんだ？ この国だけじゃなく他からも分裂を狙われるぞ？ それならいつそ死んだことにして消えた方がいいだろ。証と力を伏せれば、知ってるやつにしか見分けはつかねえんだからよお』

そう言っただけは錆びた剣と、そして彼がいつも着ていた服を渡した。

目で問う彼女に、彼は言う。

『証だよ、証。「神子と天使は悪魔に対抗すべく共同戦線を張った。その過程で天使と悪魔は死に、神子が生き残った」それに信憑性を持たせるためのな。これを使って「国はその功績を称え天使の遺品を国宝とした」なんて話がありやあそれっぽく見えるだろ。まあそれこそが情報工作だ、なんて見方もできるがな』

クククとおもしろそうに彼は笑う。

『でもそれじゃあなた、武器はどうするの？』

『コイツがある』

彼が持ち出したのは、一振りの短剣。白金の短剣。

『まあ、魔法は使えなくとも魔術を使えばなんの問題もない。そこらの雑兵より俺の方が遥かに強い。これは厳然たる事実だ。心配するな、雑兵代表神子サマよ』

そして旅に出るヴァイン。二人はそれを静かに見送るが

来るはずのない人物の登場に、二人が声をあげ、ヴァインも同じく驚きに声を発した。

「ミリル！」

そこにいたのは魔道騎士団長アリル・クウェートの妹。ミリル・クウェート。彼女がひ弱な身体で大量の荷物を背負っていた。

「私も行きます。連れて行って下さい、ヴァインさん」

彼女の声は姉を彷彿させる凜とした声音。しかし彼女の矮躯は病弱で、旅をするにも向きはしない。

「おまえは身体が弱いだろう。……悪いことは言わん。止めとけ」

「そうよミリル。ここを出たら薬も……」

「やめるガキ！ 足手まといだ！」

止める三人。二人は心配しての声を上げ、ヴァインは何かにとり憑かれたように叫び、同行を拒否する。

しかし意志は揺るがない。

「どうせ同じだわ。薬もあまり効かなくなっているもの。お姉ちゃんもいなくなつたし、私はこのまま死ぬくらいなら、外の世界を見て死にたい」

言葉少なに、少女は自分の思いを伝えた。

しかし少女の言葉に違和感を覚えた人間が二人。

「死ぬ……だと？」

ヴァインとシャルフ。それぞれミリルを見、そして動じない氷水へと目を向けた。

「どうということだ？」

彼女も観念した様子で、話し始めた。

「元の病弱な身体が原因で、あまり長くはないそうよ。三年持てばいい方って。二人の都合で今まで黙っていたわ。……ごめん」

二人。その二人とは言うまでもなくこの場にいないもう一人と本人だろう。

「だから、大丈夫。いまさら死なんて怖くないわ。おねえちゃんと同じところにいけるなら嬉しいくらいなもの」

淡々と言う彼女は、年齢を越えた恐ろしさを滲ませていた。

「ならなおさらダメだ！ お前はここに……」

否定の言葉を放つヴァインが、急に言葉を区切り苦虫を噛んだかのように口許を結んだ。

「……分かった、来い」

シャルフの反論を黙殺し、歩き出すヴァイン。ついてくるミリル。氷水はミリルの判断に任せることにしたのか、何も言わない。

ただ、一言だけ。

「いつてらっしゃい」

その言葉を背に、二人は旅に出た。

そして

「いやあ、大変おもしろいお嬢さんですね」

魔神が現れた。

町を離れてしばらくのところだった。彼はその場で、頭を地につけ少女に謝った。

「すまん」

彼の持つ短剣。それは瞬く間に姿を変え、女の姿に。目の前の少女を成長させたような姿形を取ったのだ。

「おねえ……ちゃん……？」

少女の眩き。アリの姿を取る魔神は鷹揚と頷いた。

「ええ。あなたの姉。私の中でちゃんと息づいていますよ?」

そうやって自分を示す魔神。幼き少女は、気丈にもそれに相対し問うた。

「あなたが魔神?」

「そうです。あなたの姉を喰らった魔神です」

どうして　と、掠れた声にならない声が少女の口から漏れた。

「私が生きていることがですか?　彼女が私の中で生きていることですか?」

ニタアと、その身体の主が絶対に行わないであろう残虐な笑みを浮かべると、魔神は傍らに跪くヴァインへ声を発した。

「ではヴァイン。あなたも言い訳をしたいでしょうから、どうぞ今のうちに」

そう言つて魔神は姿を消す。後には静寂が残された。

ミルルは何も問わない。ただ、頭を下げ続ける彼を見下ろすだけだった。

ヴァインがおずおずと話を始める。

「……アイツは魔神。お前の姉を喰った存在で、そして誰にも殺すことのできない、永劫の存在だ。そして災いを齎す『悪魔』。この世界における英雄の悪魔などとは比べ物にならない。あれは?例外?だ。」

アレは殺せない。俺たちはただアレの気の向くままに殺され喰われるだけの存在だ。だが、アレを楽しませることができれば時間稼ぎにはなる。だから俺は、アレの道化になった。二人を騙し、殺したという嘘の情報で世界に偽りの平穏を齎す。

だから　すまない」

巻き込んでしまつて。

お前を二人とともに、知らないままにしてやりたかった。

ヴァインはその言葉を口には出さない。もしバレても、言い訳はしないと決めていた。

自分だけが責め苦を受ければいいと。

全ては今のため。

あらゆる異能を持つという魔神。

呼んだら出る。

その通り。

だから彼は、魔神を呼び、取引を持ちかけた。

『俺が犠牲になるから、他の奴らには手を出すな』

代償は、絶えまない苦痛。発狂しない程度に、常時鈍い痛みが彼を襲う。

そして八百長を持ちかけた。

俺がお前を殺したように見せるから、お前は消えた振りをしてくれ　と

それが魔神との取引だった。

そして魔神はそれを履行した。

残ったのは、痛みと偽りの平和。

「それでも、私と対話するという発想に辿り着いた時点で、あなたは異常なのですよ」

隣に現れた魔神が、そのヴァインの葛藤を全てミリルに捻じ込んだ。

「あっ　！」

全てを理解したミリルは涙を流し、跪くヴァインに寄り添った。

ミリルは彼の思いを受け取り、自身も同じく語らずただ泣く。

自分の所為で一層辛い思いをさせて、ごめん。

皆のために一人で背負いこまないで、私も一緒に背負うから。

今まで気にかけてくれて、ありがとう。

そして彼らは、世界のいずこかへ消えた。

## 終章 果（後書き）

えーと、バッドエンドです。

こうするつもりで書いてました。

文章のアレさ加減上とても残念な話でしたが、お付き合い下さった方本当にありがとうございました。

電撃文庫換算で、270Pほどの作品です。

つまるところちよっと薄めのラノベ一冊程度。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6727m/>

---

三英雄と百年戦争

2011年8月18日03時12分発行